

# 天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅳ

～天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第5次）／清水谷遺跡（第3次）の調査～

2 0 0 0 • 3

三重県埋蔵文化財センター

## 序

三重県のはば中央部に位置する一志郡は、雲出川水系によって形成された肥沃な土壤に恵まれ、古来より高い文化を形成してきました。特に、この雲出川の支流・中村川の流域は、一志郡の中でも特に重要な文化を育んできた地域です。

最近でも、近鉄中川駅周辺の再開発事業に伴う発掘調査によって、大規模な灌漑施設の遺構や、我が国最古の墨書が記されたと考えられる土器が発見され、全国的な話題になったことは記憶に新しいところです。そのほかにも、全国的に見ても屈指の遺構・遺物が集中しており、三重県下の歴史を見る上でだけでなく、全国的に見ても重要な地域といえるのではないかでしょうか。

さて今回の報告書は、県道改良事業に伴って緊急発掘調査を実施しました天花寺城跡・小谷赤坂遺跡・清水谷遺跡を掲載しております。調査地の所在する天花寺地区は、前方後方墳である筒野古墳や天花寺廃寺などが造られている場所で、嬉野町内でも特に遺跡の集中する地域であります。また、平成7年度から当センターが継続している天花寺丘陵内遺跡群の発掘調査でも、当地域の歴史を解明する上で大きな成果を上げてきており、その重要性が再認識されているところであります。今回の発掘調査でも数多くの発見があり、そのことは再認識されました。しかし、このような貴重な遺跡が記録保存という形でしか残せないことは、誠に残念というほかありません。今回得られた成果をどのように活用していくかが、わたくしどもに与えられた今後の課題であると考えております。

調査にあたっては、地元のみなさまをはじめ、嬉野町役場、嬉野町教育委員会、県土整備部道路整備課・津地方県民局久居建設部などの関係機関から多大なご協力と暖かいご配慮を頂くことができました。文末とはなりましたが、みなさまの誠意あるご対応に心からのお礼を申し上げます。

2000年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 大井興生

## 例　　言

- 1 本書は、三重県一志郡嬉野町天花寺地内に所在する天花寺丘陵内遺跡群の第5次発掘調査報告書である。今回の調査対象地には天花寺城跡・小谷赤坂遺跡・清水谷遺跡が所在する。
- 2 調査は、一般地方道天花寺一志嬉野インター線地方特定道路整備工事に伴い実施したものである。調査にかかる費用は、県土整備部が全額負担した。
- 3 調査は平成10年度に実施した。調査体制は以下の通りである。

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター　調査第一課
	主　事　木野本和之　　臨時技術補助員　川崎志乃
土工担当	㈱三重県農業開発公社
- 4 現地調査は、担当者の他、森川常厚・大川操・松葉和也・濱辺一機（調査第一課）、松田久司・柴山圭子（資料普及グループ研修生）が参加し、担当者を補佐した。
- 5 本報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び資料普及グループが行った。遺構・遺物の写真は、木野本・川崎が撮影した。執筆は木野本・川崎が担当し、分担は毎次および文末に明記した。なお、全体の編集は木野本が行った。
- 6 調査にあたっては、嬉野町在住のみなさん、天華寺、天花寺自治会、嬉野町教育委員会および県土整備部道路整備課・津地方県民局久居建設部から多大な協力を受けたことを明記する。
- 7 現地調査および報告書作成にあたっては、山中章（三重大学）、和氣清章（嬉野町教育委員会）、伊勢野久好（一志町教育委員会）の各氏から有益なご教示を得た。
- 8 掘図の方位は、全て座標北（国土調査法による第VI系）で示している。なお、磁針方位は西偏6°20'（平成3年）、真北方位は西偏0°18'である。
- 9 掘図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。
- 10 本報告書での用語は、以下の通り統一した。  
つき…………「杯」「杯」があるが、「杯」を用いた。
- 11 本報告書の遺構番号は、第1次調査からの通番となっている。今回調査は、遺構番号271から付している（但し、当センター担当調査に限る）。また、番号の頭には、見た目の性格によって以下の略記号を付けた。

S D	溝	S H	…	豎穴住居	S B	…	掘立柱建物	S K	…	土坑
S X	…	土壤墓・火葬場	S Z	…	土塀	pit	…	ピット	…	柱穴
- 12 本書で報告した記録および遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。
- 13 スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。  
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

# 本文目次

I 前 言	.....	(木野本) 1
1 調査の契機	.....	1
2 調査の経過	.....	1
3 調査の方法	.....	2
II 位置と歴史的環境	.....	(木野本) 3
1 位 置	.....	3
2 歴史的環境	.....	3
III 調査の成果—遺構と遺物—	.....	(木野本・川崎) 10
1 調査区の地形と基本的層位	.....	(木野本) 10
2 検出した遺構	.....	(木野本) 10
a 弥生時代の遺構	.....	(川崎) 10
b 古墳時代の遺構	.....	(木野本) 24
c 奈良時代の遺構	.....	(木野本) 24
d 中～近世の遺構	.....	(木野本) 27
e 時期不明の遺構	.....	(木野本) 34
3 出土した遺物	.....	(川崎) 34
a 織文時代の遺物	.....	34
b 弥生時代の遺物	.....	34
c 古墳時代の遺物	.....	37
d 奈良時代の遺物	.....	37
e 中世の遺物	.....	44
IV 調査のまとめと検討	.....	(木野本・川崎) 48
1 弥生時代	.....	(川崎) 48
2 古墳時代	.....	(木野本) 53
3 奈良時代	.....	(木野本) 53
4 中・近世の天花丘陵	.....	(木野本) 54
5 遺跡名稱および範囲についての問題点	.....	(木野本) 55
6 小 結	.....	(木野本) 55

# 挿 図 目 次

第1図	調査地周辺主要遺跡	.....	5
第2図	調査地周辺地形図	.....	6
第3図	調査区位置図	.....	7
第4図	小谷赤坂遺跡東壁・北壁土層断面図	.....	8
第5図	清水谷遺跡北壁土層断面図	.....	9
第6図	遺構配置図	.....	11～12
第7図	竪穴住居SH284（上段）／SH273（下段）平面・断面・立面図	.....	13
第8図	竪穴住居SH282平面・断面・立面図	.....	15
第9図	竪穴住居SH283平面・断面・立面図	.....	16
第10図	竪穴住居SH288平面・断面・立面図（上段）／遺物出土状況平面・立面図（下段）	.....	17
第11図	竪穴住居SH274平面・立面図（上段）／SH286平面・断面図（下段）	.....	18
第12図	竪穴住居SH279（上段）／SH287（下段）平面・断面図	.....	19
第13図	竪穴住居SH272平面・断面図	.....	20
第14図	竪穴住居SH316（上段）／SH317（下段）平面・断面図	.....	21
第15図	櫛持柱建物SB292平面・断面図	.....	22
第16図	土坑SK319平面・断面図	.....	22
第17図	溝SD281断面図	.....	22
第18図	環濠SD306・307平面・断面図	.....	23
第19図	環濠SD307遺物出土状況図	.....	23
第20図	竪穴住居SH311平面・断面図	.....	24
第21図	土壤墓SX290平面・立面図	.....	25
第22図	竪穴住居SH275平面図（上段）／掘立柱建物SB293平面・断面図（下段）	.....	26
第23図	竪穴住居SH312・313・314平面・断面図	.....	27
第24図	細SD280平面・断面図	.....	28
第25図	火葬場SX297・305・308・309・310平面・断面図	.....	30
第26図	土壙SZ1・溝SD2平面図	.....	31

第27図	土壘S Z 1・溝S D 2・堀S D 2 8 0断面図	32
第28図	出土遺物実測図①	38
第29図	出土遺物実測図②	39
第30図	出土遺物実測図③	40
第31図	出土遺物実測図④	41
第32図	出土遺物実測図⑤	42
第33図	出土遺物実測図⑥	43
第34図	遺構変遷図	49
第35図	環濠位置想定図	50
第36図	サスカイト出土地点	52
第37図	サスカイト剝片計測グラフ	52
第38図	調査内サスカイト組成表	52

## 表 目 次

第1表	遺構一覧表	33
第2表	出土遺物観察表①	45
第3表	出土遺物観察表②	46
第4表	出土遺物観察表③	47
第5表	堅穴住居観察表	48

## 写真図版目次

表 紙	中村川のはとりから天花寺丘陵を望む	57
図版1	調査前風景	58
図版2	調査後風景(1)	59
図版3	調査後風景(2)	60
図版4	調査の状況	61
図版5	弥生時代の遺構(1)	62
図版6	弥生時代の遺構(2)	63
図版7	弥生時代の遺構(3)	64
図版8	弥生時代の遺構(4)	65
図版9	弥生時代の遺構(5)	66
図版10	弥生時代の遺構(6)	67
図版11	弥生時代の遺構(7)	68
図版12	遺物出土状況(1)	69
図版13	遺物出土状況(2)／古墳時代の遺構	70
図版14	奈良時代の遺構(1)	71
図版15	奈良時代の遺構(2)	72
図版16	天花寺城関連遺構	73
図版17	火葬場群	74
図版18	天花寺城廃絶後の遺構(1)	75
図版19	天花寺城廃絶後の遺構(2)	76
図版20	出土遺物(1)	77
図版21	出土遺物(2)	78
図版22	出土遺物(3)	79
図版23	出土遺物(4)	80
図版24	天花寺丘陵東端部垂直写真	81

## 付 図

- 1 天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第5次）調査区平面図（1：200）
- 2 清水谷遺跡（第3次）調査区平面図（1：200）

# I 前 言

## 1 調査に至る経緯

近畿自動車道伊勢線は、伊勢と近畿・東海地方を結ぶ幹線道路である。この道路は、越野町・一志町が境を接する天王寺丘陵の西部を通過する。利用者の増加にともない平成8年に、「一志越野インター チェンジ（以下I.C.）」が越野町島田地内に設置された。今回の調査対象地は、越野町天王寺地内を通過する県道松阪一志線と新設I.C.を結ぶアクセス道路用地内である。松阪一志線は、松阪市西部と一志郡を結ぶ道路であるが、越野町宮古から一志地内にかけて対向困難な狭隘部が連続するにも関わらず、交通量が多く極めて不便かつ危険な状況にある。この状況を解消するためのバイパス道路が計画され、丘陵東端で前述のアクセス道路と接続されることになった。したがって、事業名こそ別であるが、この2つの道路新設工事は密接な関連を持っている。

この工事によって、天王寺丘陵東部は大規模な現状変更がなされることとなった。しかし、天王寺丘陵およびその周辺は遺跡の密集地帯であり、工事によって破壊を余儀なくされる遺跡が多数存在する。

平成7年度からは、当センターが継続的な調査を開始し、今回で4年目を迎えた<sup>1)</sup>。なお、これまでに調査が実施された遺跡は下記の通りである。

- ・天王寺丘陵南東裾部
- 天王寺北瀬古遺跡（縄文時代～近世）
- ・天王寺丘陵部
- 清水谷古墳群（古墳時代）
- 清水谷遺跡（旧石器～中世）
- 天王寺城跡（中世）
- 小谷赤坂遺跡（縄文時代～近世）
- ・天王寺丘陵北裾部
- 堀田遺跡（縄文時代～中世）

今年度は、天王寺城跡・小谷赤坂遺跡に加え清水谷遺跡の調査も行った。原因事業が異なる越野町教育委員会等が実施したものと含めると、天王寺城跡・小谷赤坂遺跡の調査が第5次、清水谷遺跡の調査が第3次となる<sup>2)</sup>。

## 2 調査の経過

### a 調査経過概要

8月中旬から樹木の伐開・草刈り作業、同月24日から重機による表土除去を開始。9月8日からは、人力掘削を開始した。調査区の形が複雑で排土の移動等に手間どり、途中何回かの中斷を余儀なくされたものの、掘削作業は極めて順調に進行した。開墾による破壊が著しく、思ったほど遺構が確認されなかった部分もあったが、清水谷遺跡で弥生時代後期の二重環濠を確認するという大きな成果を上げ、11月末にはほぼすべての掘削作業を終了することができた。11月28日には現地説明会を開催し、参加者は130名を数えた。12月上旬には遺構実測を実施。同月中旬には全ての調査を終了した。最終的な調査面積は4,800m<sup>2</sup>であった。

調査期間中、台風襲来で調査区も若干の被害を受けた。大変暑い日や「布引おろし」が吹きつける寒い日もあった。特に11月は記録的な少雨で、地面が硬化し検出・掘削に苦労する日が続き、疲労の漏まりやすい調査であった。しかし、作業員のみなさんの熱心な意欲と暖かいご配慮に励まされながら、無事調査を終了することができた。ここにご芳名を記し、心から感謝の意を表したい。

船木文雄、横山孝史、沢井寛男、田中實男、小林嘉兵衛、笠井安夫、近藤喜一、阪井昭一、長谷川照雄、小川守、山崎衛、松浦ノブ子、長谷川ハルエ、関山恭子、関本栄一、萩原幸子、中西保男、中西アイ子、辻アサ子、葛西政利、長谷川つじ子、山下秀範、脇田訓旨、小坂幸生、北川すみへ、垣内幸子、内田みづ子、脇田洋子、山崎よし子、藤川治司、三浦勇三、松田きみ

### b 調査日誌（抄）

- 8月24日 天王寺境内の表土除去開始。堅穴住居4棟を確認。
- 8月26日 新たに堅穴住居2棟を確認。
- 8月27日 土壠S Z 1の平板測量。第1次調査で作成した図面と合成する。

9月1日 天華寺境内部分の小地区設定。  
9月8日 人力掘削開始。土墨の清掃。  
9月11日 土墨清掃終了。写真撮影。  
9月14日 土墨・溝の調査後平板測量。  
9月15日 重機により土墨を除去。下層から堅穴住居5棟確認。  
9月18日 台風の影響で作業中止（～24日）。  
9月25日 道路下で土墨に伴う溝（SD280）を確認。  
10月8日 清水谷地区的表土除去開始。  
10月13日 小谷赤坂地区の表土除去再開。  
10月19日 遺構掘削作業再開。堅穴住居群の調査進む。表土除去終了部分の小地区設定。  
10月22日 重機による表土除去が完了。1次調査区西側は、削平激しく遺構は希薄。  
10月26日 土壌墓（SX290）を確認。須恵器杯出土。  
10月30日 堅穴住居群の写真撮影。国土座標点の移動作業（農業開発公社）。

11月4日 調査区東端にて弥生後期の掘立柱建物1棟を確認。  
11月6日 清水谷地区的遺構検出開始。焼土坑1基確認。  
11月9日 奈良時代の掘立柱建物1棟確認。  
11月10日 焼土坑群の掘削。削平が激しい。調査区中央で、2条の大溝（SD306・307）を確認。  
11月11日 大溝（SD306）の掘削開始。埋土上で焼土坑1基確認。  
11月12日 大溝（SD306）ほぼ完掘。時期を決定できる遺物なし。大溝（SD307）掘削開始。  
11月16日 大溝（SD307）完掘。最下層から待望の遺物が出土。弥生後期の甕であることから、弥生集落の環濠であることが確定する。

#### <註>

- 1 調査の詳細については下記文献を参照のこと。
  - ・伊藤裕徳『天華寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 1996）
  - ・高田恵理子『天華寺丘陵内遺跡群発掘調査報告II』（三重県埋蔵文化財センター 1997）
  - ・中川明・西村美幸『堀田遺跡第3次発掘調査概報』（三重県埋蔵文化財センター 1996）

11月17日 環濠（SD307）の東側で堅穴住居（SH311）を確認。時期は弥生後期。  
11月18日 新たに堅穴住居2棟（SH312・SH313）と掘立柱建物1棟（SB314）確認。時期は奈良。  
11月20日 掘削作業終了。調査区全景写真撮影。  
11月25日 報道機関等への資料提供。  
11月28日 現地説明会を開催。参加者130名。  
11月30日 遺構実測開始（～12/14）。  
12月14日 土層断面実測。これで全調査が終了。

c 文化財保護法等にかかる諸通知  
文化財保護法（以下、「法」）等にかかる諸通知は、以下により文化庁長官等あてに行ってている。

- ・法第57条の3 第1項（文化庁長官宛）  
平成7年7月20日付道建第825号（県知事通知）
- ・法第98条の2 第1項（文化庁長官宛）  
平成10年10月14日付教生第1106号（県教育長通知）
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（久居警察署長宛）  
平成11年2月1日付教生第8-43号（県教育長通知）

#### 3 調査の方法

##### a 小地区設定について

今回の調査では、調査区内を4m四方の枠目で区切ることによって小地区を設定した。北からアルファベット、東から数字を付け、枠目の北東隅交点をその小地区的符号とした。なお、この小地区設定は国土座標軸とは無関係である。

##### b 遺構図面について

調査区の平面図は1/20で作成している。また、堅穴住居などの出土遺物を伴うような遺構は、個別に1/10の実測図を作成したものもある。

（木野本和之）

- 2 清水谷遺跡は、昭和62年度に天華寺工業団地造成工事に伴い、「一志町・嬉野町遺跡調査会」が清水谷古墳の調査と周辺のトレシチ調査（第1次）、平成2年度には町道（現在は県道に昇格）建設工事に伴い、嬉野町教育委員会が調査を実施している（第2次）。詳細は下記文献参照。
  - ・伊勢野久好「清水谷古墳の調査」（伊勢野久好ほか『天華寺山一志町・嬉野町遺跡調査会 1991』）
  - ・和氣清章『三重県一志郡嬉野町埋蔵文化財調査概要』平成2年度（嬉野町教育委員会 1991）

## II 位置と歴史的環境

### 1 位 置

天花寺城跡・小谷赤坂遺跡・清水谷遺跡は、一志郡嬉野町天花寺字小谷・赤坂・清水谷に所在する。これらの遺跡が含まれる天花寺丘陵内遺跡群は、嬉野町と一志町が境を接する通称「小島山」から東方へ派生する標高約37mの平坦な天花寺丘陵上に位置する。現在の天花寺集落は、この丘陵東側から少し離れた微高地に立地する。「天花寺」の地名の元となつた「天華寺」は、かつては現在の集落内に所在していたと伝えられるが、今ではこの丘陵上にある。この天華寺の境内の一部および西側が、今回の調査区である。

この天花寺丘陵を挟んで北側には雲出川が、東側には中村川が流れ、両河川は丘陵の北東約1.5kmの地点で合流する。従って、調査地は狭義には中村川下流域、広義には雲出川中流域に相当する。雲出川は、一志郡のほぼ中央部を流れ、これをさかのれば青山峠を越え、旧伊賀国を経て旧大和国に至る。雲出川流域には、伊勢と畿内を結ぶ古道が存在していた<sup>1</sup>。古道は、調査地南方約1kmに所在する一志集落付近を通過していたとされ、周辺は古代における交通の要衝であったと考えられる。

### 2 歴史的環境

#### (1) 調査地周辺の歴史的環境の概略

雲出川中流域および中村川下流域の歴史的環境については、『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』等に詳細な記述があるので、それを参照されたい<sup>2</sup>。したがって本項では、天花寺丘陵および周辺の歴史的環境の概略を若干述べることとする。

嬉野町内の雲出川・中村川によって形成された台地・平野には、各時代にわたる様々な遺跡の展開がみられ、旧伊勢國の中でも極めて重要な遺跡が多数存在する地域である。その中でも特筆されるのは、古墳時代前期に前方後方墳が集中的に造られたこと、古代寺院が密集することである。調査地南方の丘陵上にある筒野1号墳をはじめとして、向山古墳・西山1号墳・錦山古墳の4基（可能性のある庵ノ門古

墳を含めると5基）の前方後方墳が築かれた<sup>3</sup>。また、調査地を含むわずか1.4kmの範囲に天華寺庵寺<sup>4</sup>・中谷庵寺<sup>5</sup>・一志庵寺の3寺院が密集するほか、八太庵寺（班光寺跡）<sup>6</sup>・嬉野庵寺・上野庵寺<sup>7</sup>等の寺院跡が集中する。また、一志集落に「郡一」という字名が残り、前述の中谷庵寺と周辺の遺跡も含め、古代一志郡衙の候補地として注目されるようになった。このように、調査地周辺は嬉野町でも特に重要な遺跡が集中する地域であるといえる。

#### (2) 天花寺丘陵内遺跡群の概要

天花寺丘陵には、これまでに100基を超える群集墳をはじめとして、多數の遺跡の存在が知られていた。しかし、丘陵西部については、大規模開発によって遺跡の大部分が破壊を余儀なくされることとなり、事前の発掘調査が1986（昭和61年）から翌年にかけて実施された<sup>8</sup>。また、丘陵東部についても県道改良工事によって大規模な改変が加えられることとなり、1995（平成7）年度から当センターによる発掘調査が開始された。ここでは、これまでの調査成果を踏まえて天花寺丘陵の状況を概観する<sup>9</sup>。

#### 旧石器～縄文時代

旧石器時代は、遺構は確認されていないものの、清水谷遺跡で有舌尖頭器が出土している。縄文早期は、馬ノ瀬遺跡で陷穴状遺構や押型文土器が確認されているほか、小谷赤坂遺跡でも押型文土器が確認されている。同じく小谷赤坂遺跡で、縄文前期の块状耳飾が出土している。また、清水谷遺跡では縄文後期の土器片が確認されている。

#### 弥生時代

馬ノ瀬遺跡で中期後葉の竪穴住居2棟が確認されている。後期になると、小谷赤坂遺跡に集落が形成される。調査では、これまでに30棟以上の竪穴住居が確認されているが、嬉野町教育委員会による試掘調査結果から、遺跡はさらに北方に広がるものと考えられる<sup>10</sup>。また、後期末には西野遺跡で方形台状墓が築かれている。

#### 古墳時代

前期から後期にかけて、丘陵上には西野・片野池・馬ノ瀬・清水谷・赤坂・小谷などの古墳群が築造された。確認されているものだけで100基以上を数えるが、開墾時に破壊されたものを加えれば相当数の古墳が存在したものと考えられる。丘陵上の前・中期古墳群は円墳主体であるが、小谷33号墳のように「ハ」の字形に開く陸橋部分をもつ前方後方形の墳墓もあり、前述の前方後方墳群との関連を考えるうえで興味深い。後期には、西野5号墳のように金銅製馬具をはじめとする豊富な副葬品をもつ古墳も築造される。

#### 古代

奈良時代は、小谷赤坂遺跡で竪穴住居8棟・清水谷遺跡で竪穴住居2棟・掘立柱建物2棟が確認されている。第1次調査では竪穴住居埋土から銅筋帯の鉈尾部分が出土している。また、清水谷遺跡の第2次調査でも掘立柱建物が確認されている。これらの遺構は、同時期に丘陵下で展開される天華寺廃寺(S)・中谷廃寺(T)・堀田遺跡(43)<sup>1)</sup>との関連が注目される。

平安時代の遺跡の状況については、よくわかっていない。西野遺跡で銅製袴帶金具が出土しており、同時代の墳墓が想定されている程度である。

#### 中世

小谷赤坂遺跡では、40基を超える中世墓が確認され、14世紀頃から継続して集団墓地が造営されてき〈註〉

- 1 千田忠「横大路の歴史地理」・足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」（ともに上田正昭編『探訪古代の道』）法藏館 1988) など。
- 2 天花寺丘陵内遺跡群開進として、下記の文献がある。
  - (1)伊勢野久好ほか『天華寺山』一志町・嶺野町遺跡調査会 1991
  - (2)伊藤裕作『天華寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1996
  - (3)高田應理子『天華寺丘陵内遺跡群発掘調査報告II』三重県埋蔵文化財センター 1997
  - 3 伊勢野久好「三重県の前方後方墳」（『古代』86 1988）などを参照。
  - 4 山田猛「天華寺廃寺」（『昭和55年度県営国場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981）
  - 5 「中谷廃寺」（『嶺野町の遺跡』皇學館大學考古学研究会 1989）

たことが判明した。また、中世後期には、天華寺城が築かれる。城域は南北約500m、東西約430mの範囲に及び、丘陵東部全域を城域とする。調査の結果、この集団墓地は天華寺城と時期的に重なるように造営されており、城の廃絶後も継続されることが判明している。

#### 近世

天華寺城廃絶後、天華寺の占地に併い、方形の区画（天華寺旧境内）が設定された。区内では、参道の両脇から礫石埋納土坑が多数確認された。これは、当時の信仰を知る上で貴重な資料である。

#### 3 小 結

以上のように、天華寺丘陵内では幅広い時代の遺跡が確認されており、遅くとも縄文時代早期には人々の活動の跡が刻まれ、弥生時代には比較的規模の大きな集落が形成された。古墳時代に、前方後方墳をはじめとする大小の古墳が次々に築造された事実は、当地が伊勢地域内でも重要な地であったことを物語っている。古代は、周辺に全国的にも稀な寺院の「集中的分布」が示す通り、その重要性はさらに高まった。中世後期には、大名「北畠氏」の城館としても機能すると同時に、集団墓地としても機能していた。

このように、天華寺丘陵内および周辺は、時代を超えて重要な場所であったと言える。

（木野本和之）

6 伊勢野久好『玉光寺跡』一志町教育委員会 1991

7 和氣清章『上野高寺発掘調査報告』嬉野町教育委員会 1995

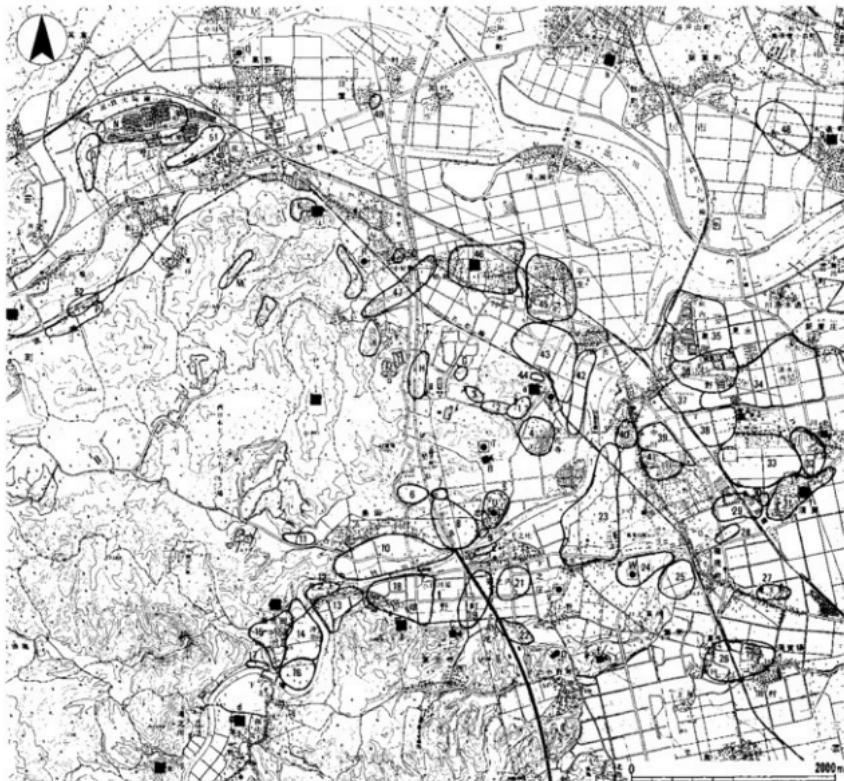
8 註2-(1)文献。

9 以下の部分は、特に示さない限り、註2文献の成果による。

10 和氣清章のご教示による。詳細は下記文献を参照。

和氣清章『町道小山宮古線建設に伴う探査調査報告』（嶺野町教育委員会 1990）

11 早川裕己『堀田遺跡』（『昭和56年度県営国場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1982）、中川明・西村美幸『堀田遺跡第3次発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1996



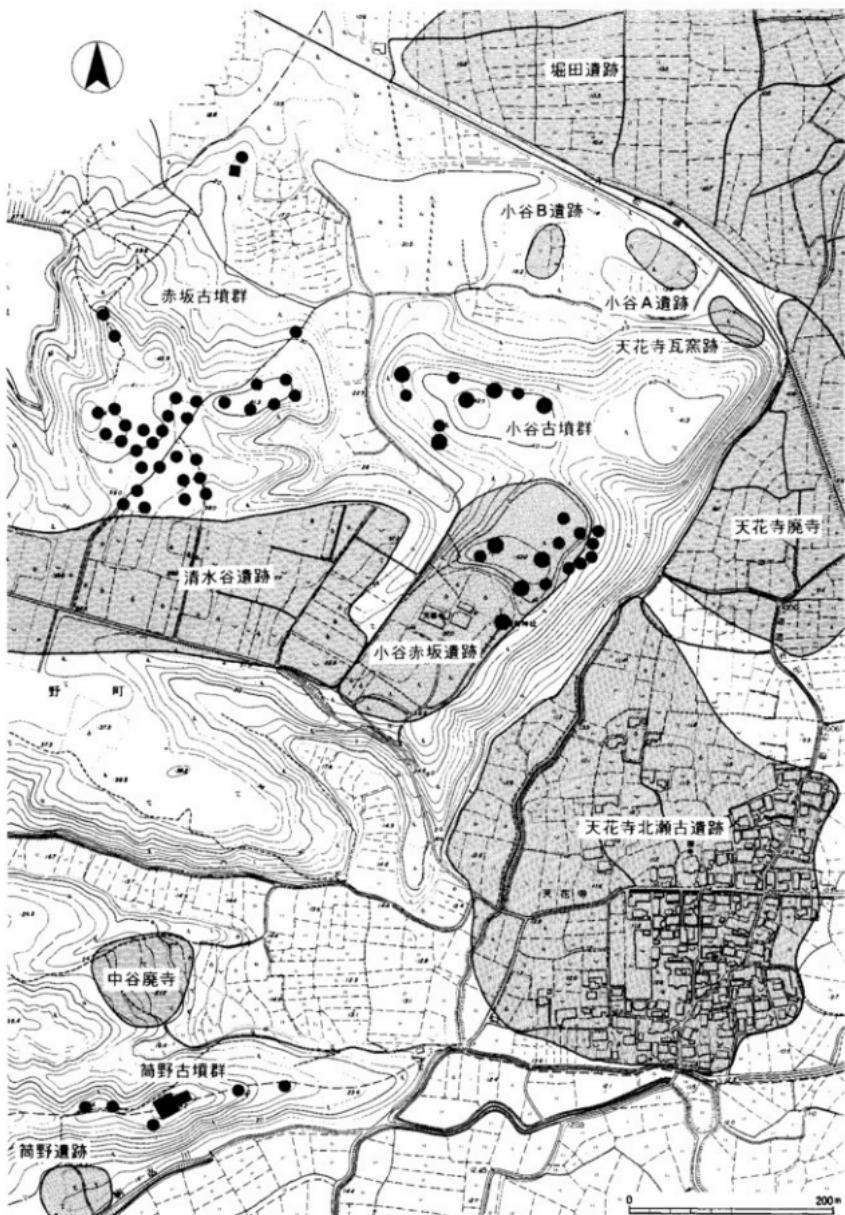
1. 小谷赤坂遺跡 2. 清水谷遺跡 3. 馬ノ瀬遺跡 4. 天花寺北斎古遺跡 5. 葵師寺北裏遺跡 6. 蛇龜橋遺跡 7. 烧野遺跡  
 8. 天保遺跡 9. 郡一遺跡 10. 上野垣内遺跡 11. 島田遺跡 12. 井之上遺跡 13. 間垣内遺跡 14. 弥五郎垣内遺跡  
 15. 釜生田遺跡 16. 天白遺跡 17. 辻垣内瓦窯跡群 18. 八田遺跡 19. 堀之内遺跡 20. 御所垣内遺跡 21. 下之庄遺跡  
 22. 中尾垣内遺跡 23. 下之庄東方遺跡 24. 燐野遺跡 25. 山神田遺跡 26. 田村西瀬古遺跡 27. 萩主野遺跡 28. 高くね遺跡  
 29. 荒野遺跡 30. 松葉遺跡 31. 天王垣内遺跡 32. 風ノ垣内遺跡 33. 川北清水道跡 34. 片部遺跡 35. 黒田遺跡  
 36. 野田遺跡 37. 貝戸遺跡 38. 正反田遺跡 39. 六反田遺跡 40. 針福遺跡 41. 一色垣内遺跡 42. 墓前遺跡 43. 堀田遺跡  
 44. 天花寺瓦窯跡 45. 平生遺跡 46. 片野遺跡 47. 無居本遺跡 48. 木造赤坂遺跡 49. 貝鏡遺跡 50. 唐木垣内遺跡  
 51. 田尻上野遺跡 52. 下名倉遺跡
- A. 西山1号墳 B. 箕野1号墳 C. 鎌山古墳 D. 上野1号墳 E. 向山古墳 F. 魔ノ門1号墳 G. 片野池古墳群 H. 西野古墳群  
 I. 小山古墳群 J. 中野山古墳群 K. 西出山古墳群 L. ヒジリ谷古墳群 M. 葵師谷古墳群 N. 上野山古墳群 O. 上野山孤塚古墳群  
 P. 下名倉古墳群 Q. 高寺庵寺 R. 八太庵寺 S. 天花寺庵寺 T. 中谷庵寺 U. 一志庵寺 V. 上野庵寺 W. 燐野庵寺  
 a. 天花寺城 b. 八田城 c. 釜生田城 d. 森本城 e. 淄之川城 f. 須賀城および積善寺跡 g. 木造城 h. 川方城 i. 八太城 j. 小山城  
 k. 長谷城 l. 片野館跡

■ = 前方後方墳・前方後円形墳墓

◎ = 古代寺院跡

■ = 中世城館跡

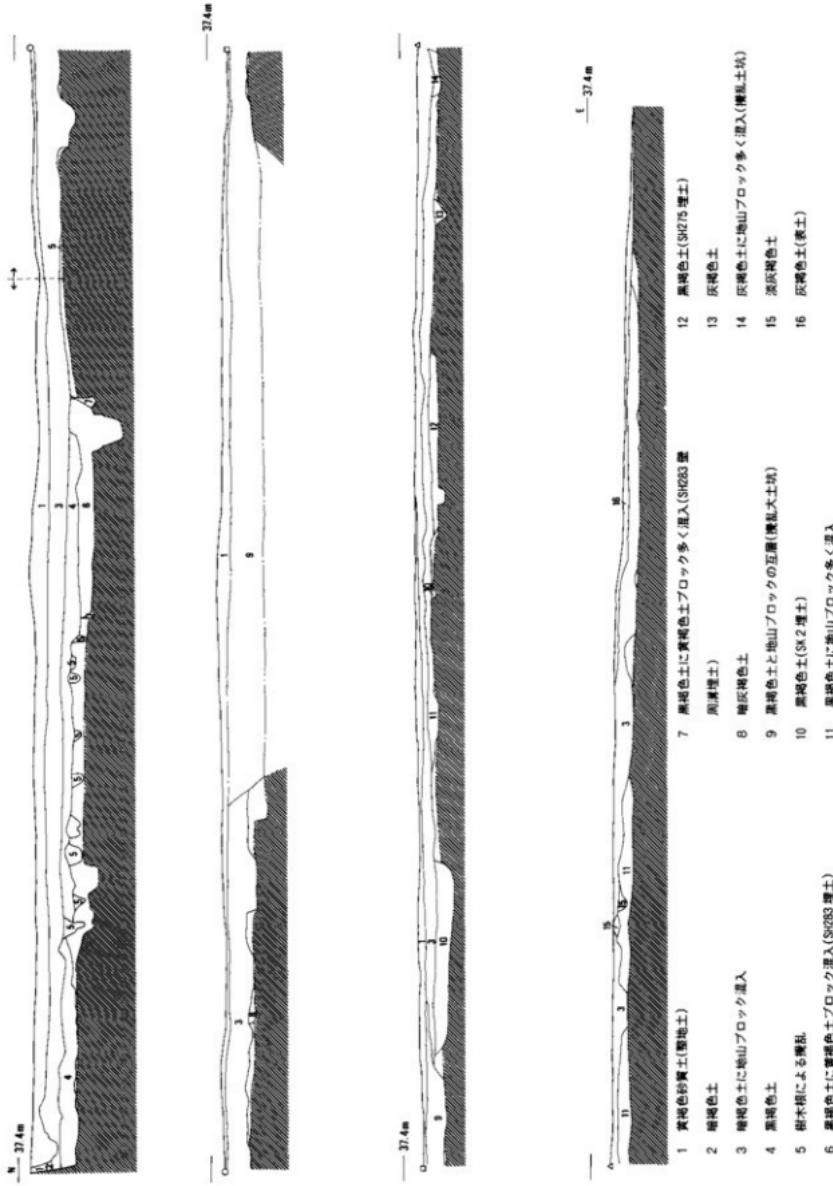
第1図 調査地周辺主要遺跡 1:50,000 (国土地理院 1:25,000「大仰」より)



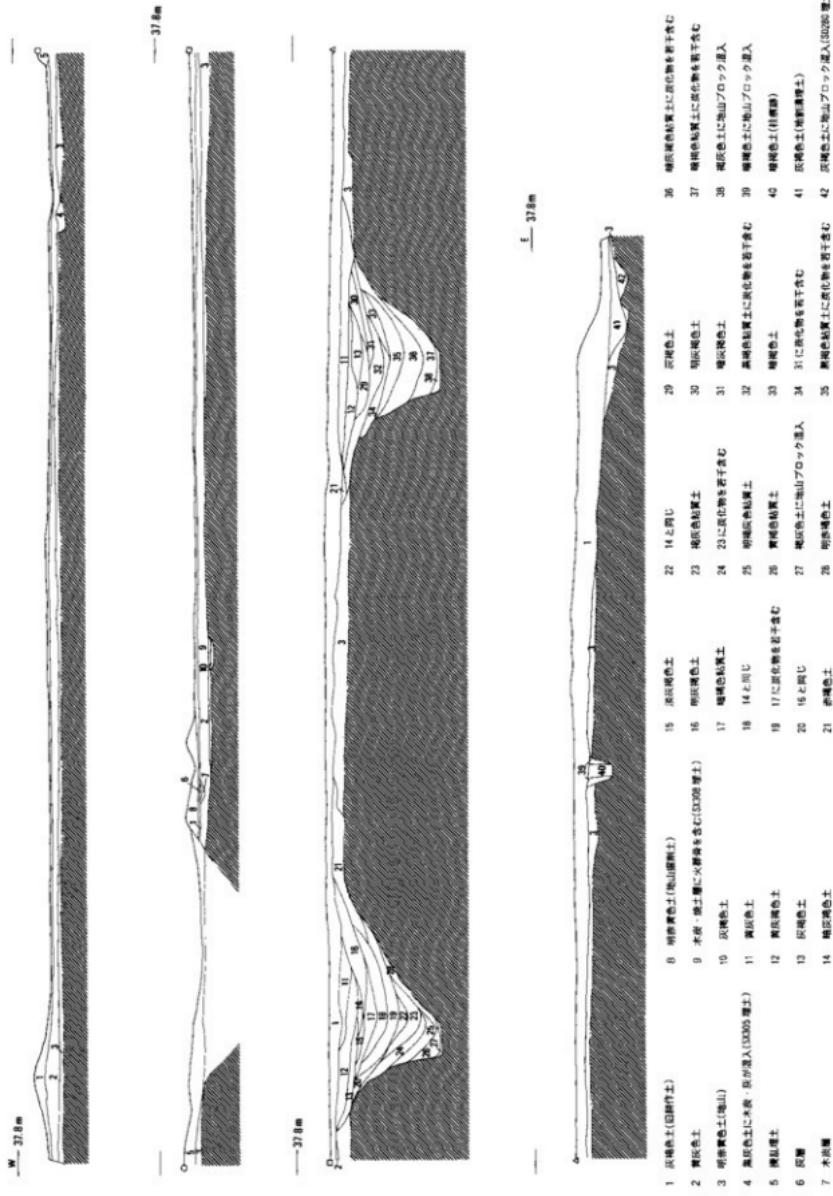
第2図 調査地周辺地形図 1:5,000 (堀野町都市計画図 1:2,500より)



第3図 調査区位置図 1:2,500 (『天花丘陵内遺跡群発掘調査報告』付図 1:1,000を一部改変)



第4図 小谷赤坂遺跡調査区東壁・北壁土層断面図 1:80



第5図 清水谷遺跡調査区北壁土層断面図 1:80

### III 調査の成果 —遺構と遺物—

#### 1 調査区の地形と基本層位

##### 調査区の地形

調査区は、標高約37mの丘陵上に位置している。地形は全体的に平坦であるが、東から西にかけてゆるやかに下降している。また、南側中央部は土取りのため大きく盛んだ部分があり、調査区北端と南端で1m程の比高差が生じている。

##### 小谷赤坂遺跡（第4図）

遺構検出面は、部分的に礫を含む明赤黄色系土である。この上層には暗褐色土の堆積が認められるものの、前述の明赤黄色系土がブロックで混入しており、自然堆積であるとは認めがたい。おそらくは、天寺城築城あるいは天寺寺古地の際に削平・整地しているためであろう。これは、竪穴住居が著しい削平状態で検出されたこと、調査区東端部では表土直下で遺構検出面に達することからも首肯される。

調査区西部では、黒褐色土（黒ボク）の層が見られた。この黒褐色土の層は、丘陵東端部（第1・4次調査区）でも見られた。ここは地形的に低い部分で、西側は北から入り込む谷に続く。したがって、この黒褐色土は、前述の削平・整地の影響を受けていない本来のものと考えられる。

##### 清水谷遺跡（第5図）

遺構検出面は、小谷赤坂遺跡と同じ明赤黄色系土である。しかし、清水谷遺跡は開墾痕跡で著しい削平を受け、ほぼ平坦な地形を呈していた。したがって、表土である旧耕作土直下が遺構検出面という状態であった。このことは、確認された焼土坑の埋土が、僅か数cmの深さしかなかったことからも首肯される。（木野本和之）

#### 2 検出した遺構

今回調査による検出遺構は、大きくは弥生時代、古墳時代、奈良時代、室町・戦国時代（中世）、江戸時代（近世）に分けられる。本項では、主な遺構について記述する。検出遺構の概略については、遺構一覧表（第1表）に示した。（木野本和之）

##### a 弥生時代の遺構

###### (1) 小谷赤坂遺跡

弥生時代の遺構は、竪穴住居13棟・棟持柱建物1棟・土坑1基・溝1条がある。時期的には、弥生時代後期初頭から前葉にかけての所産と考えられる。

竪穴住居の壁周溝内のPitに関しては、植物由来する搅乱を誤って遺構と認識している可能性があるものを含んでいることを予め断っておきたい。

竪穴住居SH284（第7図上段） 調査区北西部で検出した。平面的にはほぼ正方形のプランを呈するが、東西幅が南北幅よりやや広い。

壁周溝は所々途切れるが、全体に巡らせてある。また、北西部の竪穴住居内には、壁周溝状の溝が見られた。主柱穴が竪穴住居1棟分（4カ所）しか見られないことから、この遺構は建て替えではなく、北西方向への拡張と考えられる。

貯蔵穴は、南東壁面中央に壁面から少し距離を置いて位置し、中央部に向かって階段状に突出した部分をもつ。

炉は、貯蔵穴の中央とその反対側の壁面を結ぶ軸線上に造られている。炉内には、灰と細かい焼土が見られ、浅く窪む形状を呈する。完掘すると、弱い被熱痕跡が見られた。炉石は三日月状を呈し、竪穴住居の中央部側に据え付けられている。

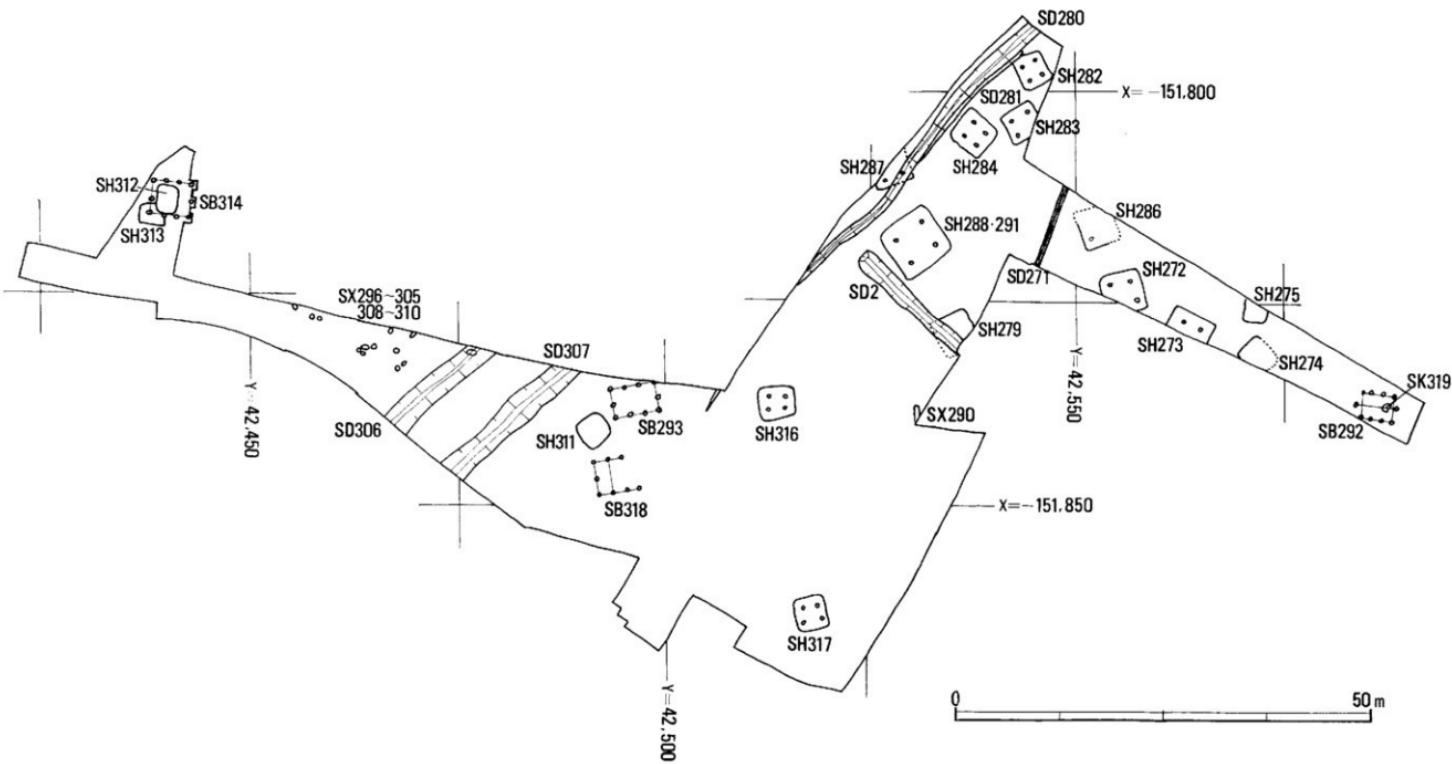
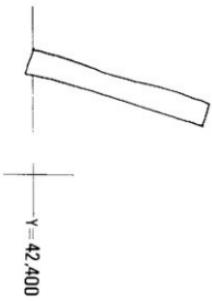
床面硬化部分は、貯蔵穴周辺部に見られた。

遺物は、床面直上で出土した。特に、壺(5)・甕(9)・(10)・(14)は残存状況もよく、口縁部が床面側を向いている点で共通している。

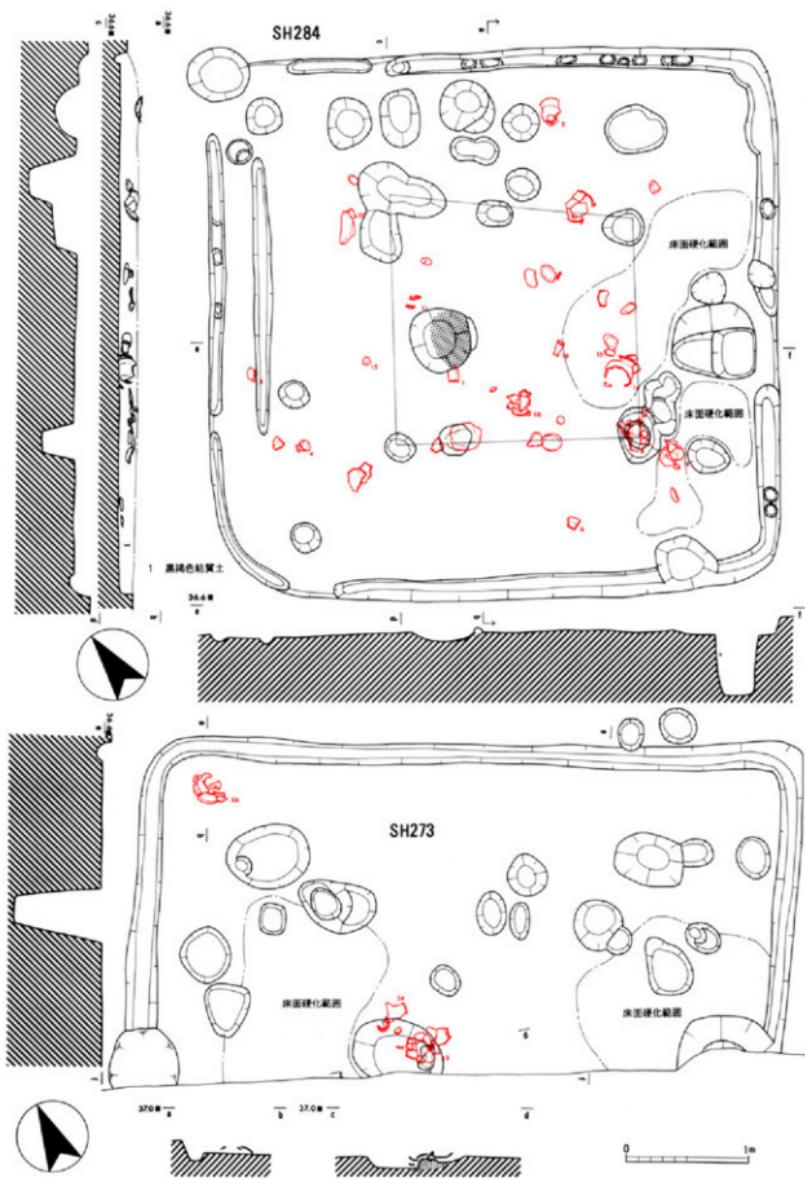
竪穴住居SH273（第7図下段） 調査区東寄りで検出した。遺構は、調査区の南壁に向かって広がっている。他の竪穴住居では、貯蔵穴や炉が竪穴住居のほぼ軸線上に乗っていることから、同様の形状に復元すると、遺構の北半分ほどを検出したことになる。

壁周溝は、壁面に沿って途切れることなく巡る。

貯蔵穴は、壁面から距離を置かずに隣接して造られ



第6図 遺構配置図 1:500



第7図 窪穴住居 SH284 (上段)・SH273 (下段) 平面・断面・立面図 1:40

ている。

炉は、貯蔵穴の中央とその反対側の壁面を結ぶ軸線上に位置する。浅く窪み、炉石が窓穴住居の中央部側に据え付けられている。完掘すると焼土が見られた。

床面硬化部分は、貯蔵穴周辺と炉から北西壁面にかけて見られた。

遺物には、炉石上を中心にまとまって出土した土器がある。壺(35)は、体部2カ所に焼成後穿孔が見られる。この他、北隅の床面上から高杯(36)が倒立状態で出土している。また、北主柱穴からは石鏡(39)が出土した。

竪穴住居SH282(第8図) 調査区北部で検出した。平面的には、ほぼ正方形プランを呈するが、南北幅が東西幅に比べやや広い。遺構はすでに全体的に削平を受けており、北西部分は特に浅い状態であった。

壁周溝は、ほぼ全体に巡らされている。貯蔵穴は南東部壁面の中央に隣接して設置されており、中央部に階段状に突出した部分を持つ。

主柱穴は4カ所確認できたが、北主柱穴のみ極端に浅い。

炉は、貯蔵穴の中央とその反対側の壁面を結んだ軸線上に造られている。

床面硬化部分は、貯蔵穴の周辺部分に見られる。

遺物は、壺(40)・(41)・甕(45)・高杯(46)を床面上に置かれたと考えられる状態で確認することができた。壺は、いずれも口縁部を下にして倒立していた。また、壁面と平行する形の自然石が2カ所で確認された。特に1カ所については、床面から浮いた状態であるもののレベルはほぼ同じであることから、住居の上部構造に伴うもの可能性が考えられる。

竪穴住居SH283(第9図) 調査区北部で検出した。遺構の一部は調査区東壁に向かって広がるが、壁面は一応4面とも確認することができた。平面的にはほぼ正方形プランを呈するが、東西幅が南北幅に比べてやや広い。

貯蔵穴は、一部が調査区外に広がっており、およそ半分を検出できた。南東壁面の中央部に壁面から距離を置いて設置されているが、中心部と西側に向

かって階段状に突出した部分をもつ。

炉は、貯蔵穴の中心とその反対側の壁面を結んだ軸線上に造られている。浅く窪む形状を呈する。炉石は三日月状を呈し、窓穴住居の中央部側に据え付けられている。なお、焼土は確認することができなかった。

遺物は、北西壁面沿いで出土した。

竪穴住居SH274(第11図上段) 調査区東寄りで検出し、調査区南壁に向かって広がっていく。後世の削平などによって、東・南壁面も確認できなかつた。しかし、北西壁面と北角・西角を確認できたことから、規模を推定することは可能である。

東西幅から南北幅を復元すると、ちょうど南壁面推定線の内側に土坑が存在し、これが貯蔵穴に相当するものと考えられる。

炉は、貯蔵穴の中心とその反対の壁面を結んだ軸線上に位置する。後世の削平によって残りが悪いが、焼土は窪み状によく残っていた。

床面硬化部分は、広範囲に広がっている。

遺物は、北角で高杯(61)が正立状態で出土した。

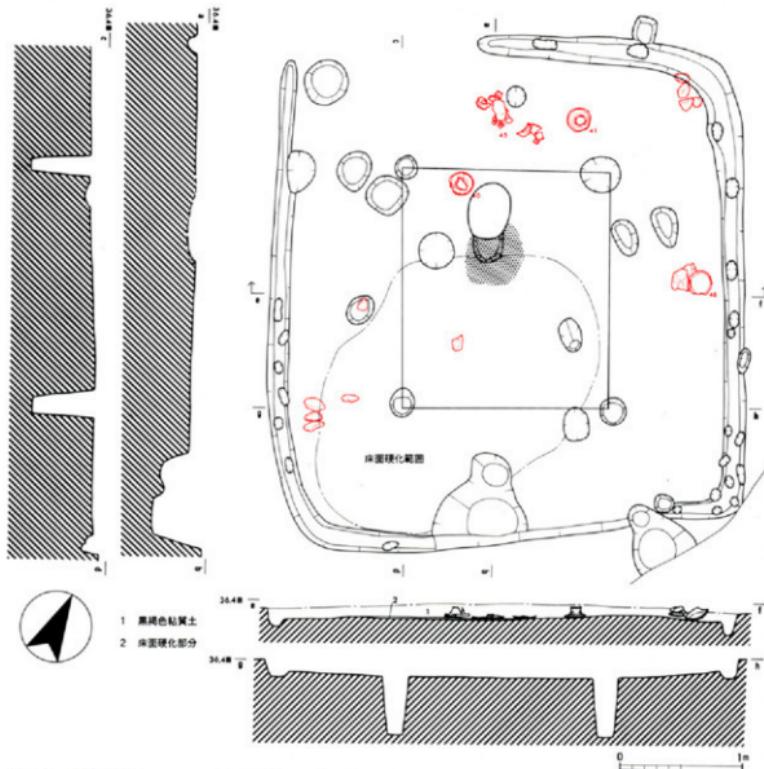
竪穴住居SH288(第10図) 調査区中央部付近で検出した。今回調査した竪穴住居の中では、最も規模の大きなものである。

主柱穴は、東西南北の四隅で2カ所ずつ計8カ所確認できた。

壁周溝は3周分が巡る。内側2周分の壁周溝は、それぞれの延長上の内側に貯蔵穴が配置されていること、主柱穴・貯蔵穴・炉の配置から復元できる竪穴住居の規模に不整合が生じないことから、住居内の区画溝ではなく壁周溝と言えよう。まず、内側2周分の竪穴住居について検討する。

内側2周分の壁周溝は、内側4本の主柱によって支えられている竪穴住居であると言える。貯蔵穴はそれぞれ内外のものが対応し、壁周溝・主柱穴の位置から推定される南東壁面のはば中央に位置する。

炉は、貯蔵穴の中心部側と壁周溝・主柱穴の位置から推定される竪穴住居壁面の中央に位置する。炭を含んだ灰穴炉で、浅く窪む形状を呈する。底面には、強い被熱痕跡が見られない。炉石は、竪穴住居中央部側に据え付けられている。また、床面が硬く焼き締まる地床炉が東寄りに位置するが、東主柱穴



第8図 壁穴住居SH 282平面・断面図 1:40

と隣接することから、後述する外側の主柱穴に対応する堅穴住居に伴うものと考える。

次に外側の壁周溝に伴う堅穴住居であるが、支えているのは外側4本の主柱である。壁周溝自体は、断続しながらほぼ1周する。壁周溝から内側寄りにかけて円形に膨らむ箇所が部分的に見られる。レベルは、壁周溝と変わりない。上部構造の補助材等が存在した可能性もある。また、南東壁周溝上では、上面の平らな自然石が出土した。

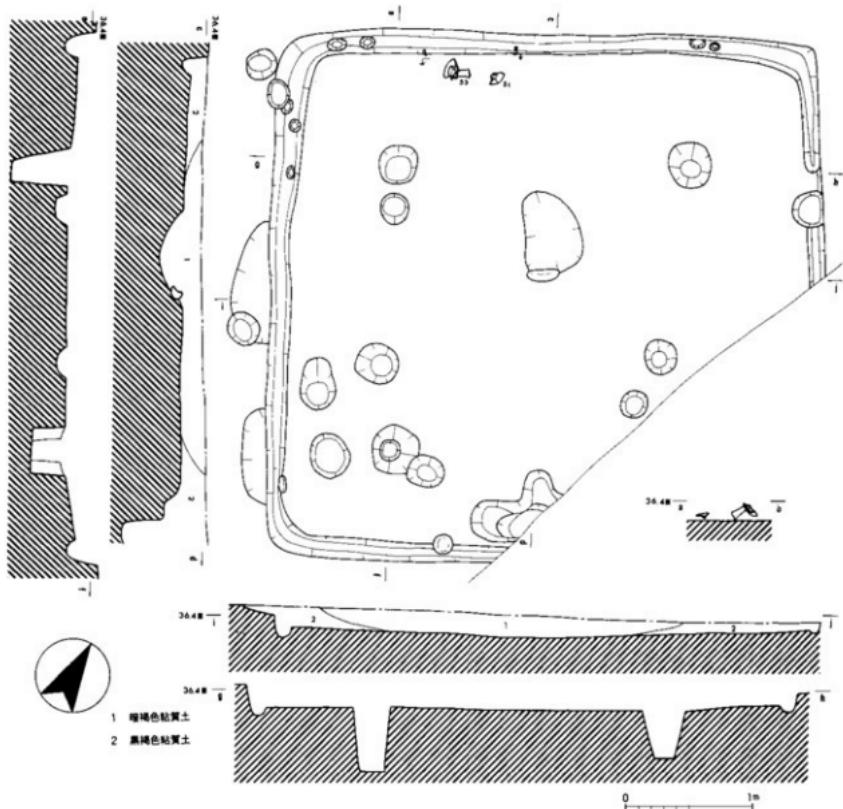
貯蔵穴は、南東壁面の中央部から南北寄りに、壁面から離れた位置に設置されている。土層断面観察から、内側2カ所の貯蔵穴上面で埋土が変化していること、前者と埋土が異なることが確認できる。また、貯蔵穴の上部では、倒立した状態で壺(63)が

出土した。この事から、貯蔵穴には有機質の蓋があつたことが予想される。

次に炉であるが、地床炉は前述のように、この外側の堅穴住居に伴うものといえる。一方、灰穴炉は貯蔵穴の中心部側と堅穴住居壁面の中央に位置するが、土層断面からは前後関係を判断できなかった。

床面硬化部分は、貯蔵穴西側で見られた。

内側2棟分の堅穴住居は、主柱穴の位置を変えることなく面積を拡げている。遺構・遺物からは、前後関係を決定する痕跡を確認することができなかつた。土層断面観察で、外側の堅穴住居が内側2棟分を切る形で確認できることから、同様に面積を拡げているものと考えられる。しかし、内側2棟分は同じ柱を利用して面積を拡張したものであるのに対し



第9図 竪穴住居SH283平面・断面・立面図 1:40

て、外側1棟は改めて柱穴を掘削しており、厳密には建て替えということができよう。まず1棟を拡張し(SH291)、さらに建て替えている(SH288)と解釈できる。

**竪穴住居SH286**（第11図下段） 調査区北寄りで検出した。近年の搅乱によって、遺構の南西部以外の部分は破壊されていた。破壊を免れた部分では壁周溝が巡るが、貯蔵穴付近は残りが悪く、壁面も確認できなかった。

貯蔵穴は、西側が階段状になっている。

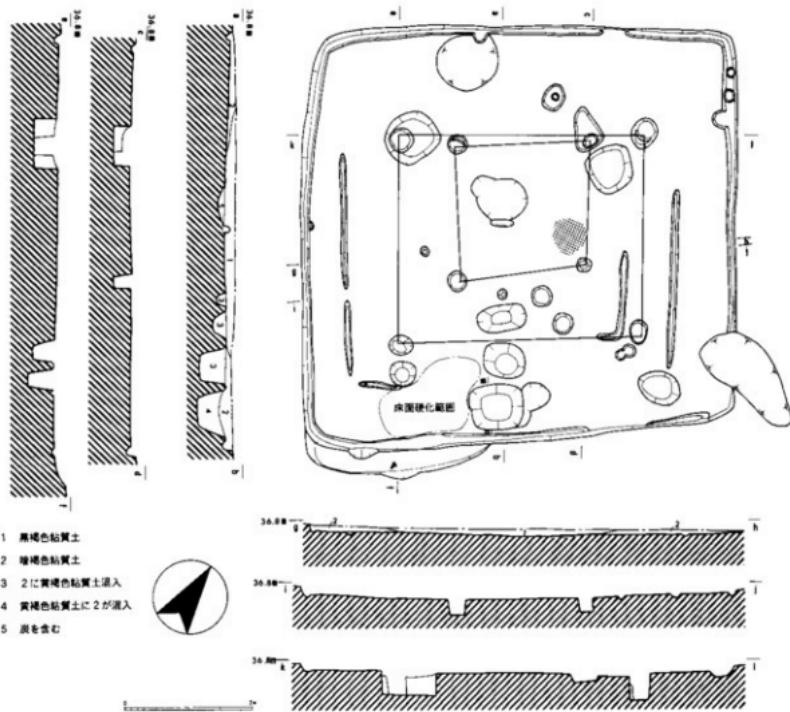
**竪穴住居SH279**（第12図上段） 調査区中央部で検出した。遺構は、調査区南壁に向かって拡がる。南西部分は、近世の溝SD2によって破壊されている。

また、平面プランが残っている部分についても、近世の土塁SZ1が直上に築かれており、その時点ではぼ検出面まで削られているものと考えられる。

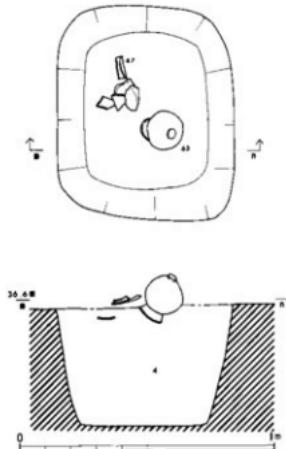
壁周溝は、東壁面でのみ断続的に確認できた。

南東部で、半球状に炭が締まっている遺構が見つかった。さらに、その炭の下では焼土を確認した。他の竪穴住居内の炉の位置と比較すると、違和感のある位置である。また、当該期には半球状の底部形態を有する土器は存在しない。よって、この遺構は通常の煮炊用の炉とは異なる可能性がある。また、竪穴住居廃絶以降、土塁築造までの遺構の可能性もある。

遺物は、記号文土器(?)を含め、すべて埋土から



第10図 堅穴住居SH 288 平面・断面図 1:80および  
遺物出土状況平面・立面図(下段) 1:20



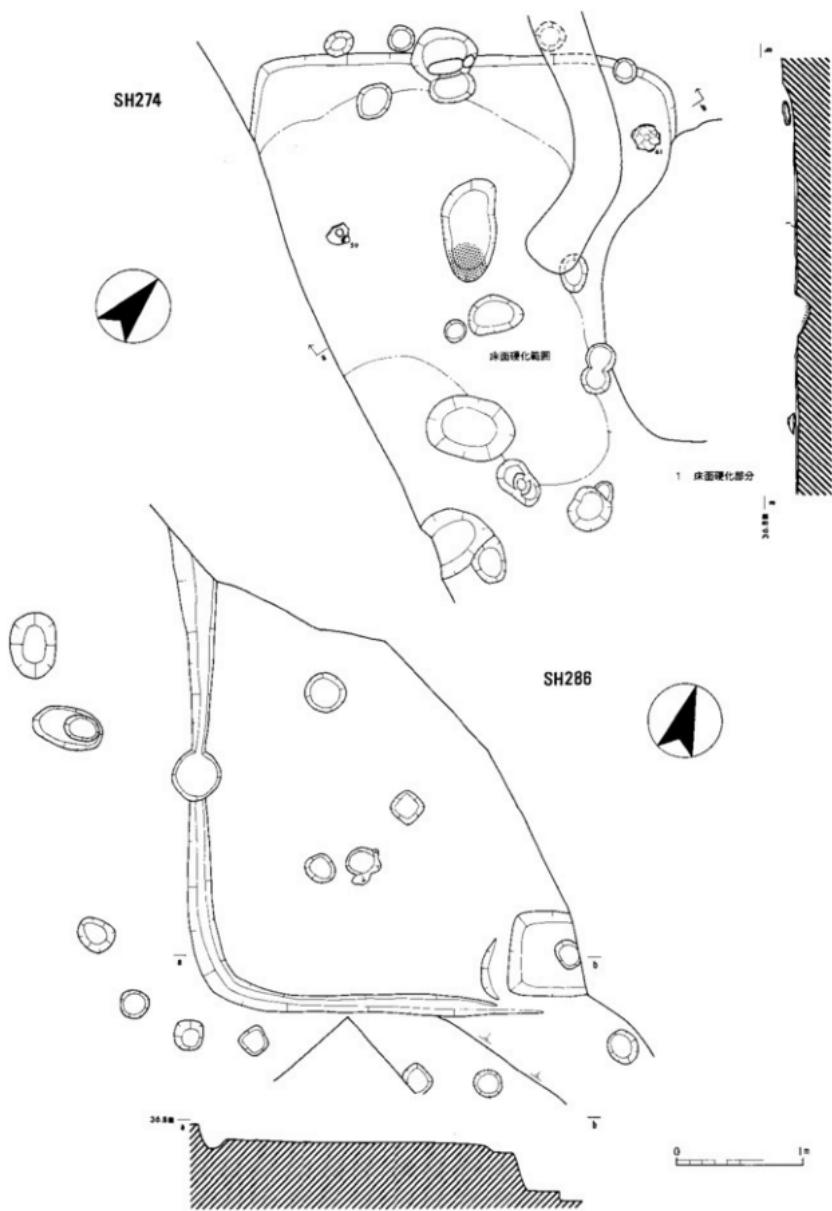
出土した。

堅穴住居SH287(第12図下段) 調査区西部で検出した。遺構は、調査区北西壁面に向かって拡がっている。後世の掘SD280に一部を破壊されているものの、貯蔵穴と主柱穴はかろうじて確認できた。

堅穴住居SH272(第13図) 調査区東寄りで検出した。遺構は、調査区南西壁面に向かって拡がっているが、壁面を4面とも確認することができた。後世の削平のため、遺構検出面から堅穴住居床面までの深さがほとんどない状態であった。平面的にはほぼ正方形プランを呈するが、東西幅が南北幅に比べやや広い。

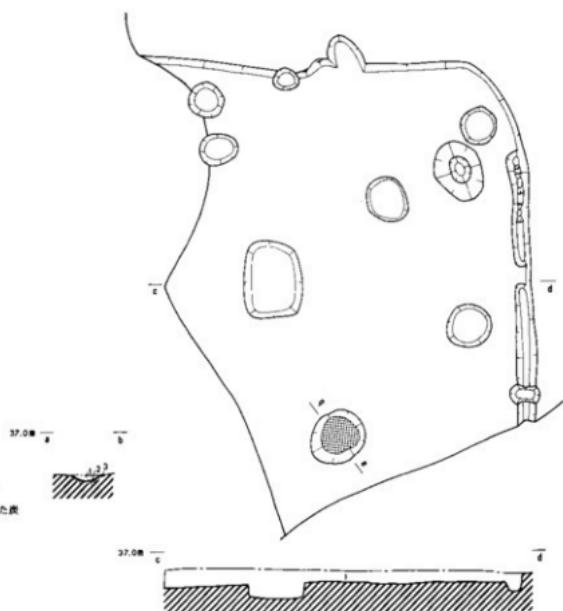
壁周溝は、壁面に沿ってほぼ全体に巡らされていた。主柱穴は、3カ所確認できた。

炉は後世の柱穴によって破壊されており、本来の

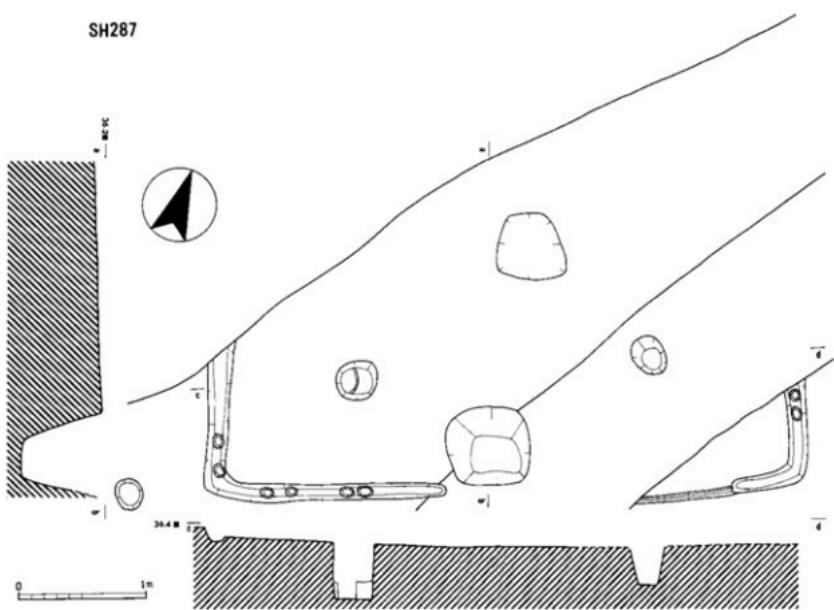


第11図 堅穴住居 SH274 平面・立面図（上段）・SH286（下段）平面・断面図（下段）1:40

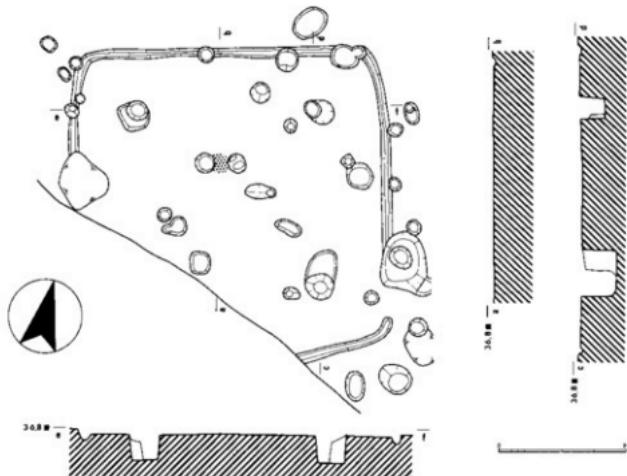
SH279



SH287



第12図 積穴住居 SH279（上段）／SH287（下段）平面・断面図 1:40



第13図 堪穴住居SH272平面・断面図 1:80

形状を留めていない。焼土が明瞭に確認できることや、レベル的に平坦であることから地床炉と考えられる。

**堅穴住居SH316**（第14図上段） 調査区中央部付近で検出した。遺構は、昭和の開墾の溝によって破壊されている。平面形は、東西幅が南北幅に比べやや広い長方形である。

主柱穴は4カ所確認できた。また、開墾時に削平されたながらも、貯蔵穴と思われる小土坑が、南壁面中央部に隣接した位置に掘削されていることが確認できた。しかし、壁周溝・炉は確認できなかった。

**堅穴住居SH317**（第14図下段） 調査区南寄りで検出した。後世の著しい削平を受けており、主柱穴4カ所と貯蔵穴のみをかろうじて確認できた。

貯蔵穴は、中央部に向かって階段状に突出する部分をもつ。

**棟持柱建物SB292**（第15図） 桁行3間・梁行1間の建物である。柱穴間は、桁行間はほぼ等間隔の3.96m、梁行間は3.0mである。棟持柱間は4.8mで、棟持の出は西側が0.72mの独立棟柱、東側が0.12mの近接棟柱である。柱穴からは、時期のわかる遺物の出土はほとんどないが、埋土のあり方から当該時期の遺構と判断した。

**土坑SK319**（第16図） 長径1.9m、短径1.2mでいびつな形状を呈する。周辺には同様の遺構ではなく、単独で存在する。また、位置的にはSB292の中にあたる。埋土には、甕(85)が含まれていた。

**溝SD281**（第17図） 深さ約0.2mの溝を、延長約20m検出した。天花寺城に伴う窓SD280が、ほぼ平行して掘削され、溝の西肩が破壊されているため幅は不明である。

遺物の出土はなかったが、SD280埋土内に弥生時代後期の遺物が混入することや埋土のあり方から、弥生時代後期の集落に伴う遺構と判断した。

## (2) 清水谷遺跡

堅穴住居1棟と環濠2条がある。時期的には、小谷赤坂遺跡と同様に弥生時代後期初頭から前葉にかけてのものと考えられる。

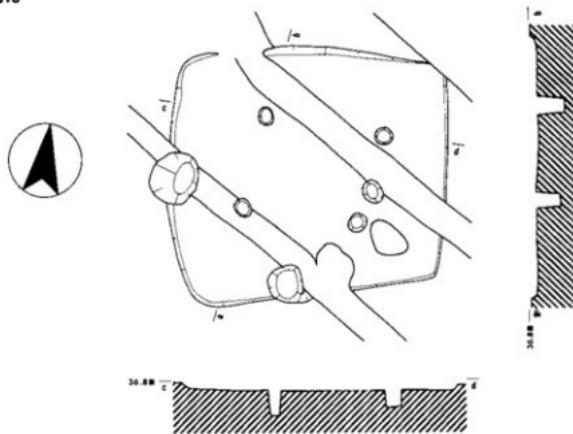
**堅穴住居SH311**（第20図） 調査区東寄りで検出した。平面的には、正方形に近いがいびつな形状を呈する。東西幅が南北幅に比べやや広い。

壁周溝は、貯蔵穴部分を除いてほぼ全体に巡らされている。

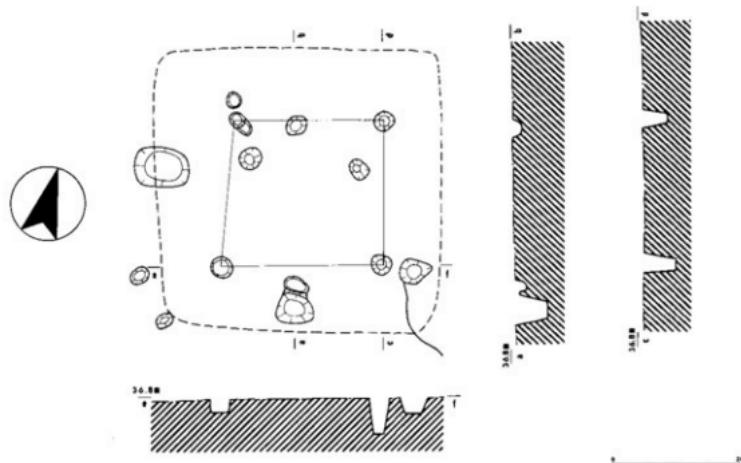
貯蔵穴は、南東壁面の中央に距離を置いて設置されている。中央部に向かう階段状の部分がある。

炉は、堅穴住居南東壁面と北西壁面との中间にあ

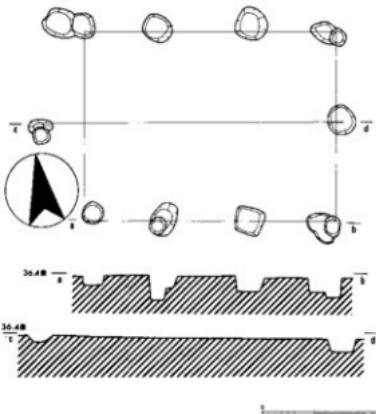
SH316



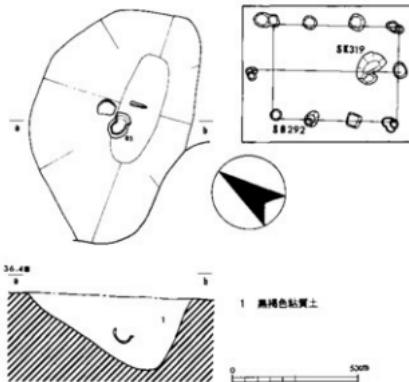
SH317



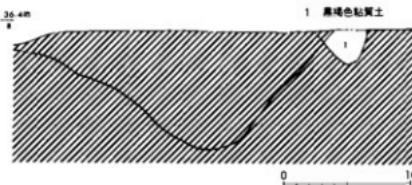
第14図 堪穴住居 SH316（上段）／SH317（下段）平面・断面図 1:80



第15図 挖立住建物SB292平面・断面図 1:80



第16図 土坑SK319平面・断面図 1:20



第17図 溝SD281断面図 1:40

る。炉石は、貯蔵穴寄りに据え付けられていた。この他、竪穴住居南東・北西壁面の外側に、直径0.1m弱の小穴が検出された。このうち1カ所は、外側に向かって約0.1m伸びていた。それ以外は、垂直に0.1m程度のものであった。清水谷遺跡は、小谷赤坂遺跡に比べ植物に由来する搅乱が少ないことから、上記の小穴を遺構と判断した。

遺物は、主に黄褐色粘土層の床面近くから出土した。北部では、浅い2カ所のPitに挟まれる形で20cm弱の大きさの石が据え付けられていた。Pitの内いずれかは、その位置から見て主柱穴に相当するものであろう。

**環濠SD307（第18図）** 2条ある環濠のうち、弥生集落寄りに位置する内側のものである。

環濠の規模は幅約3.0m、深さ約1.5mで、延長約18mにわたって検出した。岩盤である礫層直上まで掘削されている。埋土は、暗褐色系～灰褐色系土を

主とする。土層断面から、環濠は徐々に埋没している。その後、V-1層上面で再掘削が1回行われていることも確認できた。

遺構から、まとまった遺物の出土はなかった。しかし、再掘削以前のV-2層から弥生時代後期初頭の壺(113)が出土している。このことから、SD307は少なくとも弥生時代後期初頭以前には掘削されていたと考えることができる。

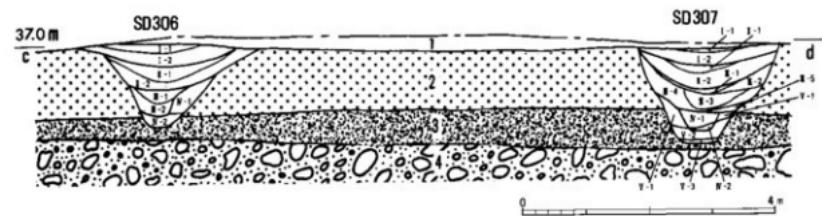
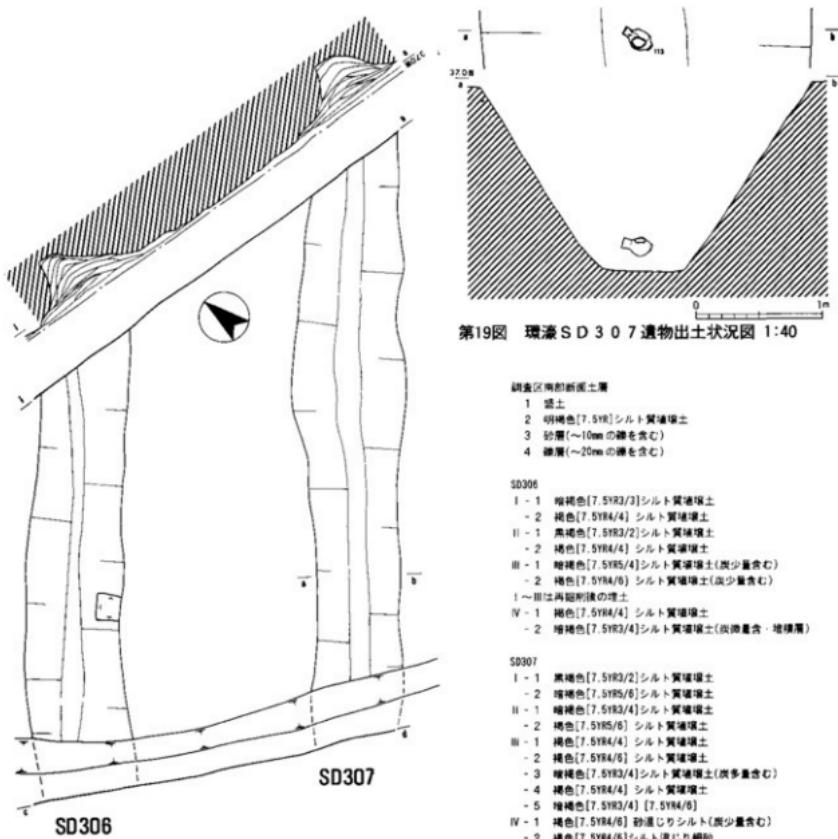
**環濠SD306（第18図）** SD307に並行する、外側の環濠である。

環濠の規模はSD307とほぼ同じ幅約3.0m、深さ約1.5mで、延長約13mを検出した。岩盤である礫層直上まで掘削されている。埋土は、暗褐色系～灰褐色系土を主とする。SD307と同様に、IV-1層上面で再掘削が1回行われている。

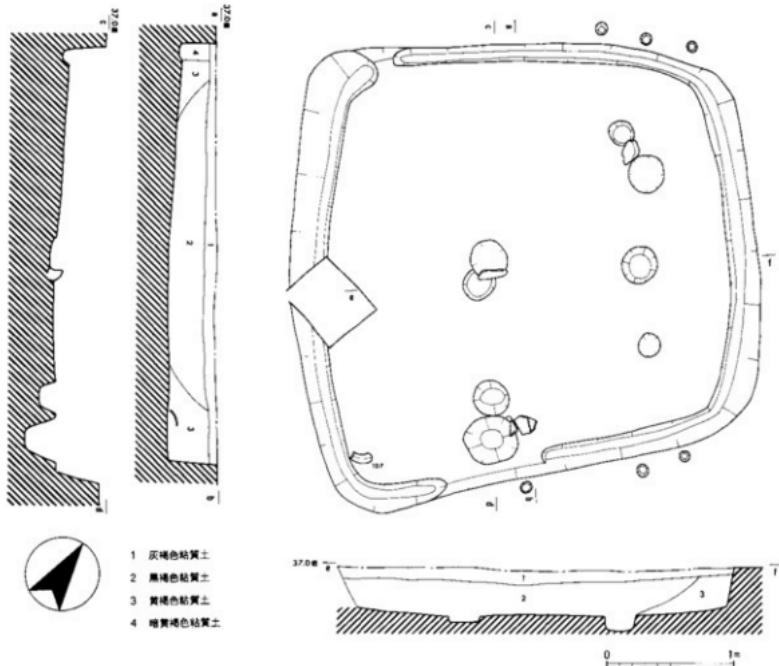
遺物は全く出土しなかったが、II-1層上面で後述する中世の遺構SX310を検出した。SX310だけが落ち込んだ位置にあることから、SD306が中世の段階ではまだ浅い落ち込みになっていたことが推測される。SD306が完全に埋没するのは、昭和の開墾時である。

環濠の時期に関しては、出土遺物が少なく不明な点が多いが、SD307・SD306とともに類似した層位を呈していることから、同様の変遷を経ているものと考えられる。

（川崎志乃）



第18図 環濠 S D 3 0 6 + 3 0 7 平面図 1:160 / 断面図 1:80



第20図 積穴住居SH 3 1 1 平面・断面図 1:40

### b 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構には、小谷赤坂遺跡で検出した土壙墓1基がある。時期的には、後期のものである。

**土壙墓SX290（第21図）** 調査区西部中央付近で検出した遺構である。一部は調査区外にひろがるため調査していない。

黒色系土を埋土とする。著しく削平されており、墓壙の深さは約5cm程度であった。木棺痕跡は確認できなかつたが、北端から約50cm南寄りの位置で須恵器杯蓋（86・87）が置かれていたことから、この部分が北小口に相当するものと考えられる。この須恵器は、底面よりもかなり浮いた状態で出土しているため、本来は木棺上に置かれていたものであろう。木棺内からは、その他の副葬品は出土しなかつた。

出土した須恵器から、7世紀前葉頃の遺構と考えられる。

（木野本和之）

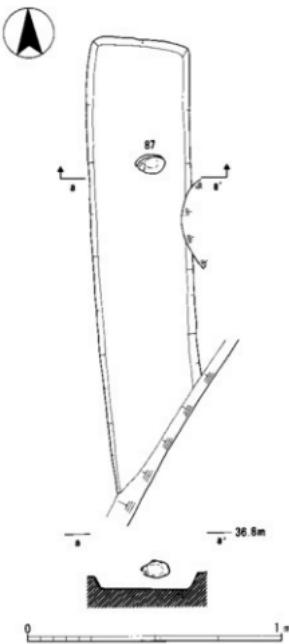
### c 奈良時代の遺構

奈良時代の遺構には、積穴住居3棟のほか、掘立柱建物2棟がある。

#### (1) 小谷赤坂遺跡

**積穴住居SH275（第22図上段）** 調査区東部で検出したものである。黑色系土を埋土とする。一部は調査区外に及び、確認できたのは南壁全部と東西壁の一部である。平面長方形で、東西約2.8m・南北約3m以上である。

壁周溝、主柱穴に相当するものは認められなかつた。南西部分は後世の攪乱を受けているが、床面には貼床が全面に施されていたものと推定される。貼床を除去すると、中央に小土坑が確認された。土坑は、貼床下からの深さで約0.1m程度の浅いものである。土坑内埋土は貼床に使用された土とはば同じであり、建物築造時に掘削され、貼床を行う時点で



第21図 土壙墓SX290平面・立面図 1:20

は埋められるという極めて短期間のものであると思われる。

遺物は、埋土内に土師器細片が出土しているのみで、床面上の遺物は明確にはなかった。

## (2) 清水谷遺跡

竪穴住居SH312（第23図） 調査区北西端で検出した遺構である。平面隅丸長方形で、東西約2.6m・南北約3.4mである。北西隅は、後世の道路側溝によって破壊されている。

壁周溝は、カマドの部分を除き全周する。また床面には、主柱穴に相当するビットは認められなかつた。

カマドは東壁ほぼ中央に設置されているが、ビットによって一部が破壊されている。カマドは、東壁を突き抜けるようにして土坑を掘り、その上に馬蹄形に盛土することによって構築する半地下式構造である。この馬蹄形盛土部分の内側には、馬蹄形の被熱部分が見られたが、概して弱いものである。また、

この馬蹄形盛土内には、部材（芯材）に使用された土器片が含まれていた。さらに底部中央では、支柱石痕と考えられる小ピットを検出した。

カマドの南、建物の南東隅に相当する部分には貯藏穴と考えられる小土坑がある。

床面には、非常に硬質の貼床が全面に施されていた。貼床を除去したが、SH275のような小土坑は確認できなかった。

出土遺物は、カマド構築部材として用いられた須恵器・土師器のかか、用途不明の木製品がある。

出土遺物から判断すると、8世紀後半頃の遺構と考えられる。

竪穴住居SH313（第23図） 調査区北西端で検出した遺構である。平面長方形で、東西約3m・南北約2.5mである。北東隅部分はSH312が重なり、南東隅部分は道路側溝によって破壊されている。切り合ひ関係からみて、SH312よりも先行する建物と考えられる。

壁周溝は認められない。建物内部に、後述するSB314に伴うビットはあるものの、主柱穴に相当するものは確認できなかった。また、カマドも確認できなかったものの、SH312と重なる部分に設置されていた可能性がある。

貼床はほぼ全面に施されていた。貼床を除去したが、SH275のような小土坑は確認できなかった。

出土遺物は、少量の土師器片がある。

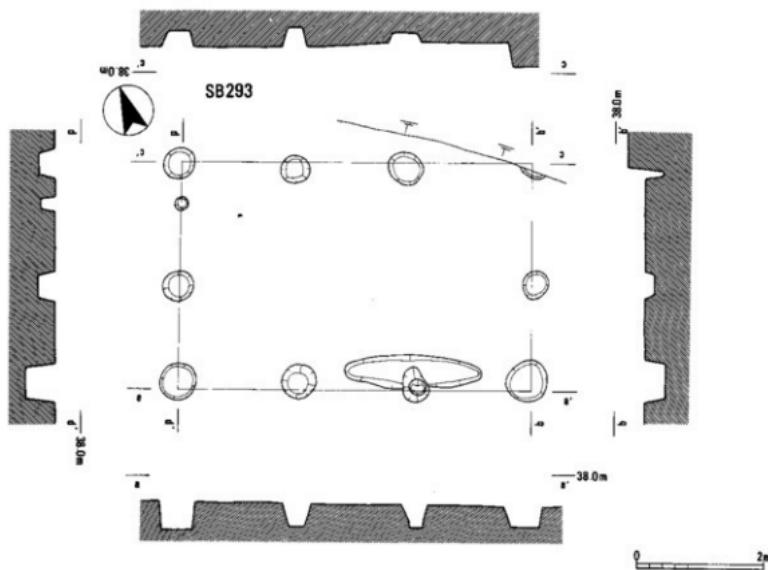
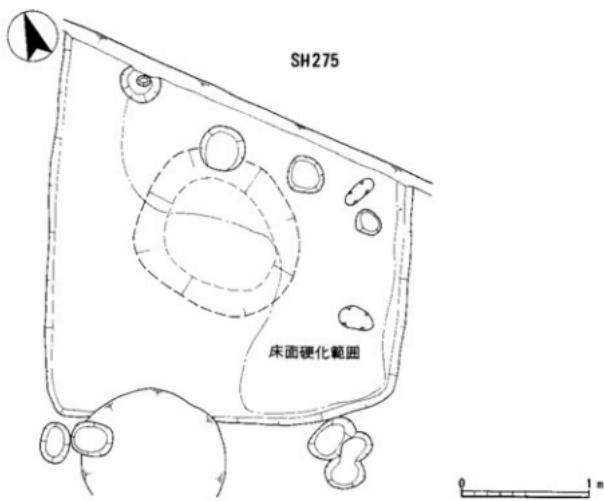
据立柱建物SB293（第22図下段） 調査区東端北寄りで検出した。桁行3間（約5.4m）、梁行2間（約3.6m）の東西棟であると思われる。南北方向の主軸は、真北を基準にN12°Wである。桁行間・梁行ともに約1.8mとほぼ等間隔（1尺=30cmとして6尺）になる。

調査区の北壁土層断面から、柱の直径は約20cm程度であると推定できる。

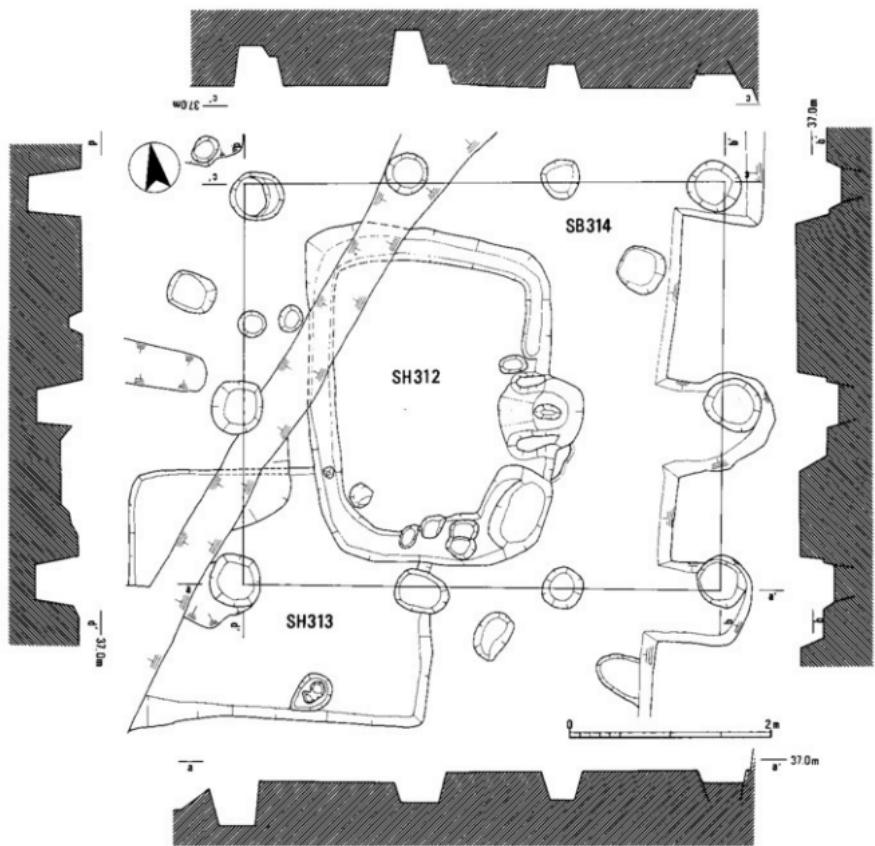
各柱穴から土器細片が僅かに出土したのみであるが、埋土のあり方から奈良時代の遺構と判断した。

据立柱建物SB314（第23図） 調査区北西端で検出した。SH312を取り込むような形で建てられている。切り合ひ関係から、SH312に後出するものであると考えられる。

桁行3間（約4.8m）、梁行2間（約3.9m）の



第22図 深穴住居SH275平面図（上段）1:40／掘立柱建物SB293平面・断面図（下段）1:80



第23図 堪穴住居SH312・313平面図、掘立柱建物SB314平面・断面図 1:40

東西棟になると思われる。南北方向の主軸は、真北を基準にN10°Eである。

SH312のカマドを破壊するピットが存在し、その西側にも同様のピットが存在したと推定すると、総柱建物になる可能性も考えられる。

柱穴出土遺物から、8世紀後半頃の遺構であると考えられる。  
(木野本和之)

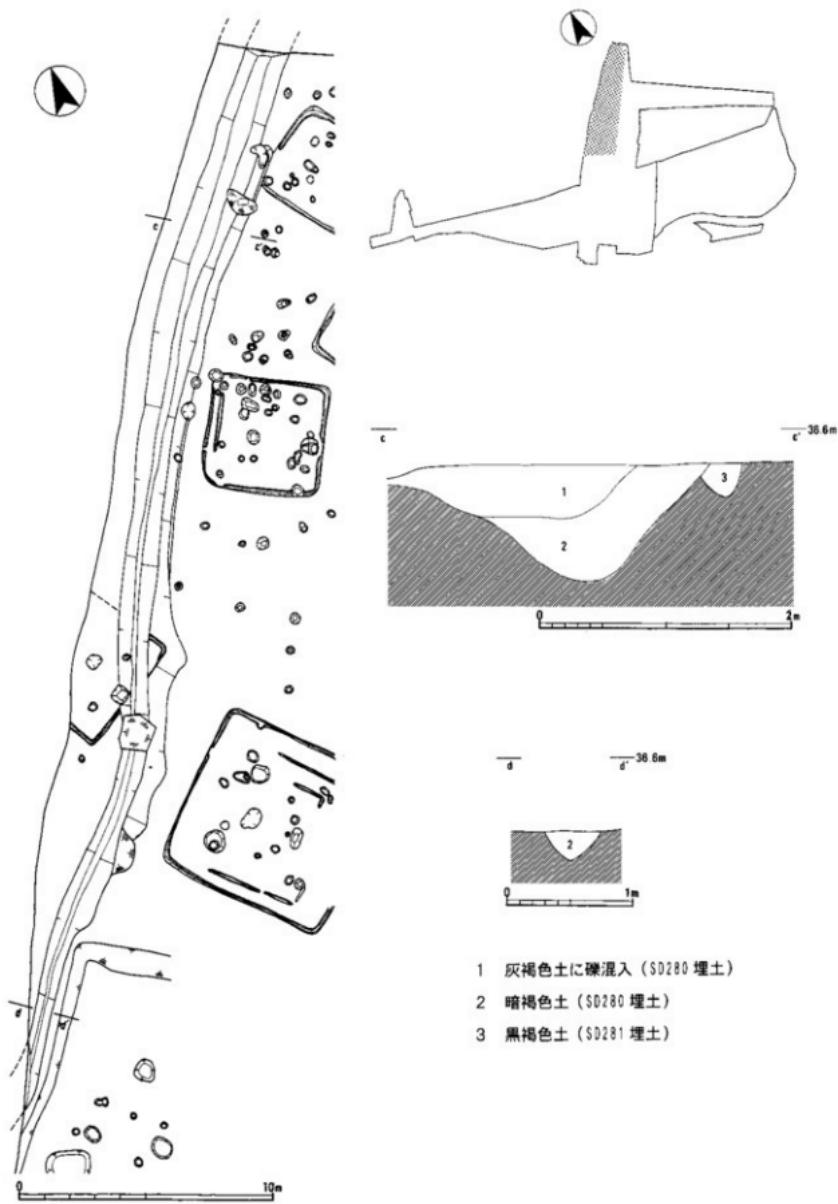
#### d 中～近世の遺構

この時代の遺構には、天華寺城関連遺構、清水谷遺跡で検出された焼土坑群のほか天華寺に関連する近世の土塁・溝などの遺構がある。

#### (1) 天華寺城関連遺構

堀SD280（第24図） 小谷赤坂遺跡と清水谷遺跡の境を南北に走る遺構である。天華寺のまわりを囲む土塁SZ1の除去後、現道下で検出した。検出した遺構の総延長は約45mである。堀の北側は調査区外へと伸びる。しかし、南側は一旦調査区外に出た後再び現れるものの、道路側溝による搅乱および土取りによって消滅する。

SD280北半部は断面U字形、南半部は断面V字形を呈する。北半部では、検出面からの深さは約0.6mであるが、南半部では、約0.3mとやや浅くなる。



第24図 墓SD280平面・断面図 1:100

堀は、ほぼ直線的に伸びるが部分的に緩やかな円弧を描いている。埋土は、小ブロックを含む暗褐色～灰褐色系土で、大きく3層に分かれる。上層には、疊のほか弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・瓦などの破片が多く混入していた。この部分は、開墾時に造られた道と重なっている部分で、道を造る際に埋められたものと考えられる。

出土遺物は僅かであるが、近くの埋土中から15世紀前後の時期の土師器皿片が出土している。

**土壘SZ1西辺部** 調査時点の聞き取りで、SZ1は丘陵開墾時に積み直しをしているとの情報を得ていたが、土層観察ではその痕跡は認められなかった。北端部から現在の天華寺の裏手に続く土壘・堀との位置関係および地形から判断して、SZ1西辺部が天花寺城が機能していた時期の土壘のラインを踏襲しているものと考えられる。

#### (2) 焼土坑群（第25図）

清水谷遺跡中央部を中心に、14基の焼土坑を検出した。

今回の調査で確認された遺構からは、人骨片・焼土・炭のはか被熱痕の認められる礫を確認した。しかし、それ以外に時期等を確定するような遺物は全く出土していないため、当地で遺体を火葬した後に人骨のみを別の場所へ埋葬したものであると判断している。したがって、ここで呼称する「焼土坑群」とは、このような遺構を指していることを明記しておく。SX310以外の全ての遺構は、開墾時に著しい削平を受け、僅かに底部が残った状態であった。

**焼土坑SX296** 調査区北壁際で検出した遺構である。平面は長径約0.5m、短径約0.4mで、検出面からの深さは約0.1mである。土坑埋土には、炭とともに若干の火葬人骨が含まれていた。

**焼土坑SX297** 調査区北壁近くで検出した遺構である。平面は長径約0.7m、短径約0.5mの楕円形で、深さは検出面から0.1m弱である。埋土には、炭とともに若干の火葬人骨が含まれていた。また、底部には、被熱痕のある礫が置かれていた。

**焼土坑SX298** 調査区中央北寄りで検出した遺構である。平面は直径約0.6mの円形、検出面からの深さ約0.1mである。埋土に火葬人骨のはか、炭・焼土ブロックが混入していた。

**焼土坑SX299** 調査区中央部で検出した遺構である。平面は長径約0.6m、短径約0.4mの楕円形、検出面から僅かに窪むほどの深さしかなかった。埋土には、火葬人骨が含まれていた。

**焼土坑SX300** 調査区北壁際で検出した遺構である。平面は長径約0.7m、短径約0.6mの楕円形、検出面からの深さ約0.1mである。埋土には、火葬人骨が若干含まれていた。

**焼土坑SX301** 調査区中央部で検出した遺構である。平面は長径約0.5m、短径約0.4mの楕円形、検出面から僅かに窪むほどの深さしかなかった。埋土には、若干の火葬人骨が含まれていた。

**焼土坑SX302** 調査区中央部で検出した遺構である。平面は径約0.6mの隅丸方形、検出面からの深さ約0.1mである。埋土は、炭を含むだけで火葬人骨はなかった。

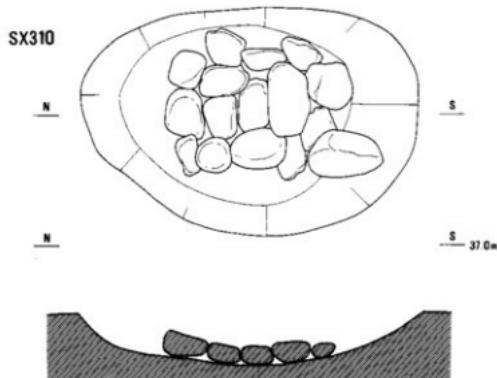
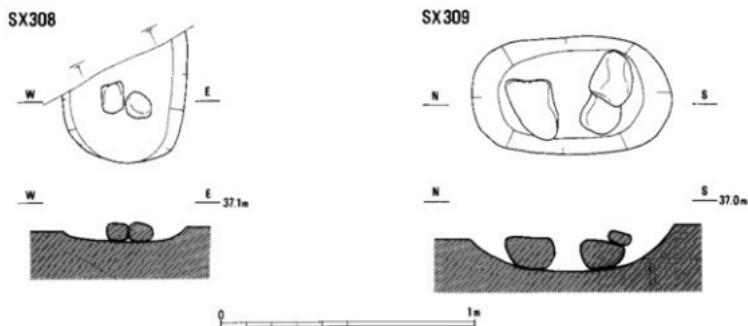
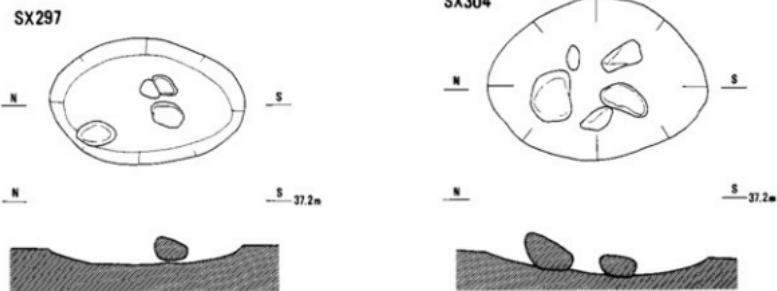
**焼土坑SX303** 調査区中央西寄りで検出した遺構である。平面は径約0.6m、検出面から僅かに窪むほどの深さしかなかった。埋土には、若干の火葬人骨が含まれていた。

**焼土坑SX304** 調査区中央東寄りで検出した遺構である。長径約0.8m、短径約0.6mの楕円形、検出面からの深さ約0.1mである。埋土には、若干の火葬人骨のはか炭が含まれていた。また、底部には被熱痕のある礫が置かれていた。

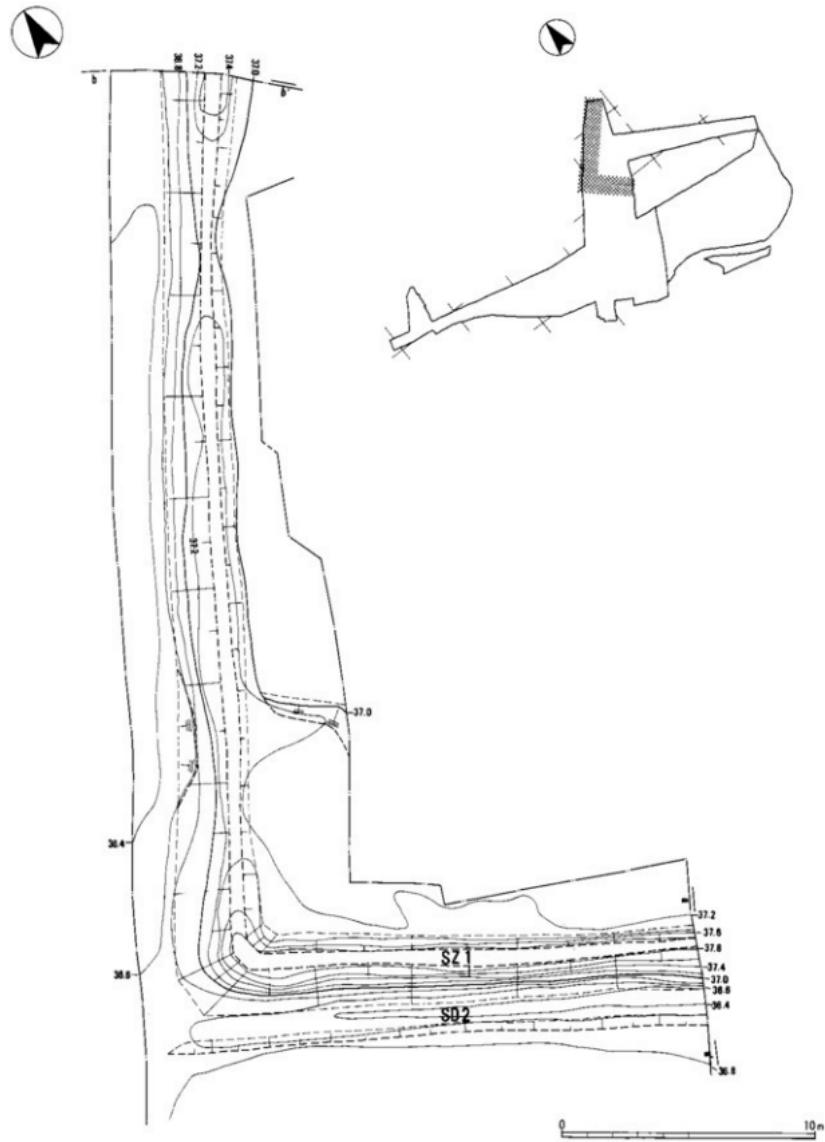
**焼土坑SX305** 調査区中央部西寄りで検出した遺構である。北半は、調査区外に伸びる。平面は長径0.8m以上、短径約0.5mの隅丸長方形、検出面からの深さ約0.1mである。埋土には、若干の火葬人骨のはか、多量の炭・焼土が含まれていた。

**焼土坑SX308** 調査区中央部で検出した遺構である。北半は、調査区外に伸びる。平面は長径0.5m以上、短径約0.5mの隅丸長方形、検出面からの深さ約0.1mである。埋土には、若干の火葬人骨・炭が含まれており、底面に被熱痕が見られた。また、底部には被熱痕のある礫が置かれていた。

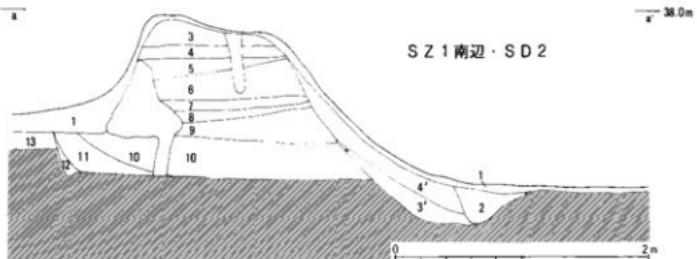
**焼土坑SX309** 調査区中央部で検出した遺構である。平面は長径0.8m、短径約0.4mの隅丸長方形で、検出面からの深さ約0.2mである。埋土には、若干の火葬人骨・炭が含まれており、壁面に被熱痕が見られた。また、底部には被熱痕のある礫が置かれていた。



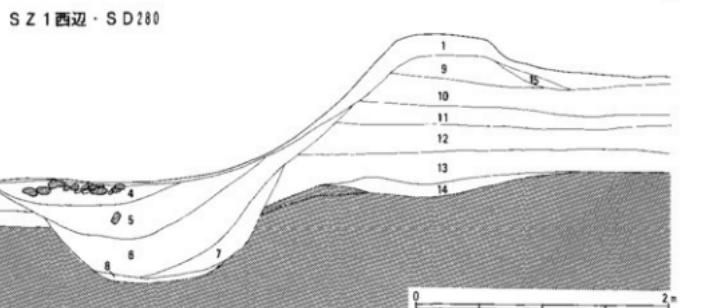
第25図 焼土坑 SX297・305・308・309・310 平面・断面図 1:20



第26図 土壠SZ1・溝SD2平面図 1:100



- |                           |                              |
|---------------------------|------------------------------|
| 1 表土および土壌盛土崩落土            | 8 暗灰褐色土に 4 が少量混入             |
| 2 地塊埋土                    | 9 暗褐色土                       |
| 3 灰褐色土 (3'は SD 2 埋土)      | 10 黒褐色粘質土                    |
| 4 赤褐色土に砂粒混入 (4'は SD 2 埋土) | 11 10 に黄赤褐色粘質土ブロックわずかに混入     |
| 5 4 に 3 が混入               | 12 9 と同じ                     |
| 6 4 に同じ                   | 13 3 に同じ                     |
| 7 4 に 3 が多く混入             | ※ 3~9はSZ 1 盛土、10~12はSH279 埋土 |



- |                         |                      |
|-------------------------|----------------------|
| 1 表土                    | 9 暗褐色土に黄赤褐色土がわずかに混入  |
| 2 暗灰褐色土に黄赤褐色土ブロック混入     | 10 暗褐色土              |
| 3 暗灰褐色土に黄赤褐色土ブロック多く混入   | 11 9 と同じ             |
| 4 暗灰褐色土に拳大の礫が多く混入       | 12 10 と同じ            |
| 5 暗灰褐色土に黄赤褐色土ブロックわずかに混入 | 13 9 と同じ             |
| 6 暗灰褐色土に黄褐色土が多く混入       | 14 10 に黄赤褐色土ブロック多く混入 |
| 7 暗灰褐色土に黄褐色土が混入         | 15 6 と同じ             |
| 8 黄褐色土に暗灰褐色土が混入         |                      |

第27図 土壌SZ 1・溝SD 2・掘SD 280断面図 1:40

遺構番号	遺構の性格	時期	小地区・現場番号	特徴・形状・計測値(m)など ※( )内は推定値
SZ1	土 壁	中世以降		天華寺を囲む土壁の一部
SD2	溝	中世以降	K13～J17	SZ1に伴う
SD271	溝	近世	E～G13	
SH272	整穴住居	弥生後期	E9～G11	5.2×5.1
SH273	整穴住居	弥生後期	F7～G8	5.4×(5.4)、炉石有り
SH274	整穴住居	弥生後期	E5～F6	(3.4)×(3.4)、削平著しい
SH275	整穴住居	奈良	E6～7	一部調査区外で規模不明。貼床下に小土坑あり。
SK276	土 坑	不 明	F9	
SK277	土 坑	弥生後期	G11～12	
SK278	土 坑	不 明	E8～9	
SH279	整穴住居	弥生後期	J13～14	規模不明。SD2に切られる。記号文土器出土。
SD280	壁	中 世	A16～K19	天花寺城西限の壁
SD281	溝	弥生後期	B16～F17	SD280に切られる
SH282	整穴住居	弥生後期	B15～C16	3.9×4.1
SH283	整穴住居	弥生後期	C15～D16	4.4×4.2、炉石有り
SH284	整穴住居	弥生後期	D15～E16	4.7×4.5
SD285	溝	中 世	F5～6	
SH286	整穴住居	弥生後期	E11～F12	規模不明。最近の擾乱による破壊著しい。
SH287	整穴住居	弥生後期	G17～H17	4.7×(3.7)以上、SD280に一部切られる。
SH288	整穴住居	弥生後期	H15～I17	6.8×6.6、炉石有り。
SX289	不 明	中 世	I16	
SX290	土 壁	古墳後期	M14	木棺墓
SH291	整穴住居	弥生後期	H15～I17	SH288建替え前の建物。1回の拡張有り。
SB292	棟持柱建物	弥生後期	E1～F2	桁3.96×梁3.0、棟持柱間4.8
SB293	据立柱建物	奈良	Q20～R22	桁5.4×梁3.6
SK294	土 坑	不 明	P20	
SD295	溝	不 明	Q21	
SX296	燒 土 坑	中 世	I S28	
SX297	燒 土 坑	中 世	I S28	焼石有り。
SX298	燒 土 坑	中 世	I S-T28	炭・焼土ブロック含む。
SX299	燒 土 坑	中 世	I T28	
SX300	燒 土 坑	中 世	I S28-29	焼石有り。
SX301	燒 土 坑	中 世	I T28	
SX302	燒 土 坑	中 世	I T29	骨なし。炭含む。
SX303	燒 土 坑	中 世	I T30-31	
SX304	燒 土 坑	中 世	I U26	
SX305	燒 土 坑	中 世	I T31	炭多量。焼土含む。
SD306	埋 墓	弥生後期	R26～V27	断面V字形。幅約3m、深さ約1.5m。横出長約13m。
SD307	埋 墓	弥生後期	Q23～U25	断面逆台形。幅約3m、深さ約1.5m。横出長約18m。
SX308	燒 土 坑	中 世	I S29	焼石有り。底面被熱。
SX309	燒 土 坑	中 世	I S-T29	壁面被熱。
SX310	燒 土 坑	中 世	I R-S26	焼石有り。炭・焼土ブロック含む。
SH311	整穴住居	弥生後期	R21～S22	3.7×3.5
SH312	整穴住居	奈良	S36～T36・S37	2.6×3.4、長辺中央にカマド。
SH313	整穴住居	奈良	T36-37	3×2.5、SH312に切られる。
SB314	据立柱建物	奈良	S35～T37	桁4.8×梁3.9
SK315	燒 土 坑	中 世	I T35	焼土含む。
SH316	整穴住居	弥生後期	N16～O17	4.3×4.0、削平著しい。
SH317	整穴住居	弥生後期	S13～T14	4.5×4.4、削平著しい。
SB318	据立柱建物	中 世	I S-T20～21	桁5.1×梁3.9
SK319	土 坑	弥生後期	E1	長1.9×短1.2

第1表 遺構一覧表

れていた。

**焼土坑SX310** 調査区中央東寄り、環濠SD306掘削中に検出した遺構である。平面は長径1.4m、短径約1.0mの楕円形、検出土面からの深さ約0.2mである。埋土には、まとまった量の火葬人骨のはか、炭・焼土ブロックが含まれていた。底部には、ほぼレベルを揃えた礫が敷かれており、礫の表面には被熱痕が見られた。

遺構上面が開墾時の整地土に覆われていたこと、遺構埋土がSD306とよく似ていたため、SD306を掘り下げた状態でしか確認できなかった。これは、S X310掘削時にはSD306がある程度産んだ状態であったことを示しているものと考える。

**焼土坑SX315** 調査区西端の東壁際で検出した遺構である。平面は直径約0.4mの円形、検出土面から僅かに窪むほどの深さしかなかった。埋土に、若干の火葬人骨・炭・焼土が含まれていた。底の一部には、被熱痕が認められた。

### (3) 天華寺城廬絶以降の遺構

この時期の遺構には、天華寺占地の際に設定された方形区画に伴う土壘SZ1南辺部と溝SD2のはか、SD271と多数のビット群がある。

**土壘SZ1南辺部・溝SD2** (第26図) 小谷赤坂遺跡調査区のはば中央部を東西に走る遺構である。SZ1は調査区西端ではば直角に屈曲し、調査区北へ伸びる。SZ1は、調査範囲内で3カ所に分断されていた。第1次調査時点で西側からa～cと呼称している。今回調査したのは、このうちSZ1-aである。

土壘と溝の土層は、調査範囲東端で確認した。SD2は弥生時代の竪穴住居SH279埋土と基盤層である黄赤褐色土を切り込むようにして掘削されており、その掘削土を順次積み上げることによってSZ1を構築している状況が観察できる。土壘は、SD2の肩部分から盛りはじめ、ある一定の高さに揃った段階でさらに上部へと積み上げている。その際には、盛土の叩き締めを行っているが、それほど顕著なものではない。残存土壘の高さは旧地表面から約0.7m、SD2溝底からの比高約1.7mとなる。また、SD2はSZ1と並行に掘削されているが、SZ1が北にはば直角に屈曲する部分で終息する。

SZ1盛土内には、弥生土器や奈良時代の土器が含

まれるもの、それ以降の土器はなかった。SD2埋土から出土した遺物も、若干の混入遺物以外は近世以降の国産陶磁器・瓦片のみである。

**溝SD271** 調査区中央北寄りで検出した遺構である。調査区内を、南北に直線的に伸びる。検出土部分の総延長は約10mで、両端は調査区外へ伸びる。断面は逆台形状を呈し、検出土面からの深さは約0.2mである。

埋土からは、江戸時代頃の国産陶磁器や瓦の破片が出土している。

### e 時期不明の遺構

時期不明の遺構は、掘立柱建物のはか多数のビットがある。

**掘立柱建物SB318** 清水谷地区東端で確認した遺構である。桁行3間(約5.1m)、乗行2間(約3.9m)の東西棟になると思われる。南北方向の主軸は、真北を基準にN10°Wである。

柱穴から遺物は出土しておらず詳しい時期は不明であるが、中・近世遺構の可能性が高い。

その他に確認されたビットの多くは掘立柱建物の柱穴であることは間違いないが、建物としてまとめることはできなかった。

(木野本和之)

### 3 出土した遺物 (第28～33図)

時期的には、縄文時代から近代のものがある。以下、遺構出土遺物を中心に概略を述べる。なお、打製石器に関しては、遺構出土の剝片が多いことや石材がサスカイトであることから、基本的に遺構に伴う遺物と解釈した。

#### a 縄文時代の遺物

##### 小谷赤坂遺跡

混入遺物と考えられるもののみである。89～91の細片3点のみであり、後期頃に所属する」と考えられる。深鉢(89)は、沈線に沿って上方2カ所に施成後未貫通の穿孔痕跡がある。

#### b 弥生時代の遺物

##### 1 小谷赤坂遺跡

**竪穴住居SH284出土遺物(1～33)** 土器は、壺(1～9)・甕(10～17)・高杯(18～23)・ミニチュア土器(24～26)が、石器には、石鎌(27～29)・石斧(32)・石皿(33)・剥片(30～31)などがある。

壺は、様々な形状のものがある。1は大形の壺で、

口縁部外面はハケメ調整されている。2は頭部に櫛描直線文を巡らせ、口縁部にはヘラ描や棒状浮文（の上に刺突有）で装飾している。3は口縁部が大きく外に開く形状を呈する。4はハケメ調整されているが、口縁端部は横ナデで仕上げられている。5は頭部に櫛描直線文が巡らされているが、途切れている所が1カ所ある。6は頭部に櫛描直線文が巡り、さらに頭部から体部にかけては縱方向に櫛描波状文が刻まれている。8は体部上半に櫛描直線文と櫛描波状文が間隔を空げず交互に巡らされており、その下に記号文が刻まれている。9は頭部から口縁部にかけてほぼ直立し、端部が外側に開く形状を呈する。端部は強い横ナデによる沈線が巡っており、沈線の下部には押圧が施されている。

甕には「く」字状口縁を呈する10～13、受口状口縁を呈する14がある。「く」字状口縁甕のうち、10は、板状工具によるハケメ状の痕跡をナデ消すように工具ナデで仕上げられている。内面は、板状工具によるナデで仕上げられている。11は板状工具による強いナデ（ヘラケズリに近いが、木目に由来すると考えられる痕跡が見られる）で外面調整を施す。内面にはハケメが見られる。一方、12・13はハケメ調整で仕上げられている。また、12の口縁端部には面上に押圧が巡らされている。受口状口縁甕(14)は、外面全体をハケメ調整した後、櫛描文による直線文・波状文・刺突文で装飾している。内面は、基本的に板状工具によるナデで仕上げられているが、体部下半には指頭圧痕が目立ち、頭部にはハケメが見られる。13・14は口縁部形態や外面調整が全く異なるものの、頭部の屈曲がゆるやかで頭部内面にハケメが見られる点は共通している。7は磨滅が著しいが、頭部よりやや下がった位置に櫛描直線文と櫛描刺突文が見られることから、14と同様のもの可能性がある。

底部には、平底（15・16）がある。15の底外面にはヘラ描が2本刻まれている。17は脚台であるが、脚上部に櫛描直線文が巡っており、鉢の可能性がある。高杯には、脚部が長脚のもの（18～20）と短脚のもの（21・23）がある。長脚高杯には、脚裾がわずかに開く18・19と柱状になる20がある。短脚高杯には、櫛描直線文を3単位巡らせた間に貝殻腹縁に

よる刺突を刻んだ21と、脚上部に櫛描直線文を巡らせ6方向に透かしを穿っていると推定される23がある。この他、22は浅い椀状を呈する高杯と考えられる。

ミニチュア土器（24～26）は、基本的にナデで成形されているが、26はハケメ調整されている。24は口縁端部2カ所に切れ目が入れられている。

石鎌（27～29）と剣片（30～31）の石材は、サヌカイトである。磨製小型偏平石斧（32）は、両面を使用している。刃先には、刃こぼれが見られる。石皿（33）は、凹面が片面に見られる。

堅穴住居SH273出土遺物（34～39） 土器には、壺（34～35）・高杯（36）があり、石器には石斧（38）・石錐？（39）などがある。また、この他に木目状の痕跡が付着した焼土（37）がある。

壺には、垂下口縁を有する大形壺（34）と口縁部が短く開くもの（35）がある。35は、連続成形されている。内面と口縁部外面は、細かいハケメ調整がなされており、体部外面はヘラミガキで仕上げられている。更に頭部は、上から板状工具による刺突・櫛描直線文・櫛描波状文で装飾されている。体部最大径付近には、2カ所に焼成後穿孔されている。

高杯（36）は有稜高杯で、脚部はゆるやかに開く形状を呈すると推定される。

磨製小型偏平石斧（38）は、両面を使用している。石錐？（39）は、中央部を丁寧に研磨することによって形を作りだしている。

焼土は図示した37を含め86g（内pit4から50g）出土した。37には木目状の痕跡が残っていることから、木と接触していたものと思われる。なお、煤等の付着物は見られない。

堅穴住居SH282出土遺物（40～48） 壺（40～43）・甕（44～45）・高杯（46～47）などがある。

壺には、垂下口縁を有する40や頭部からゆるやかに外反する41などがある。40は、全体を細かいハケメで調整した後、ナデ消しているようである。口縁部外面の5方向には、円形浮文上に竹管文を押したものが4つずつ配されている。41は、頭部から口縁部にかけてゆるやかに外反し、端部は面をもつ。外面はハケメ調整されており、頭部には凸帯が貼付されている。42は、連続成形による壺底部と考えられ

る。43は凸帯が2条巡らされており、その上に刻目が施されている。凸帯の下方には、櫛描直線文が巡らされている。

甕には、「く」字状口縁甕(44・45)がある。44の口縁端部には、板状工具による刻目が巡らされている。45は肩が張り、頸部はシャープに屈曲する。

高杯(46)は、口縁部に櫛描波状文が1単位巡らされている。47は、端部内面から外面にかけて煤が付着しており、甕蓋として利用されている。

48は、石核から素材を取り去った残核であろう。

堅穴住居SH283出土土器(49~56) 土器類(49~53)と石器(55~56)などがある。

49と50は、壺と考えられる。49は体部上半で、櫛描直線文を巡らせ、その下方にはヘラ描と思われる沈線を一条巡らせて区画している。さらに、この上にヘラ描と考えられる沈線を縦方向に破線状に刻んでいる。

51は甕蓋である。

52は甘い受口状口縁を有する甕であり、底部は欠損するが、その形状から脚台が付くと推定される。口縁部外には、刻目が巡らされている。

高杯(53)は長脚高杯で、脚部には縦方向のヘラミガキの上に櫛描直線文が間隔を空けて巡らされている。内面にはシボリメの痕跡が残り、透かしは2方向に穿たれている。

54は土製の筋鍤車である。

55は石礫の未製品であろう。砥石(56)は、粒子の粗い石材を利用している。研磨面は、それぞれ凹状に窪んでいる。

堅穴住居SH274出土遺物(57~62) 壺(57~59)・甕(62)・高杯(60~61)がある。

壺(57)は頸部に櫛描直線文を巡らせ、口縁部には棒状浮文を付加している。58の体部外表面はヘラミガキで仕上げられており、頸部には貝殻腹縁による刺突文が巡らされている。59は、外面がヘラミガキで仕上げられていることから、壺底部と考えられる。

甕(62)は、ゆるやかな「く」字状口縁を有する。器壁は全体にハケメで調整されており、口縁端部には刻目が見られる。

高杯には、口縁部が直立する61と外反する60がある。61は端部が外半し、内側に面をもつ。60は、口

縁部に櫛描波状文が1単位巡らされており、その下に櫛描直線文が見られる。

堅穴住居SH288出土遺物(63~76) 土器類(63~71)と石器(72~76)がある。

土器類には、壺(63~66)・甕(67~69)・高杯(70~71)などがある。

壺(63)の頸部は、強く屈曲することなく口縁部にかけて外反する。体部最大径付近には、外面にも接合痕が観察できる。65・66も壺底部と考えられる。

甕(67~68)は、いずれも「く」字状口縁甕であるが、67は頸部がシャープに屈曲する。一方、68の頸部は体部からやや直立し、口縁部が水平に近い形で折れ曲がる。外面はハケメ調整で仕上げられており、口縁端部には板状工具による刻目が巡らされている。69は台付甕の脚台であろう。

高杯は、脚上部から開くか否かということから、長脚高杯(70)と短脚高杯(71)と推定される。いずれも内面にはシボリメが残る。また、外面には縦方向のヘラミガキの上に櫛描直線文が間隔を空けて巡らされている。

石器は、石鎌(72)・剝片(73)・大型蛤刃石斧(74)・砥石(76)などがある。

石鎌(72)・剝片(73)の石材は、共にサヌカイトである。

75は、直径3.3~3.8cmの球状の石である。自然石の可能性もあるが、赤みを帯びて綺麗な石材であることや、投擲には手頃な大きさであることから國化した。

74は大型蛤刃石斧の刃先である。先端部には、刃こぼれの痕跡が見られる。

76は砥石である。56とは対照的に肌理の細かい石材を利用していている。また、研磨面も平坦である。

64は、壺の体部上半にヘラ描で絵画が描かれている。左上から右下方向に抜ける直線(a)を基準にして、右上から左下方向に数本のヘラ描(b)が、角度を変えて刻まれている。さらに、その下にも上記の左上から右下方向に抜ける直線に平行する形で、細い1本の直線(c)が見られる。また、この直線から直角に、下方に向かっても直線(d)が見られる。後者2本(c・d)は、前者(a・b)と比較すると、残存状況が悪いことや線の太さが異なることから、線刻

とは無関係のものの可能性もある。なお、64は調査時の不手際のため、確実な出土地点が不明な遺物である。しかし、同時に出土した遺物などの状況などから、本来SH288出土遺物であると考えられる。

堅穴住居SH279出土遺物（77～83） 土器類（77～82）と石器がある。

土器類には、壺（77）・甕（78）・高杯（79～81）などがある。

壺（77）は、体部外面と口縁部内面をハケメ調整で仕上げており、頸部には櫛描直線文が巡らせて、その下に記号文を刻んでいる。記号文は1カ所だけではなく、ちょうど180度回転させたところにヘラ描状の痕跡が見られることから、もう1カ所にも刻まれているようである。

78は、小形の甕底部と考えられる。85のような形状をとるものと推定される。

高杯には、杯部（79）と短脚の脚部（80～81）がある。79は、口縁部に櫛描波状文が巡らされている。80は、内面に横方向のケズリ状の痕跡が見られ、透かしは3方向に穿たれている。81には、縦方向のヘラミガキの上に間隔を空けて櫛描直線文が巡らされている。

82は、土質質で磨滅が著しい。外面にはハケメと考えられる痕跡が残る。端部内面は、丁寧なヨコナデが施されている。SH279は、上面にSZ1が造られる場所に該当するため、この遺物は後世の混入遺物の可能性がある。

石器には、叩き石（83）がある。83は、一方の先端に使用痕と考えられる平坦面がある。

堅穴住居SH287出土土器（84） 84は、口縁部が内傾するいわゆるワイングラス型の高杯である。口縁部外面には、櫛描直線文が巡らされている。

土坑SK319出土土器（85） 甕（85）は小形の「く」字状口縁甕である。

包含層出土遺物（92～101） 土器類（92～97）・石器（98～101）がある。

土器類には、壺（92～96）・高杯（97）がある。92は、受口状の口縁を有する壺である。全体に、ハケメ調整した後、頸部に櫛描直線文を巡らせ、口縁部には3方向に1本ずつの棒状浮文を付加している。

94・95は、垂下口縁を有する壺である。いずれも

口縁端部内面は、板状工具による刺突文で装飾されている。口縁端部外面は、94は擬凹線を巡らせており、95は内面同様に刺突文を刻んだ上に、円形浮文を付加している。

96は、頸部に3条の沈線と半截竹管状の刺突文を巡らせている。

高杯（97）には、櫛描直線文が間隔を空けて巡らされている。また、内面には、横方向のヘラケズリが見られる。

石器には、石鎌（98）・剣片（99）・大型蛤刃石斧（100）・叩き石（101）がある。

石鎌（98）・剣片（99）の石材はサヌカイトである。

## 2 清水谷遺跡

堅穴住居SH311出土土器（105～112） 壺（105～106）・甕（111～112）・高杯（107～110）がある。

105～106は、平底の壺であろう。

111～112は、台付甕の脚台である。

高杯（107～108）は有稜高杯で、脚部は109の形状になると推定される。107には、間隔を空けて櫛描直線文が2単位巡らされている。110は、杯部が椀状を呈し、脚部はそのまま広がっていく。

環濠SD307出土土器（113～114） 2点とも、下層から出土した。また、113は土層Ⅷ-2からの出土であり、再掘削以前の埋土に包含されていた。

113は、口縁部の短い細頸壺である。擬口縁を觀察できないことから、連続成形であると考えられる。壁面は、全体にハケメ調整されている。

114の口縁部外面には、直線文が格子目状に刻まれている。また、外面にはベンガラと考えられる赤色顔料が塗布されている。器台あるいは高杯であろう。

包含層出土遺物（127～128） 127が石鎌、128が石錐である。いずれも先端部が欠損している。石材はサヌカイトである。

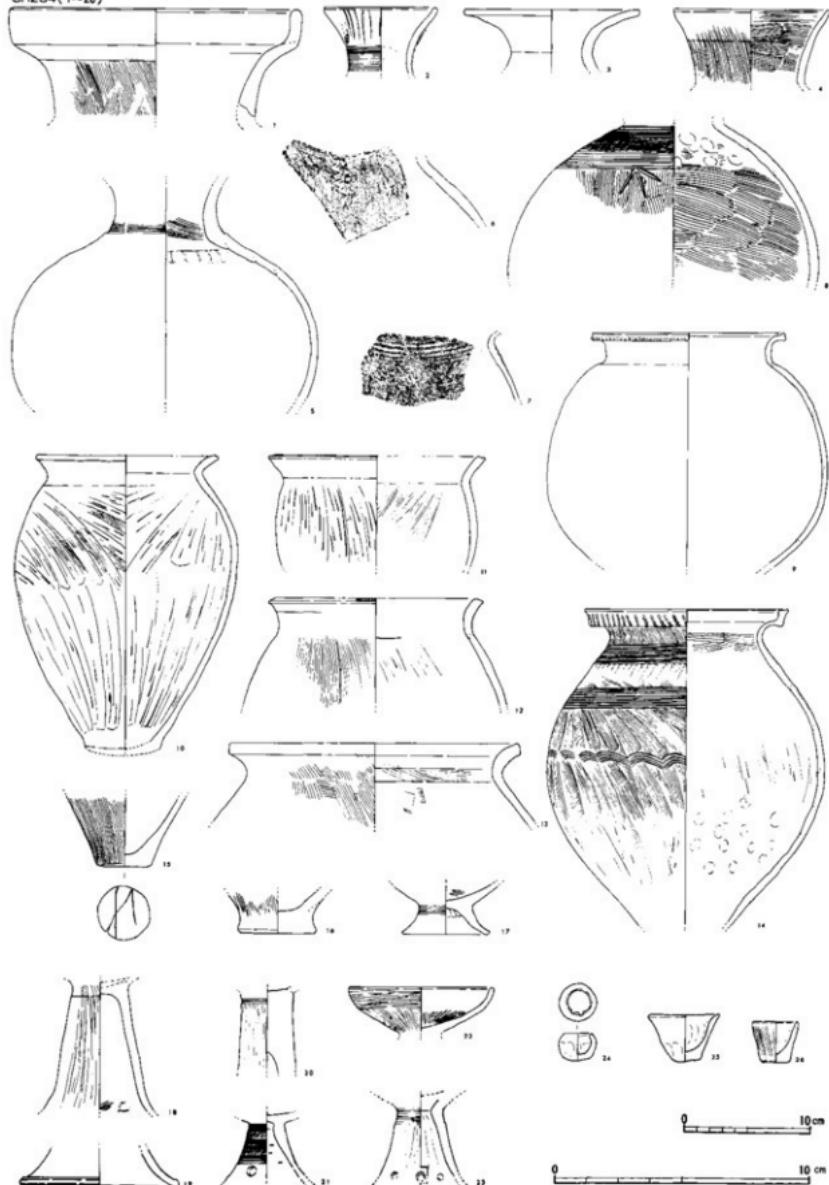
## c 古墳時代の遺物

### 小谷赤坂遺跡

土塙墓SX290出土土器（86～87） 須恵器杯蓋（86～87）がある。特に、87は歪みが著しい。陶邑編年のTK217型式<sup>2</sup>に相当するものであろう。

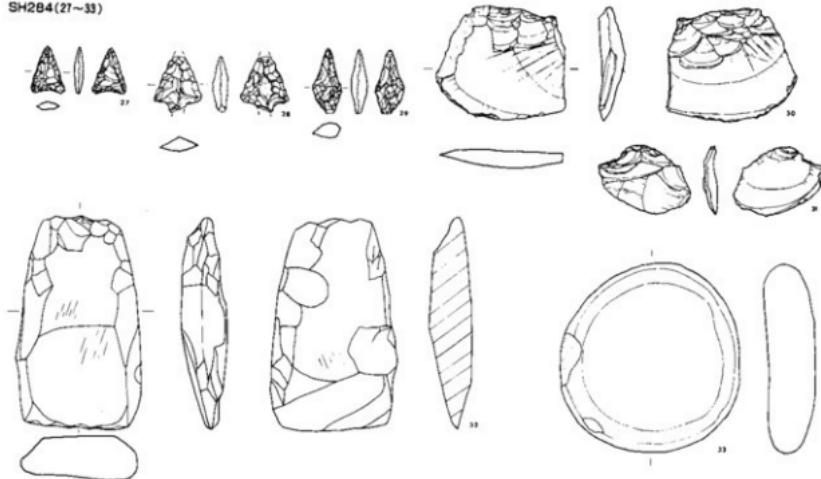
包含層出土遺物（102） 須恵器杯身である。SX290出土遺物と同様、TK217型式に相当すると思わ

SH284(1~26)

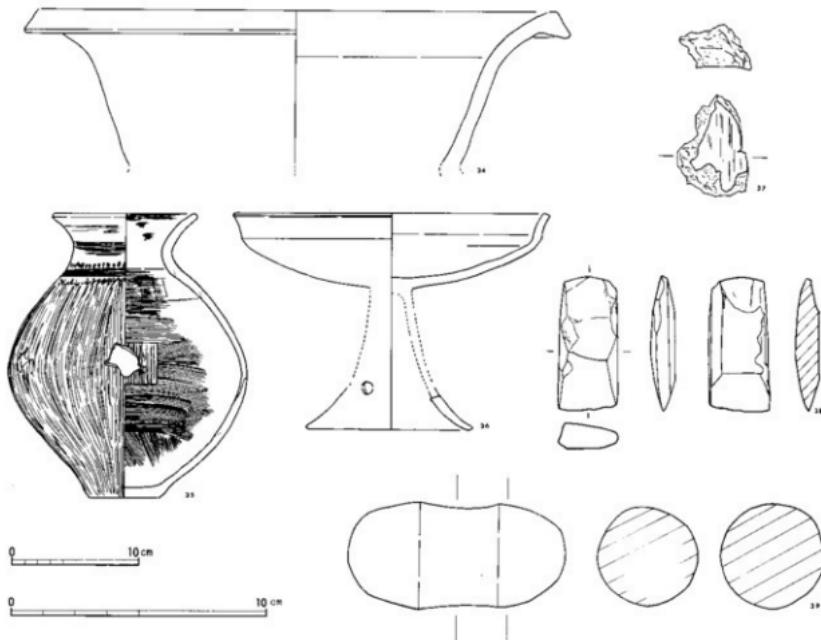


第28図 出土遺物実測図① 24~26は1:2、その他は1:4

SH284(27~33)

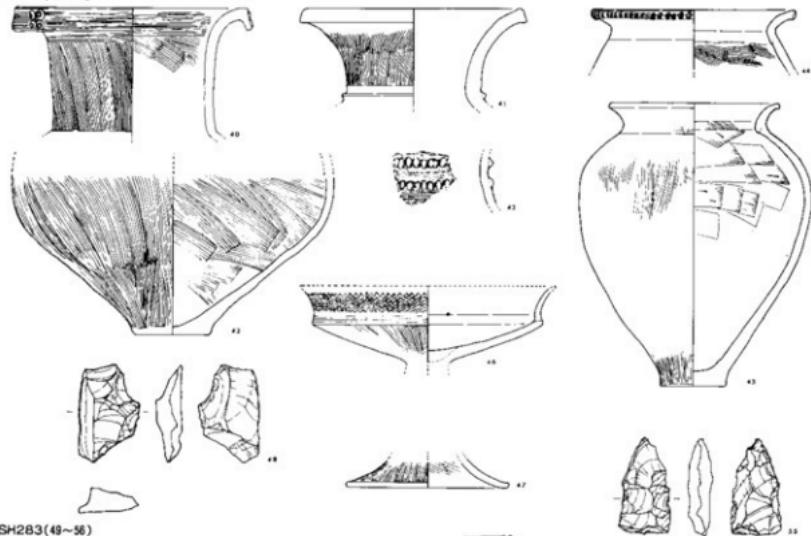


SH273(34~39)

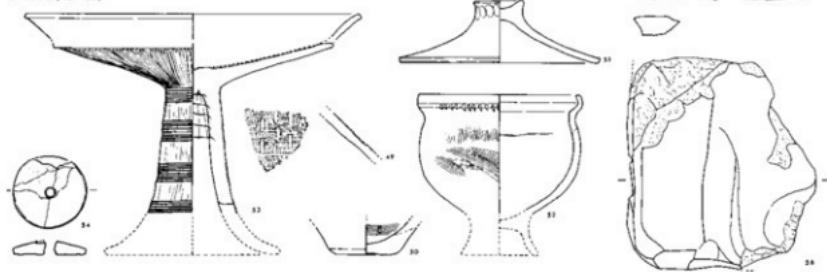


第29図 出土遺物実測図② 27~32・37~39は1:2、その他は1:4

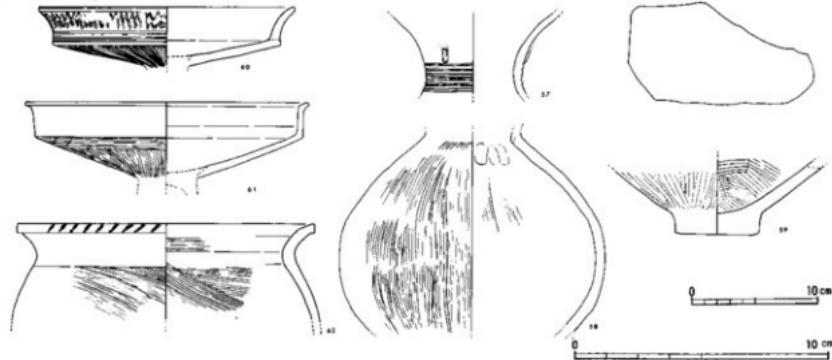
SH282(40~48)



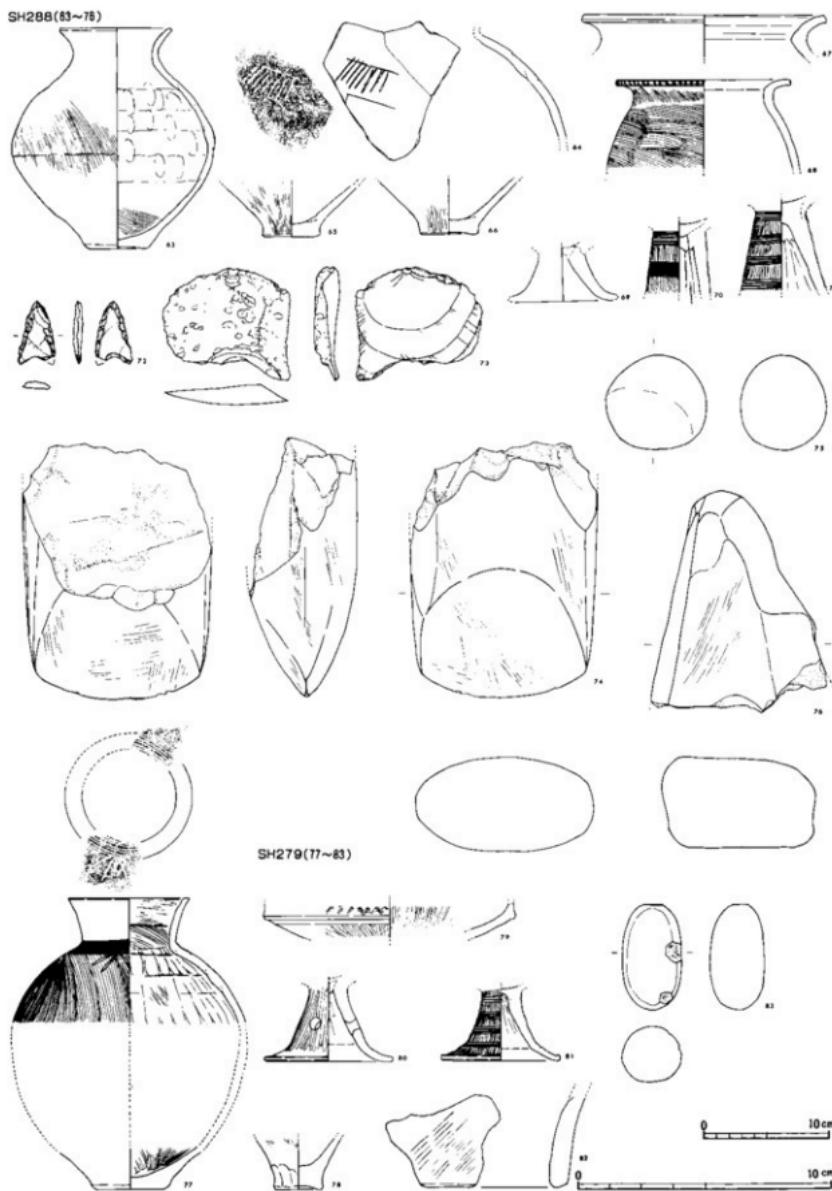
SH283(49~56)



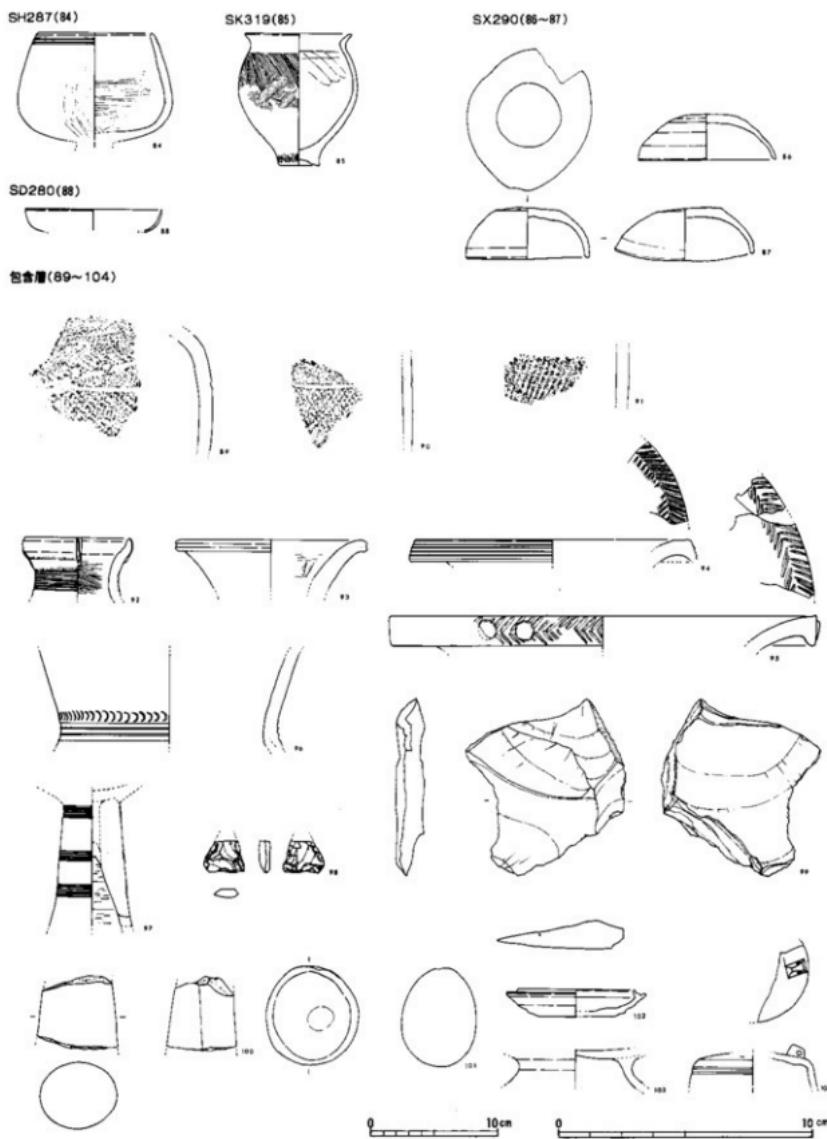
SH274(57~82)



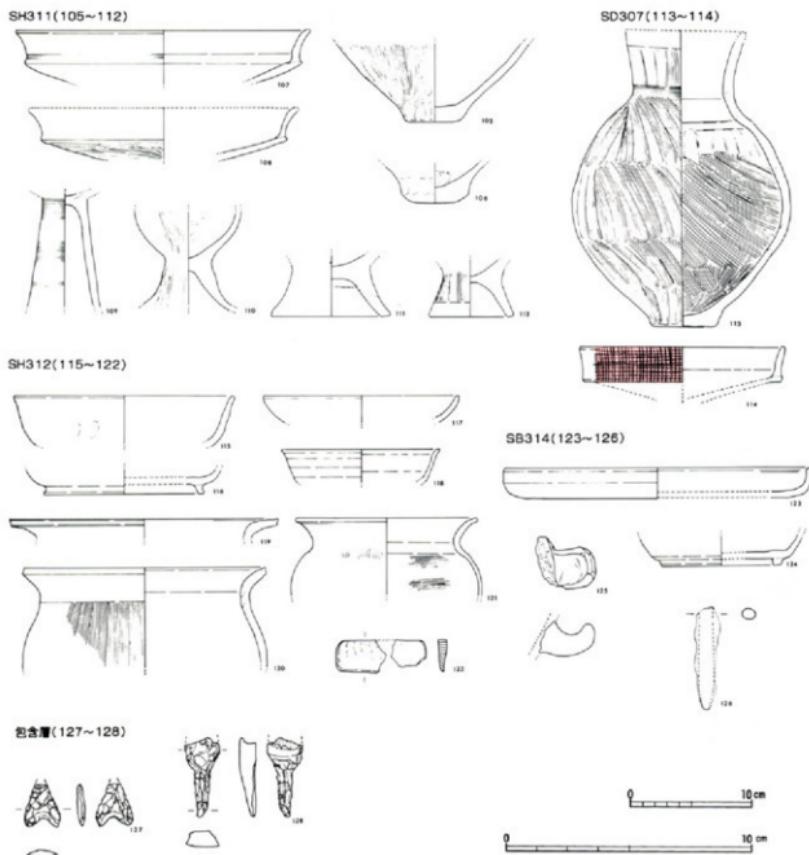
第30図 出土遺物実測図③ 48・55~56は1:2、その他は1:1



第31図 出土遺物実測図④ 72~76は1:2、その他は1:4



第32図 出土遺物実測図⑤ 98~99は1:2、その他は1:4



第33図 出土遺物実測図⑥ 127・128は1:2、その他は1:4

れる。

d 奈良時代の遺物

1 小谷赤坂遺跡

包含層出土器(103~104) 103は、土師器台付杯である。須恵器蓋(104)は、上部に紐を通す孔が穿たれている。第1次調査でも、同様の蓋が出土している<sup>3)</sup>。

(2) 清水谷遺跡

堅穴住居SH312出土遺物(115~122) 土器類(115~121)と木製品(122)がある。

土器類には、土師器杯(115)・皿(117)・甌(119~121)と須恵器杯(116)・皿(118)がある。時期的には、8世紀後半に所属するものであろう<sup>4)</sup>。

木製品(122)は、柾目材を全面加工しており、端部を丁寧な面取りで仕上げている。なお、現在は炭化している。

掘立柱建物SB314出土遺物(123~126) 土器類(123~125)と鉄釘(126)がある。

土器類には、土師器皿(123)・須恵器杯(124)などがある。125は瓶などの把手である。時期的には

SH312と同様に、8世紀後半に所属するものと考えられる。

鉄釘(126)は、頭部が欠損している。

#### e 中世の遺物

##### 小谷赤坂遺跡

堀SD280出土遺物(88) 土師器皿(88)が下層から出土している。細片であるが、南伊勢系の特徴を有する。14世紀中頃から15世紀中頃に所属するものであろう<sup>5</sup>。

(川崎志乃)

#### 【註】

1 森川幸雄のご教示による。

2 田辺昭三『須恵器大成』(角川書店 1981)

3 第1次調査、遺物番号112(伊藤裕伸『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1996)

4 古代の土器研究会編『古代の土器1 都城の土器集成』1992を参照した。

5 伊藤裕伸『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1996

No.	実物 No.	器種等	地区	遺構・層名等	計測値 (cm)	調査・技官の特徴	出土	色調	残存度	備考事項
1	701	弥生土器 磁	E16	SH284 P14	口: 22.0	ハケメ・ナデ	瓶	SYR7/4	口: 25%	
2	808	弥生土器 磁	D-E16-17	SH284	口: 9.0	ナデ・櫛指直線文・棒状浮文上に 刻痕・ヘラ焼き	瓶	7.SYR7/4	口: 10%	
3	704	弥生土器 磁	E17	SH284 P20	口: 13.8	ナデ	瓶	SYR7/4	口: 5%	
4	1402	弥生土器 磁	E17	SH284 P18	口: 12.3	ハケメ・ナデ	瓶	2.SYR5/3	口: 50%	
5	1301	弥生土器 磁	B16	SH284 P9	腹: 8.0	ハケメ・ナデ・櫛指直線文	瓶	10YR8/3	頸: 完存	
6	901	弥生土器 磁	E16	SH284 P7	—	ナデ・櫛指直線文・櫛指波状文	壺	10YR8/3	—	
7	1702	弥生土器 磁	E16	SH284	—	櫛指直線文・櫛指波状文	瓶	7.SYR7/6	—	摩滅激しい
8	1701	弥生土器 磁	E16	SH284 P2	—	ハケメ・ナデ・櫛指直線文・櫛指 波状文・起伏文	壺	2.SYR5/3	体部上半完存	
9	1302	弥生土器 磁	E16	SH284 P3	口: 15.0	ナデ・押正・沈刷	瓶	SYR6/6	口: 70%	体部外面・口縁端部に煤付着
10	2901	弥生土器 磁	E16	SH284 P4	口: 14.0	工具ナデ・ナデ	壺	7.SYR7/6	70%	体部外面に煤付着
11	1403	弥生土器 磁	E16	SH284 P13	口: 16.2	ハケメ・板状工具ナデ・ナデ	瓶	10YR7/4	口: 70%	体部外面・口縁端部に煤付着
12	703	弥生土器 磁	E17	SH284	口: 15.8	ハケメ・ナデ・押正	瓶	7.SYR7/4	口: 10%	体部外面・口縁端部に煤付着
13	702	弥生土器 磁	E16	SH284	口: 23.0	ハケメ・ナデ	瓶	7.SYR7/6	口: 20%	
14	2902	弥生土器 磁	E16	SH284 P1	口: 15.9	ハケメ・ナデ・櫛指直線文・櫛指 波状文・櫛指側突文	瓶	10YR6/3	体部上半完存	体部外面に煤付着
15	806	弥生土器 磁	E16	SH284P6-15	底: 4.3	ハケメ・ナデ	瓶	7.SYR7/1	底: 完存	底部外面にヘラ焼きあり。裏熱 により劣化
16	1605	弥生土器 磁	E16	SH284 P11	底: 5.2	ハケメ・ナデ	瓶	10YR8/3	底: 完存	被熱により劣化
17	805	弥生土器	E16	SH284附窓穴	脚幅: 6.4	ハケメ・櫛指直線文・ナデ	壺	10YR8/4	脚: 完存	
18	801	弥生土器高杯	E16	SH284 P5	脚上: 4.4	ハケメ・ヘラミガキ・ナデ	壺	2.SYR5/3	脚上: 完存	
19	1503	弥生土器高杯	D-E16-17	SH284	脚幅: 12.4	ナデ	瓶	7.SYR7/4	脚幅: 25%	
20	802	弥生土器高杯	D17	SH284 P11	脚上: 4.0	ナデ・ヘラミガキ・櫛指直線文	瓶	SYR6/4	脚上: 完存	
21	803	弥生土器高杯	E17	SH284	脚上: 2.8	ヘラケメリ・櫛指直線文・衝突文 (共) 遷かし (3方向)	壺	10YR8/2	脚上: 完存	
22	2601	弥生土器高杯	E17	SH284	口: 約11.4	ヘラミガキ	壺	7.SYR7/4	口: 30%	内外外面に煤付着
23	804	弥生土器高杯	E17	SH284	脚上: 3.6	シリボミ・ヘラミガキ・櫛指直線 文・遷かし (2カ所)・6方向)	壺	7.SYR7/4	—	
24	906	弥生土器 ミニチャニア土器	D-E16-17	SH284	口: 2.0-2.2 高: 2.2	ナデ・切れ目 (2カ所)	瓶	10YR6/2	完存	
25	907	弥生土器 ミニチャニア土器	D-E16-17	SH284	高: 5.6	ナデ	瓶	7.SYR7/4	80%	
26	906	弥生土器 ミニチャニア土器	E17	SH284	口: 2.0-2.3 高: 3.3	ハケメ・ナデ	瓶	7.SYR6/2	底: 完存	
27	3202	サスカイト石礫	E17	SH284	長: 1.81 厚: 0.3 重: 0.6 g				完存	裏裏面に素面面を残す
28	3102	サスカイト石礫	D-E16	SH284	—				基面・先端欠損	
29	3201	サスカイト石礫	E17	SH284	長: 2.56 厚: 0.64 重: 1.4g				完存	
30	3301	サスカイトRF	E17	SH284	長: 4.51 厚: 1.95 重: 20.2g				—	下端部に縦かみ・剥離痕
31	3101	サスカイト剝片	D-E16	SH284	長: 2.73 厚: 0.54				—	
32	1903	磨製小型偏平 石斧	E16	SH284	長: 8.4 幅: 5.0				ほぼ完存	刃こぼれあり
33	1203	石 砥	E16	SH284	—					
34	302	弥生土器 磁	G8	SH273 P4	腹: 26.2	ナデ	瓶	7.SYR6/6	口: 5%	
35	601	弥生土器 磁	G8	SH273 P2-3	口: 11.0 高: 22.0	ハケメ・ヘラミガキ・ナデ・櫛指 直線文・櫛指波状文・刻痕 (後)	壺	7.SYR8/6	ほぼ完存	体部2カ所に焼成後穿孔あり
36	201	弥生土器 高杯	F8	SH273 P1	口: 24.4	ナデ・遷かし (1カ所後)	瓶	10YR7/3	杯: 80%	脚部に煤付着
37	304	燒 土	F8	SH273	—		瓶	SYR5/6	—	1面のみ木目状の痕跡
38	1902	磨製小型偏平 石斧	F7	SH273 P1+6	—				ほぼ完存	
39	1802	石 砥	F8	SH273 P1+1 (主柱穴)	長: 8.7 重: 220g	中央部を研磨して形狀を通り出す			完存	
40	501	弥生土器 磁	B16	SH282 P4	口: 18.0 (5.2方向)	ハケメ・ナデ・円形浮文上に竹管 文 (5方向)	壺	7.SYR5/4	口: 完存	
41	103	弥生土器 磁	B16	SH282 P3	口: 17.0	ハケメ・貼付・ナデ	瓶	7.SYR6/8	口: 完存	
42	101	弥生土器 磁	B12	SH282	底: 5.8	ハケメ・ナデ・刻目	瓶	2.SYR5/2	底: 50%	
43	303	弥生土器 磁	B16	SH282	—	櫛指直線文・貼付凸筋・押正	瓶	10YR6/4	—	

第2表 出土遺物観察表①

No.	実物 No.	器種等	地区	遺構・層名等	計測値 (cm)	調査・技法の特徴	出土	色調	保存度	特記事項
44	1604	弥生土器 麦	B16	SH282 床上	口: 16.0	ハケメ・ナデ・刻目	墨	7.5YR7/4	口: 25%	体部外面・口縁増部に焼付層
45	503	弥生土器 麦	B16	SH282 P5	口: 13.4 高: 22.4	ハケメ・ナデ	墨	GYR8/6	70%	体部外面・口縁増部に焼付層 体部内面に炭化物付着
46	502	弥生土器 高杯	F16	SH282 P1	—	ヘラミガキ・櫛描波状文(1単位)	墨	10YR8/3	杯: 70%	折外面上に光沢のある黒色物質付着
47	102	弥生土器 高杯	B15	SH282	口: 12.6	ハケメ・ヘラミガキ・ナデ	墨	2.5YR7/2	口: 25%	口縁部に焼付層
48	3501	サヌカイト石器 未製品	B16	SH282	長: 3.91 厚: 0.98 重: 7.4g	—	—	—	—	加工痕あり
49	902	弥生土器 麦	C14	SH283	—	ナデ・櫛描直線文・ヘラ描き	墨	10YR6/4	—	
50	2003	弥生土器 麦	B15	SH283	底: 4.2	ハケメ・ナデ	墨	7.5YR5/4	底: 完存	
51	1001	弥生土器 麦	B16	SH283 P2	口: 16.2 高: 4.9	ナデ	墨	7.5YR7/4	30%	
52	2801	弥生土器 麦		SH283	口: 12.7	ハケメ・ナデ・刻目	墨	7.5YR6/6	口: 30%	体部外面上に焼付層
53	2602	弥生土器 高杯	D16	SH283 P1	脚上: 4.4	シボリメ・ヘラミガキ・櫛描直線文・透かし(2方向)	墨			
54	807	紡 織 車	D15	SH283	径: 5.7 高: 1.1 重: 27.1	ナデ	墨	7.5YR7/4		
55	3502	サヌカイト石器 未製品	D15	SH283	長: 3.8 厚: 0.91 重: 6.8g	—	—	—	—	
56	1105	砥 石	D15	SH283	—	—	—	—	—	
57	203	弥生土器 麦	F6	SH274	頸: 7.6	櫛描直線文・伴状文・ナデ	墨	10YR7/4	頸: 30%	
58	301	弥生土器 麦	F6	SH274 P2	体: 21.6	ハケメ・ヘラミガキ・斬突(負)	墨	10YR6/4	体: 10%	
59	401	弥生土器 麦	F6	SH274 P3	底: 6.7	ハケメ・ヘラミガキ・ナデ	墨	7.5YR6/4	底: 75%	
60	1602	弥生土器 高杯	B16	SH274	口: 20.1	ヘラミガキ・櫛描波状文(1単位) 櫛描直線文(1単位)・ナデ	墨	10YR7/3	杯: 25%	
61	402	弥生土器 高杯	F6	SH274 P1	口: 22.4	ヘラミガキ	墨	7.5YR7/6	杯: 75%	杯内剥離著しい
62	202	弥生土器 麦	F6	SH274	口: 23.4	ハケメ・ナデ・刻目	墨	2.5YR6/2	口: 10%	体部外面・口縁増部に焼付層
63	1401	弥生土器 麦	I16	SH288 P1	口: 8.6	ハケメ・ナデ	墨	2.5YR8/3	80%	
64	2701	弥生土器 麦		SH288?	—	ナデ・繪画(ヘラ描き)	墨	10YR8/4	肩: 10%	
65	1102	弥生土器 麦	H16	SH288	底: 4.7	ハケメ・ナデ	墨	10YR7/4	底: 完存	
66	1103	弥生土器 麦	H16	SH288	底: 4.7	ヘラミガキ・ナデ	墨	10YR8/4	底: 完存	
67	1005	弥生土器 麦	I16	SH288 P2	口: 18.8	ナデ	墨	10YR8/4	口: 15%	
68	1504	弥生土器 麦	I16	SH288 P3	口: 13.6	ハケメ・ナデ・刻目	墨	10YR7/4	口: 15%	
69	1007	弥生土器	I17	SH288	脚上: 3.8	ナデ	墨	10YR7/4	脚台: 40%	
70	1104	弥生土器 高杯	H16	SH288	脚上: 4.2	シボリメ・ヘラミガキ・櫛描直線文	墨	7.5YR7/6	—	
71	1006	弥生土器 高杯	I17	SH288	脚上: 3.8	シボリメ・ヘラミガキ・ナデ・櫛 描直線文	墨	7.5YR7/3	脚上: 完存	
72	3401	サヌカイト石器	I16	SH288	長: 2.49 厚: 0.34	周縁加工	—	—	—	
73	3402	サヌカイト剥片	I16	SH288	長: 4.48 厚: 0.97 重: 15.8	—	—	—	裏裏面に擦面をほとんど残す	
74	1801	大型船刀石斧	I16	SH288	幅: 7.4	—	—	刀先のみ	刀こぼれあり	
75	1803	投 棒?	I16	SH288	径: 3.3~3.8 重: 74g	—	—	完存	—	
76	1106	砥 石	I17	SH288	—	—	—	—	—	
77	2702	弥生土器 麦	J14	SH279	口: 9.4	ハケメ・ナデ・櫛描直線文・記号 文(2ヶ所)	墨	10YR8/4	口: 完存	
78	1004	弥生土器 麦	J14	SH279	底: 3.5	ハケメ・ナデ	墨	10YR6/2	75%	
79	1601	弥生土器 高杯	J14	SH279 P1t2	—	ヘラミガキ・櫛描波状文・ナデ	墨	10YR8/4	杯: 5%	
80	1003	弥生土器 高杯	J14	SH279	脚幅: 13.8	シボリメ・ヘラミガキ・ナデ・透 かし(2方向)	墨	10YR8/3	脚上: 25%	
81	1002	弥生土器 高杯	J14	SH279	脚幅: 9.2	シボリメ・ヘラミガキ・ナデ・櫛 描直線文	墨	7.5YR7/6	脚上: 完存	透かしなし
82	2001	土 師 實	J14	SH279	—	ハケメ・ナデ	墨	GYR8/6	—	摩滅著しい
83	1201	印 き 石	J14	SH279	—	—	—	—	一方の先端平壠	
84	1101	弥生土器 高杯	G17	SH287 P1	口: 9.0	ヘラミガキ・櫛描直線文	墨	10YR8/4	杯: 25%	
85	404	弥生土器 麦	E1	SK319	底: 3.3 高: 10.5	ハケメ・ナデ	墨	2.5YR8/2	体: 70%	
86	405	須恵器 杯 罐	M14	SK290	口: 10.9 高: 3.6	回転ナデ・ヘラ切り・ナデ	墨	SYT/1	口: 80%	

第3表 出土遺物観察表②

No.	実測 No.	器種等	地区	遺構・層名等	計測値 (cm)	調査・技法の特徴	胎土	色調	保存度	特記事項
87	1904	須恵器 杯盤	M14	SX290 P1	口: 9.5~10.9 高: 4.1	回転ナデ・回転ヘラケズリ	密	2.SYR5/2	90%	内面灰かぶり
88	406	土師器 盆	E17	SD280	口: 10.8	ナデ	密	10YR8/4		南伊勢系
89	903	縄文土器 深鉢	E17	SH284	—	縄文・比縄	粗	7.SYR6/2	—	2カ所に施成後未完成の穿孔あり
90	905	縄文土器 深鉢	E16	SH284	—	縄文・比縄	密	10YR7/3	—	
91	904	縄文土器 深鉢	E16	SH284	—	縄文	粗	SYR5/8	—	
92	2002	弥生土器 盆	L16	P1 t 2	口: 8.1	ハケメ・ナデ・櫛指直縄文・棒状浮文(3カ所)	粗	7.SYR6/6	口: ほぼ完存	
93	2005	弥生土器 盆	O18	P1 t 1	口: 14.0	ハケメ・ナデ	粗	7.SYR8/4	口: 20%	
94	1505	弥生土器 盆	T19	擾乱	口: 21.6	擬凹縄・羽状文(板)	粗	SYR5/4	口: 15%	外面に焼付着
95	1603	弥生土器 盆	T17	擾乱	口: 34.0	ハケメ・羽状文(板)・円形浮文	密	7.SYR7/4	口: 15%	
96	1506	弥生土器 盆	U18	包含層	幅: 17.2	凹縄・半哉竹管	粗	7.SYR7/4	—	胎土にチャート含み馬蹄
97	403	弥生土器 高杯	B17	SD280	脚上: 4.6	ヘラケズリ・ヘラミガキ・櫛指直縄文・透かし(1カ所残)	粗	7.SYR7/4	脚上: 完存	
98	3801	サヌカイト石織	I16	SX289	幅: 1.56					先端欠損
99	3001	サヌカイト石片	O18	包含層	長: 6.97 厚: 1.11 重: 33.6				—	
100	1901	大型輪刀石斧		包含層	—				—	
101	1202	叩き石	B17	包含層	—				—	
102	1501	須恵器 杯身	S15	擾乱	口: 9.2	回転ナデ・ヘラ切り	密	7.SYR7/1	28%	
103	2004	土師器 台付杯	I14	P1 t 1	—	ナデ・貼付ナデ	密	SYR6/6	—	
104	1502	須恵器	T18	包含層	—	回転ナデ・回転ヘラケズリ・貼付 ・ヘラ切り	密	SY7/1	—	
105	2203	弥生土器 盆	S22	SH311	底: 4.2	ハケメ・ナデ・ヘラミガキ	粗	7.SYR6/6	底: 完存	
106	2201	弥生土器 盆	R22	SH311	底: 4.0	ハケメ・ナデ	粗	10YR7/4	底: 完存	
107	2101	弥生土器 高杯	S22	SH311	口: 24.0	ナデ・櫛指直縄文	粗	7.SYR6/6	口: 25%	
108	2104	弥生土器 高杯	S22	SH311	—	ナデ・ヘラミガキ	密	7.SYR7/4	杯: 20%	
109	2202	弥生土器 高杯	S22	SH311	脚上: 3.6	ナデ・櫛指直縄文	密	7.SYR6/6	—	
110	2102	弥生土器 高杯	S22	SH311	脚上: 3.8	ナデ・ヘラミガキ	粗	7.SYR6/6	脚上: 完存	
111	2105	弥生土器 壺	S22	SH311	脚部: 8.4	ナデ	粗	SYR5/6	脚台: 60%	
112	2103	弥生土器 壺	S22	SH311	脚部: 6.7	ハケメ・ナデ	密	7.SYR7/6	脚台: 完存	
113	2401	弥生土器 壺	U24	SD307 V-2層 底: 約25.3	ハケメ・ナデ	密	7.SYR6/1	ほぼ完存		
114	2402	弥生土器 器台	R24	SD307 下層	口: 16.6	ナデ・櫛指直縄文	粗	7.SYR4/1	口: 10%	外面に赤色顔料(ベンガラ)附
115	2204	土師器 杯	S36	SH312 カマド	口: 17.8	ナデ	密	7.SYR6/8	口: 10%	
116	2304	土師器 杯	S36	SH312	底: 12.9	ナデ・貼付ナデ	密	7.SYR7/6	底: 15%	
117	2306	土師器 盆	S36	SH312	口: 15.7	ナデ	粗	SYR6/6	口: 12%	
118	2305	須恵器 盆	S36	SH312	口: 12.8	回転ナデ	密	7.SYR6/1	口: 10%	
119	2301	土師器 壺	S36	SH312 カマド	口: 22.0	ナデ	粗	10YR7/6	口: 15%	
120	2206	土師器 壺	S36	SH312 カマド	口: 19.8	ハケメ・ナデ	密	10YR6/4	口: 10%	
121	2205	土師器 壺	S36	SH312 カマド	口: 14.5	ハケメ・ナデ	密	7.SYR6/6	口: 15%	体部外側に焼付着
122	2307	加工木	S37	SH312	幅: 2.6 厚: 0.7	紙材・全面を加工している			—	炭化
123	2302	土師器 盆	T37	SB314(P1 t 1)	口: 25.0	ナデ	密	7.SYR6/6	口: 10%	
124	2303	須恵器 杯	T37	SB314(P1 t 1)	底: 9.6	回転ナデ・貼付ナデ	密	SGY7/1	底: 10%以下	
125	2306	土師器 器	S37	SB314(P1 t 1)	幅: 3.3	ナデ	粗	10YR7/4	把手方のみ	
126	2501	鉄 鉗	S15	SB314(P1 t 1)	幅: 0.6 厚: 0.4				—	
127	3702	サヌカイト石織		包含層	幅: 1.43 厚: 0.3				先端欠損	
128	3701	サヌカイト石織	T22	P1 t 3	幅: 3.27 厚: 0.69 重: 2.2 g				先端欠損	

第4表 出土遺物観察表③

## IV 調査のまとめと検討

今回の調査は、複数年にわたる調査の5年次目であり、調査区全体の状況が把握できるのは次年度以降である。したがって、本章では今年度の調査によつて確認された事柄や、新たに認識が必要になった問題を抽出することとし、遺跡全体の総論的な問題について、次年度以降の報告書などにおいて指摘することとしたい。

(木野本和之)

### 1 弥生時代

#### (1) 弥生時代後期集落について

##### a 時期

堅穴住居を中心に、弥生時代後期初頭から前葉にかけての土器群が出土した。特に、堅穴住居SH284・SH282出土の土器群は、それぞれの出土状況から一括資料といえる。概ね、弥生時代後期初頭・前葉（西の辻E式並行<sup>1)</sup>）の2時期に相当すると考えられる。また、堅穴住居の方向や環濠が再掘削を伴うことなどからも、2時期に細分することが出来る（第34図参照）。

天花寺1期（弥生後期初頭）

SD306・SD307・SH273・SH284

天花寺2期（弥生後期前葉）

SD306・SD307・SH274・SH282・SH283

第1次調査分の堅穴住居群をこれにスライドさせると、弥生後期前葉（西の辻E式並行）相当分が天花寺2期に、弥生後期中葉（上六万寺式並行）相当分が天花寺3期に該当する。

##### b 範囲

堅穴住居や掘立柱建物などの遺構は、清水谷遺跡で確認した2条の環濠の東側に位置する。また、環濠の西側では遺物もほとんど出土しなかった。よつて、環濠が集落の区画として機能していることがわかる。

環濠SD306・SD307の北側の延長上には、現状で落ち込みが続き、環濠が延びていると推定される部分がある。また、第4次調査<sup>2)</sup>の際、丘陵の東縁で傾斜に沿って落ち込み状遺構が確認されている。これらも含め、居住域の周囲に環濠が巡っていたと推定されよう（第35図参照）。また、嬉野町教育委員会が実施した試掘調査では、丘陵北方で弥生時代後期の遺物を多量に含む層が確認されている<sup>3)</sup>。したがって、集落そのものは丘陵北方まで広がっていると予想される。

#### (2) 堅穴住居について

##### a 主柱穴について

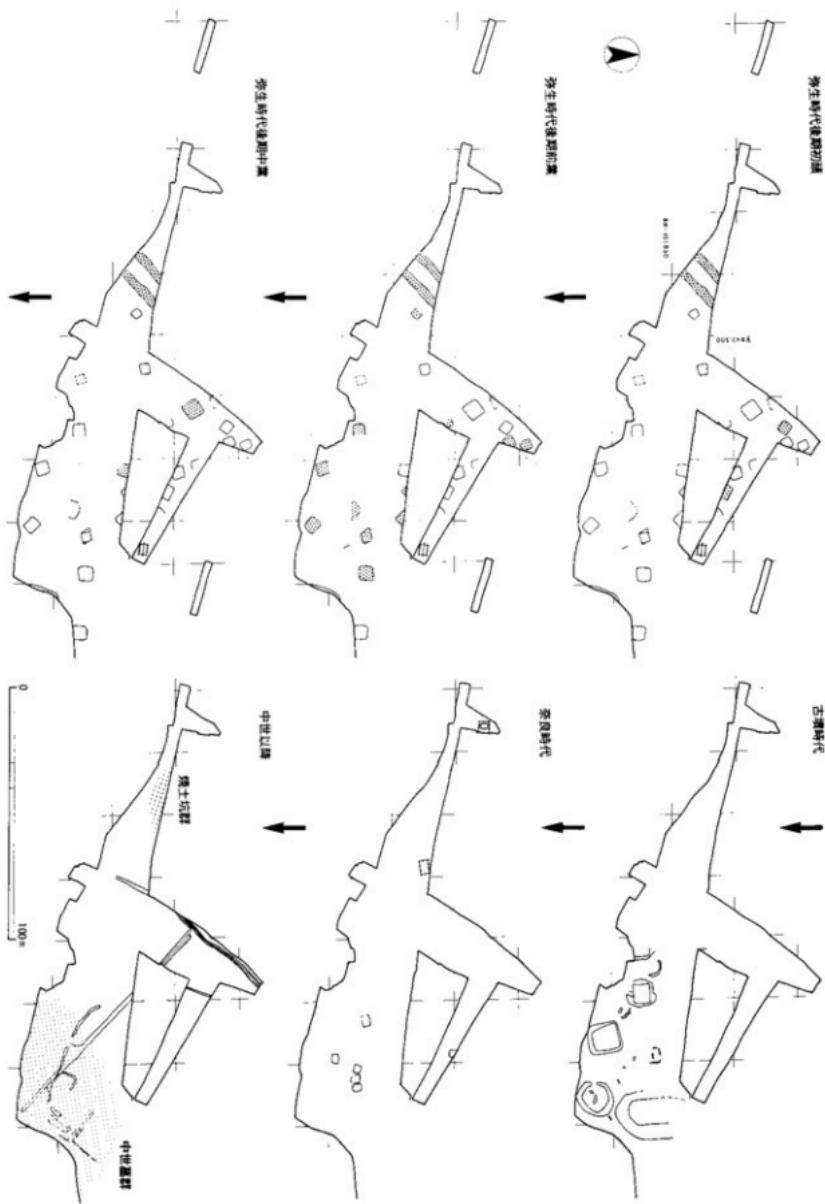
堅穴住居の主柱穴は、それぞれ4隅に配置されている。深さにばらつきがあるので、それぞれ第5表にまとめてみた。ここで注目しているのは、全体的なばらつきではなく、あくまで個々の堅穴住居ごとの差である。以下のように、3タイプに分類することができる。

①ほぼ絶対高に差がないもの。

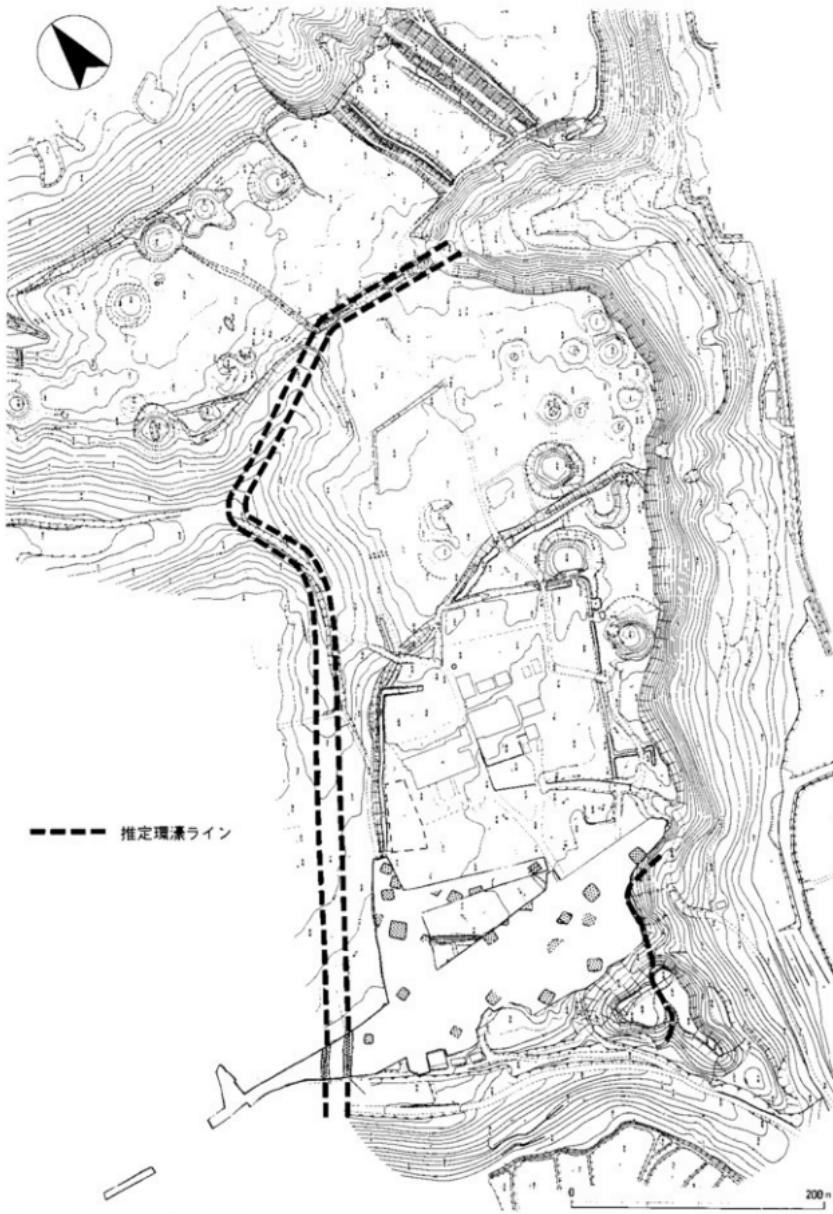
②極端に差が激しいもの。

堅穴住居番号	小地区	面積(m)						標高(m)	標高偏差	炉	火	床	床面化部分
		東西	南北	東	南	北	西						
SH284	D15～E16	4.6(4.3)	4.5	36.26	36.15	36.09	35.98	0.14	石(中心寄)	-	2段	堅穴周辺	
SH273	F7～G8	5.4	-	35.89	-	36.05	-	-	石(中心寄)	-	有り	堅穴周辺・炉以西	
SH282	B15～C16	3.9	4.1	35.81	35.8	36.18	35.77	0.02	石なし	-	2段	堅穴周辺から中心	
SH283	C15～D16	4.4	4.2	-	35.98	35.87	35.75	-	石(中心寄)	-	2段	-	
SH291	H15～I17	5.3	-	36.31	36.21	36.18	36.25	0.03	石(中心寄)	-	有り	堅穴周辺	
SH288	H15～I17	6.9	6.6	36.33	36.28	36.28	36.29	0.02?	石なし	有り	-	-	
SH274	E5～F6	3.4	-	-	-	-	-	-	埴土・石?	-	有り	中心	
SH286	E11～F12	-	-	-	-	-	-	-	-	-	有り	-	
SH279	J13～I14	-	-	-	-	-	-	-	堅い積土?	-	-	-	
SH287	G17～H17	4.7	-	35.89	35.78	-	-	-	-	-	有り	-	
SH272	E9～G11	5.1	4.9	36.18	-	36.33	36.27	-	埴土	石なし・積土	-	-	
SH316	N16～O17	4.4	3.9	36.34	36.31	36.33	36.27	0.035	-	-	有り	-	
SH317	S13～T14	-	-	35.72	35.55	35.62	35.75	0.275	-	-	2段	-	
SH311	R21～S22	3.7	3.1～3.6	-	-	-	-	-	石(中心寄)	-	2段	-	

第5表 堅穴住居観察表



第34図 遺構変遷図（県調査分の成果をもとに作成）



第35図 環濠位置想定図 1:2000

③統一性がないもの。

①には、SH291・SH288・SH316が相当する。各ばらつきは、15cm以下に収まる。

②には、SH282が相当する。1本だけ極端に差がみられる。

③には、SH284・SH317が相当する。28cm以上の差がみられる。

上記のような主柱穴の深さの差は、堅穴住居を支える柱の長さに由来するものである。柱の長さに差がある場合、上部構造で調整することはできない。長さを揃えるには、切り揃えてしまえば良いのであるが、②・③は切り揃えていない。立地的には、特に地盤に注意を払わなければならないほど軟弱な場所ではない。

ここで標準偏差に注目すると、①と②の数値にはほとんど差が生じていない。つまり、②には長さを揃える意思があるものの、一本だけは短い材しか用意できなかったと解釈できよう。次に③であるが、標準偏差にもそのばらつき具合が顕著にあらわれた。資料数が少なく確実なことはいえないが、SH284は天花寺1期に相当することから、集落初期の堅穴住居に伴うものにばらつきが大きいことを指摘しておきたい。

#### b 堅穴住居内の配置について

貯蔵穴と灰穴炉について、堅穴住居内の配置に一部例外を除き、一定の規則性が認められた。

まず、貯蔵穴は堅穴住居東壁もしくは南東壁面沿いの中央部に位置することが多い。

そして、灰穴炉は貯蔵穴の分を除いた中央部に造られている。また、炉石は必ず堅穴住居中心部寄りに据えつけられていた。よって、使用方向は一方からに限られていたと推定できる。

#### c 炉と甕の底部形態について

堅穴住居の炉は、椀状に掘り込むタイプの灰穴炉と平らなタイプの地床炉の2種類が確認できた。これは、第1次調査でも確認されており、近畿地方以西に多い前者と東日本に多い後者が同じ場所に存在することこそが、当地の地域色として評価されている<sup>4</sup>。今回の調査では、建て替えを伴うSH288が前者から後者に推移している可能性が出てきた。また、第1次調査SH22でも灰穴炉から地床炉に推移して

いる。よって、これを時期差と考えたい。

甕の底部形態に注目すると、天花寺1期～2期では平底甕が主流を占めている。しかし、天花寺3期に所属するSH22では台付甕の割合が増加しており、この後、当地域では台付甕に移行していくことを加味すれば、甕の底部形態変化に連動して炉の形態も変化していると言えよう。

#### (3) 受口状口縁（近江系）甕について

甕は、「く」字状口縁甕と受口状口縁甕が出土した。受口状口縁甕には、甕14・52がある。いずれも、胎土などから搬入されたものとは言いがたい。甕14は、横描直線文・刺突文・波状文という文様構成を近江甕と共有している。しかし、この文様構成自体は、中期以降に中勢地域で見られるものである。また、中期の「く」字状口縁甕の頸部に注目すると、近江系甕と文様構成を共有するものはくびれが甘く、内面に横ハケが見られる。この形態そのものは後期にも残っており、甕13・62がそれに該当する。

よって、ここで問題となるのは、受口状の口縁部を採用するようになることである。すでに、穂積裕昌氏が指摘されているように、山間部では中期から受口状口縁甕が主体を占めており、平野部では後期から古墳時代初頭に受口状口縁甕が主体をなしていく<sup>5</sup>。

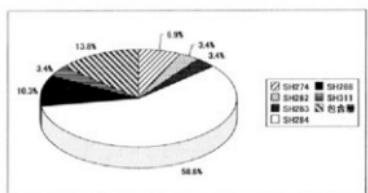
当遺跡では、第1次調査以来、受口状口縁甕が多いことが注目されている<sup>6</sup>。今回の調査では、ややその比率は低くなったものの、その存在は疑いない。むしろ、受口状口縁甕が天花寺1期に既に存在し、集落の存続期間内にその比率が高くなっていくことに注目したい。

#### (4) 記号文土器について

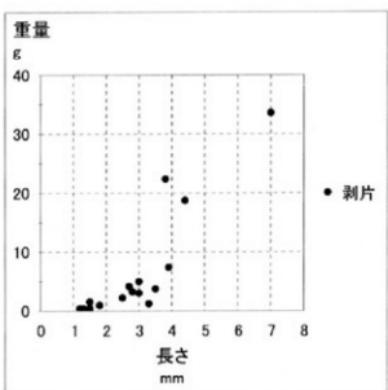
弥生時代後期に近畿地方では、長頸壺を含む直口壺の肩部に記号文が刻まれることが多い<sup>7</sup>。伊勢地方では、典型的な長頸壺が器種組成に含まれるか否か、現状では定かではないが、近畿地方と同様に一部の限定された直口壺に刻まれている。共通の認識をもつものとして評価したい。

#### (5) 石器について

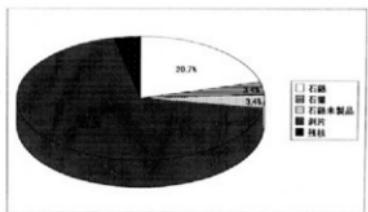
サスカイトの剥片は、堅穴住居を中心に出土した（第36図参照）。弥生中期前葉の土器がこれまでにも認識されていることから、同時期の所産が混入



第36図 サヌカイト出土地点



第37図 サヌカイト剥片計測グラフ



第38図 調査区内出土サヌカイト組成表

した可能性も捨てきれない。しかし、SH284ではサヌカイト剥片が集中して出土している。位置的には、床面に置かれている石と床面から浮いているものの水平に置かれたと見られる石(33)の周囲に集中していた。また、剥片はブロック状のものではなく、ほと

んどが5g以下の製品に近い大きさのものである(第37図参照)。よって、弥生時代後期初頭(天花寺1期)には、これらの石を作業台などをを利用して2次加工を行っていたと推定される。なお、調査区内出土のサヌカイトの組成は第38図のとおりであり、剥片が圧倒的に多い。

全体の石製品の組成としては、武器(石鎌)・工具(石錐・石斧)・砥石などがある。砥石は、置き砥石と携帯できる砥石の2種類がみられる。本来、花崗岩などのきめの粗い石材は砥石には向かないであろうが、当遺跡では花崗岩質の石材を利用している砥石が多い。

#### (6) 周辺の遺跡との関係

弥生時代後期の天花寺丘陵では、規模の大きな集落が営まれていた。しかし、その前後の時期の丘陵内では生活痕跡があまり見られない。弥生時代中期には、小谷赤坂遺跡で極微量の遺物が出土している他、馬の瀬遺跡<sup>10</sup>で2棟の住居跡が確認されている程度である。しかも、これらは中期でも前葉から中葉にかけての資料であり後期に直接続くものではない。そこで、丘陵の周囲に目を移すと、丘陵の北方約1.5kmに片野遺跡<sup>11</sup>(標高10~12m)が立地している。片野遺跡は弥生中期前葉頃から中期後葉頃まで続く遺跡である。時期的にも未確定要素を残すものの、少なくとも後期前半の遺物は確認されていない。また、丘陵東端直下に天花寺北瀬古遺跡<sup>12</sup>(標高12m前後)があり、中期後半の土器群が自然流路から出土している。この土器群は、あまりローリングを受けておらず、遠地から流れてきた遺物とは考えにくいことから、間近に集落が営まれていたものと推測される。さらに、天花寺北瀬古遺跡の自然流路出土遺物には、中期後半以降後葉までの期間の遺物が含まれておらず、この期間に天花寺北瀬古遺跡の自然流路に対し主体となる集落が連續して営まれていたとは考えにくい。

これらのことから、西日本各地で指摘されているように、中期末・後期初頭に集落の消長が見られるという現象<sup>13</sup>が、天花寺周辺も同様に確認できる。よって、天花寺丘陵の集落の前身を敢えて想定するなら、片野遺跡や天花寺北瀬古遺跡を候補に挙げられる。また、これらの遺跡は標高10~12mに立地し、

35~36mに立地する天花寺丘陵上とは立地的にも対称的であり、当地域内の弥生集落の動向を復原する上で興味深い。

(川崎志乃)

## 2 古墳時代

今回の調査では、土壇墓1基を検出した以外に当該時期の遺構は確認されなかった。ここでは、今回確認された事実と、それに対する若干の考察を行うこととする。

### (1) 古墳群について

天花寺丘陵内では、墳丘が確認できる古墳88基のほか、これまでの調査によって墳丘の消滅している古墳がさらに多く存在していることが確認されている。これまでに、調査区の東側の第1・4次調査区で7基（小谷古墳群）、同じく西側に隣接する嬉野町教育委員会調査区で5基の古墳（清水谷古墳群）が確認されており、その間に位置する今回調査区で新たに古墳が確認される可能性を想定して調査を始めた<sup>13</sup>。その結果、検出された遺構は7世紀前葉頃の土壇墓（SX290）1基だけで、期待されていた古墳は確認できなかった。

周知のように、調査区一帯は戦前の開墾による著しい削平を受けており、その際に古墳が破壊された可能性も想定したが、他の遺構の検出状況から周溝底まで破壊された削平が行われたとは考えがたい。調査区周辺の地形は、南北を谷に挟まれた通路状を呈しており、ちょうどこの部分に前述の弥生時代の環濠2条が掘削されている。この部分を境に東側に小谷古墳群、西側に清水谷古墳群、赤坂古墳群が位置することから、調査部分については古墳群の空白地帯に相当する。したがって、小谷古墳群と清水谷古墳群は別個のグループと考えるのが妥当であろう。

### (2) 遺物について

遺構に伴う遺物は、土壇墓（SX290）出土の須恵器杯蓋（86~87）の2点のみである。2点とも焼成が不良であるが、特に87は焼け歪みが著しい。第1次調査で検出されたSX64から出土した須恵器杯身も同様に焼け歪んだものであり、当地の土壇墓から出土する須恵器杯身・杯蓋は、不良品が目立つ印象を受ける。

丘陵東麓には、天花寺北瀬古遺跡がある。第1次調査では、この遺跡内を南北に縱断する自然流路か

ら古墳時代の土器が大量に出土している。その中には、前述の須恵器杯身・杯蓋同様に一見して不良品とわかるものが比較的多く含まれていたこと、攪乱埋土から須恵器窯の窯壁片が出土したことから、丘陵裾部に須恵器窯が存在した可能性を指摘した<sup>13</sup>。検出した土壇墓から出土した須恵器も、この須恵器窯と何らかの関わりをもつものであったのかもしれない。しかし、得られた情報は限られたものであり、ここで述べたことは推測の域を出るものではない。今後の調査の進展と多方面からの研究の進展に期待する。

(木野本和之)

## 3 奈良時代

今回は、竪穴住居3棟と掘立柱建物2棟を確認した。ここでは今回の調査で確認された事実と、新たに見出された課題について述べたい。

### (1) 竪穴住居について

#### a 竪穴住居の規模について

確認した3棟の竪穴住居に限らず、これまでに当地で確認されている当該時期の竪穴住居は概して小規模で、簡単な造りのものが多い<sup>14</sup>。SH312を例にとると、平面的には長辺約3.2m・短辺約2.4mで、大人2人が入ればかなり窮屈な思いをするだろうと推測される規模である。また、明確に主柱穴と断定できる遺構も認められず、上部構造も簡単な造りであると推定できるものである。したがって、長期間家族で暮らす住居というよりは、短期間に使用された仮住まいとしての性格が強いものと考えざるをえない。この竪穴住居の規模の問題は、集落立地も含め、今後の調査でも検討なければならない課題であると考える。

#### b カマドについて

今回確認した3棟の竪穴住居のうち、SH312からカマドを検出している。残る2棟について、SH275はおよそ1/3の未調査部分があり、SH313はSH312によって破壊されている部分があることから、この部分にカマドが設置されていた可能性がある。

今回確認されたカマドの構築方法は、竪穴住居を設置する段階にカマド部分に土坑を掘削し、その周囲に盛土を施す半地下式のものである。掘込部は、前庭部ないし燃焼部として利用していたものと思われるが、床面は赤変するほど被熱していない。おそ

らくは、灰等の堆積物があるためにそのような状況になったものと想像される。

カマドの袖に相当する部分に、土器片・焼土・炭が含まれていたことから、検出したカマドは、補修あるいは造り変え後のものであり、焼土・炭はその際に混入したものと思われる。

#### c 貼床下土坑について

今回の調査では、検出された竪穴住居3棟のうちSH275だけが確認できた。ちなみに、第1次調査では当該時期の竪穴住居7棟のうち、5棟で確認されている<sup>15</sup>。

居住者の踏みしめによって硬化した貼床を、調査のダメ押しとして除去してはじめて確認できる遺構であるが、埋土が貼床と同質のため極めて検出しづらいものである。埋土から遺物の出土はなかったものの、貼床直下で検出したため竪穴住居に付随するものと判断した。

極めて短期間に存在していた土坑で、遺物もほとんど出土しないことから、その性格は不明で、多くを語れないが、今後も意識的に調査を行い、更なる資料の充実を図る必要がある。

#### (2) 挖立柱建物について

今回の調査では、清水谷遺跡で2棟の掘立柱建物を確認した。1990年に実施された嬉野町教育委員会の発掘調査（第2次）の調査区東側（すなわち今回調査区に近接する部分）で当該時期の遺物が集中して出土していること、掘立柱建物1棟とピット群が確認されていることから、調査地周辺には奈良時代の掘立柱建物が複数存在したことは間違いないものと思われる。2棟の建物はいずれも調査区北寄りで確認されている。調査地は丘陵上にひろがる平坦面の南端に相当することから<sup>16</sup>、調査区以北に掘立柱建物群の中心があると推定できる。

#### (3) 集落立地について

既に指摘されているように、丘陵上に位置する集落が天華寺廃寺の荘厳な建物を眼下に見下ろすという状況は、現在の私たちの感覚では少し異様な構図に思える<sup>17</sup>。

丘陵東部の天華寺城跡に相当する範囲は、地形的に極めて平坦な面がひろがっている。今回の調査によって丘陵東部に当該時期の複数の掘立柱建物が存

在したことが判明し、この平坦面の広い範囲に集落が展開した可能性が高くなった。天華寺丘陵は、天華寺廃寺に隣接し、古代における一志郡想定地にも近い場所にある。したがって、この丘陵上に古代における何らかの重要な施設が存在していた可能性も考えられるが、今回は当該時期の遺構のごく一部を調査したに過ぎず多くを語れない。今後、天華寺廃寺や当地周辺に立地が想定される一志郡衛など周辺遺跡と関連付けた検討が必要である。

次年度以降、この平坦面をほぼ南北に貫くかたちの調査が継続される予定である。今後の調査による資料の蓄積を待ちたい。

（木野本和之）

#### 4 中～近世の天華寺丘陵

今回の調査では、天華寺城の掘ほか、これまでに確認してきた集団墓地に関連すると考えられる焼土坑群を確認した。以下では、今回の調査で判明した事実と今後の課題について述べたい。

##### (1) 天華寺城について

今回の調査で確認された遺構で、天華寺城に関連するものはSD280およびSZ1西辺部である。遺構の時期は、出土遺物が僅少のため断定はできないものの、確実に天華寺城関連と考えられる遺構である。SD280の掘削時期については、遺構に伴う遺物が僅少で限定できないものの、15世紀前後を中心とする時期と考えられる。

このSD280は、現在も天華寺の北側に残存する土壘・溝と一連のものと考えられる。これらは曲輪5を区画する目的で設定されていると考えられるが、後の天華寺占地に併せ設定された方形区画(SZ1・SD2)により一部破壊されている。SD280と一連と考えられる溝が調査区北端からおよそ50mの地点で近世土壠の下に潜り込む事実から、それが理解できる。また、SD280は小谷赤坂遺跡調査区西辺を緩やかに蛇行しながら南下する。しかし、清水谷遺跡調査区との境界部分で開墾による激しい削平を受けて消滅するため、その先がどのようなルートを辿るのかは不明である。前述の、曲輪5を区画する溝の東端が切岸部分に開口していることから、おそらくは丘陵南辺に達した後同様の形で終息するものと推測される。

断面形は部分的に異なるが、調査区北半部は「逆

台形」、南半部はいわゆる「薺研堀」の形状を呈する。これは、第1次調査で確認されたSD23の断面形状に類似するものである。遺構検出面から最も堀の深いところはおよそ0.8mである。その東側の土壘(SZ1)の調査時点での最高地点と堀底の比高は約2m程となるが、天花寺城西辺の防御施設としては十分であるとはい難い規模である。周囲の地形を観察すると、すぐ西には北側の平野から谷が入り込み、これを自然地形を利用した防御施設(堀切)と考えることも可能である。したがって、SD280およびそれに付随していたと考えられる土壘SZ1は、城館内部と外部を隔離することに重点を置いた施設で、防御は二次的なものと考え方が妥当である。隣接する清水谷遺跡の調査では、天花寺城関連遺構は確認されておらず、防御面ではやや問題をのこすもののSD280が城の西限であることはほぼ間違いないと考える。SD280については、次年度以降に天華寺北側での調査が予定されている。この部分については、城が機能していた時期の溝・土塁が良好な状態で残存しており、調査の進展により詳細な情報が得られるものと考える。

#### (2) 焼土坑群について

清水谷遺跡調査範囲内に14基を確認した。なお、遺構検出状況から同様の遺構は北側の調査区外に拡がることは確実である。土坑の平面形は楕円形・隅丸長方形を呈するが、昭和初期の開墾による著しい削平を受けており、SX310の他は検出面からの深さが10cmにも満たないような状況であった。14基中5基の底部には、被熱痕が認められる2~16個の礫が置かれていた。それ以外は、礫はないものの底部に被熱痕が認められる土坑である。被熱痕は顕著ではなく、繰り返し燃焼が行われたとは考えがたい。また、いずれの土坑も埋土に微細な人骨片・炭・焼土が混入するものの、藏骨器等の遺物は全く認められなかった。

この土坑群から直線距離でおよそ150mの丘陵東端部では、第1・4次調査時に集石を伴う多数の中世墓群と、それに伴う藏骨器や五輪塔が確認されている。藏骨器を伴わず火葬骨のみ確認された遺構もあるが、被熱痕など火葬の痕跡は認められず、墓壙内に木箱・布あるいは革袋等の有機質製の容器に納

められた後に埋葬されたものようである。調査成績から、中世墓群周辺で火葬場に相当する遺構は皆無に近い状況で、第1次調査で確認されたSX26が類似する唯一の遺構である<sup>18</sup>。中世墓群で確認された人骨は、いずれも別の場所で火葬された後に埋葬されたものと考えられ、そう遠くない所に火葬場の存在が想定されていた。このような状況から、一群の焼土坑を火葬場であると判断している。遺構は、清水谷遺跡調査区の西半部に集中しており、この部分が火葬場のエリアとされていたようである<sup>19</sup>。

#### (3) 方形区画をなす土壘と溝について

今回は、第1次で調査した南辺の土壘(SZ1)・溝(SD2)の続きとそれに続く西辺の土壘の調査を行った。調査の結果、南辺の土壘に並行する溝(SD2)は南辺部分で終息し、SD280には接続しないことが判明した。土壘南辺と西辺では土の積み方にも違いが認められる。のことから、南辺土壘は18世紀中頃に天華寺が丘陵上に移された際に築かれた近世のもの、西辺土壘は天華寺城の西辺土壘を再利用したものと考えるのが妥当であろう。（木野本和之）

#### 5 遺跡名および範囲についての問題点

周知のとおり、天花寺丘陵内には各時代の遺跡が広く散在的かつ複合的に分布しており、全体を「天花寺丘陵内遺跡群」と呼称してきている。本年度の調査では、弥生後期の環濠を巡らせる集落が小谷赤坂・清水谷の2遺跡にまたがって展開することが判明し、字別に遺跡名をつけることによる矛盾が生じてきた。

本来ならば、遺跡名の変更・遺跡範囲の再検討等の作業が必要となるが、2遺跡ともに調査は継続される予定であり、その実態がより明らかとなるのは次年度以降のことである。したがって、これらの作業は今後予定されている全調査の終了後の総括において行なうのが最も妥当であると考える。

（木野本和之）

#### 6 小 結

以上、今回の調査で得られたこと、そこから提起される問題点について若干の考察を行ってきた。

今回の調査成績は、隣接する既調査区の調査成績も合わせ、当遺跡群の実態に迫る手掛かりを得ることができたことにある。しかし、今回を含めこれまで

での調査区は遺跡群の縁辺部にあたるため、その実態はもう少し複雑であると考えられる。限られた条件下で、これだけの成果を上げることができたところに、当地の重要性が認識されよう。

次年度以降に継続される予定の調査を経て、問題点の検討を深めていきたい。  
(木野本和之)

## 註

- 1 井藤曉子「近畿」(『弥生土器5』ニューサイエンス社 1983)
- 2 1997年 三重県埋蔵文化財センター調査
- 3 和氣清草氏(鶴野町教育委員会)のご教示による。
- 4 伊藤裕作『天花寺丘陵遺跡群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1996)
- 5 砥積裕昌ほか『橿垣内遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1997)
- 6 註4文献と同じ。
- 7 藤田三郎「弥生時代の記号文」(『考古学と古代史』同志社大学考古学シリーズ 1982)
- 8 伊勢野久好ほか『天花寺山』(一志町・鶴野町遺跡調査会 1991)
- 9 森川常厚「一志町片野遺跡耕作中出土遺物」(『研究紀要』第8号 三重県埋蔵文化財センター 1999)、河瀬信幸『片野遺跡発掘調査報告』(三重県教育委員会 1986)、伊勢野久好『片野遺跡発掘調査報告』(一志町教育委員会 1986)『三重県埋蔵文化財年報』17(三重県教育委員会1987)、『三重県埋蔵文化財センター年報』3・4・6(三重県埋蔵文化財センター 1992・1993・1995)
- 10 木野本和之ほか『天花寺北瀬古遺跡・兼庭寺北裏遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1999)
- 11 『第45回埋蔵文化財研究集会 弥生時代の集落～中・後期を中心として～ 発表要旨集』(第45回埋蔵文化財研究集会実行委員会 1999)
- 12 『三重県一志町鶴野町埋蔵文化財調査概要 平成2年度』(鶴野町教育委員会 1991)
- 13 註10文献と同じ。
- 14 註4文献と同じ。
- 15 註4文献と同じ。
- 16 註12文献と同じ。
- 17 註4文献と同じ。
- 18 註4文献と同じ。この遺構は、別の場所で火葬された人骨のみを埋葬した「火葬墓」として報告されている。
- 19 地元の方のご教示によると、燒土坑群と第1次調査区との間(小谷赤坂遺跡南半部)では、開墾作業中に火葬人骨片・羅骨器と思われる土器片が出土したとのことである。したがって、中世墓はこの辺りまで広がっていたものと考えられるが燒土坑群のエリアとは一定の距離を置いている。

図 版



中村川のほとりから天花寺丘陵を望む（東から）

図版1 調査前風景



小谷坂遺跡西半部（南から）後方は天草寺



清水谷遺跡（東から）

図版2 調査後風景（1）



小谷赤坂遺跡東半部（東から）



小谷赤坂遺跡西半部（北から）

図版3 調査後風景（2）



清水谷遺跡と小谷赤坂遺跡南半部（西から）



清水谷遺跡トレンチ部分（東から）

図版4 調査の状況



小谷赤坂遺跡SZ 1（東から）



小谷赤坂遺跡SH 282（南から）



清水谷遺跡SB 293（西から）



清水谷遺跡SH 312（南から）



清水谷遺跡SD 307（北から）

図版 5 弥生時代の遺構（1）



S H 2 7 2 (北から)



S H 2 7 3 (北から)

図版6 弥生時代の遺構（2）



SH 282 (南から)



SH 283 (南から)

図版7 弥生時代の遺構（3）



SH284（南から）



SH288（北から）

図版8 弥生時代の遺構（4）



SH 286 (西から)



SH 287 (東から)



SH 279 (西から)



SH 316 (北から)



SB 319 (東から)

図版9 弥生時代の遺構（5）



SH 311 (北から)



SD 306・307遠景（西から）

図版10 弥生時代の遺構（6）



S D 3 0 6 (北から)



S D 3 0 6 断面 (南から)

図版11 弥生時代の遺構（7）



S D 3 0 7 (北から)



S D 3 0 7 断面 (南から)

图版12 遗物出土状况（1）



SH 273 (北から)



SH 274 (西から)



SH 282① (北から)



SH 282② (北から)



SH 288貯藏穴 (南から)

図版13 遺物出土状況（2）／古墳時代の遺構



S D 3 0 7 遺物出土状況（南から）



S X 2 9 0 （北から）

図版14 奈良時代の遺構（1）



SH 312 (西から)



SH 312 カマド (西から)

図版15 奈良時代の遺構（2）



SB 293（西から）



SB 314（北から）

図版16 天花寺城関連遺構



SD280 (北から)



SD280 土層断面 (南から)

図版17 焼土坑群



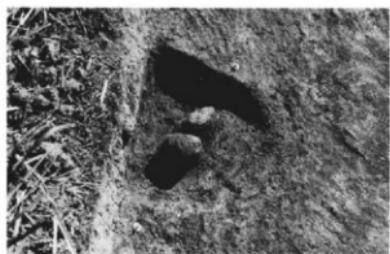
S X 3 1 0 (西から)



S X 2 9 7 (西から)



S X 3 0 4 (西から)



S X 3 0 8 (西から)

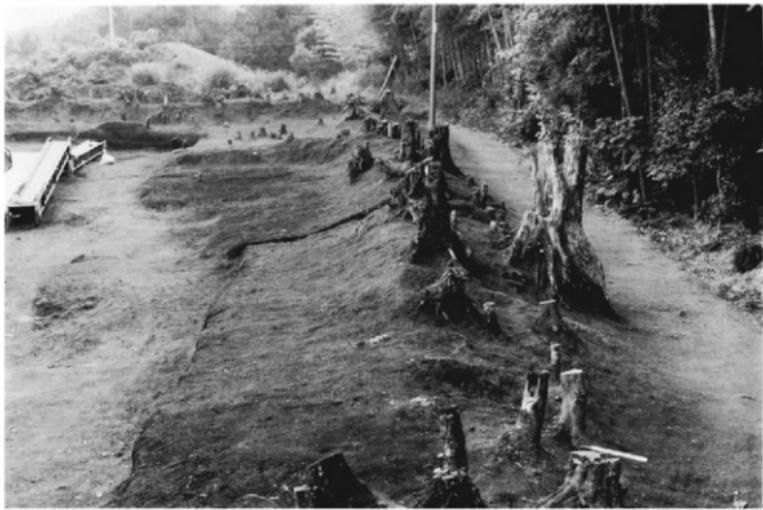


S X 3 0 9 (西から)

図版18 天花寺城関連遺構・近世遺構（1）



S Z 1 南辺と S D 2 (東から)

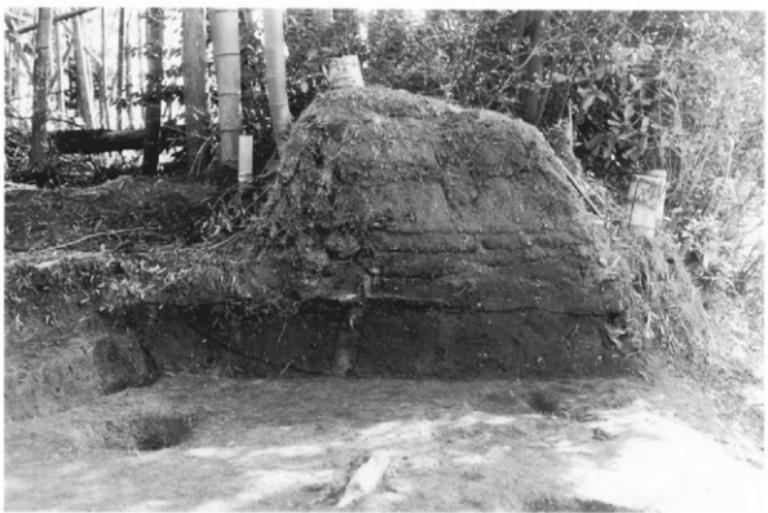


S Z 1 西辺 (北から)

図版19 天花寺城関連遺構・近世遺構（2）



SZ1西辺・SD280土層断面（南から）



SZ1南辺土層断面（西から）

图版20 出土遗物（1）



図版21 出土遺物（2）



24



25



26



54



60



64



77



85

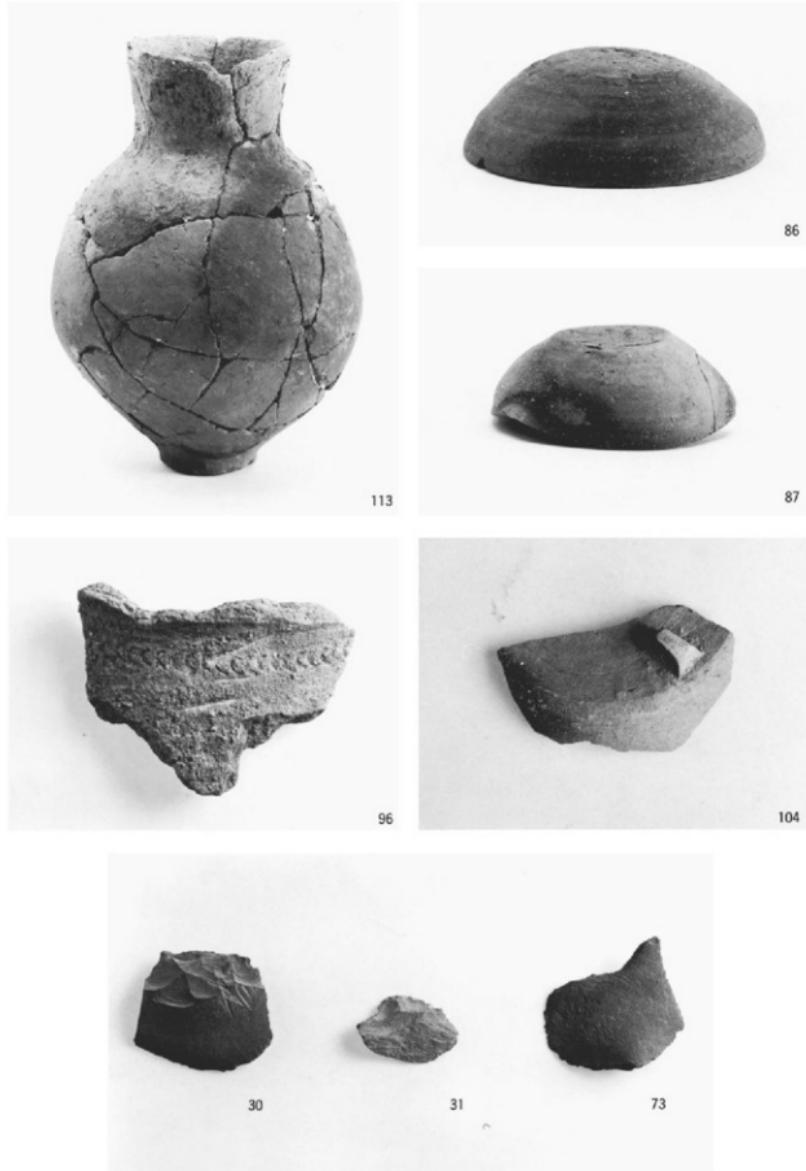


92

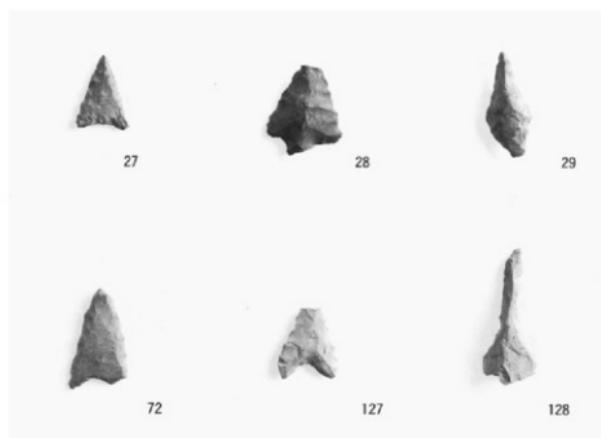
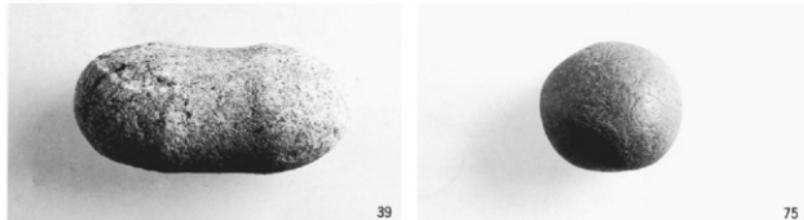


114

图版22 出土遗物（3）



図版23 出土遺物（4）



図版24 天花寺丘陵東端の垂直写真



1952年11月撮影

# 報告書抄録

ふりがな	てんげいじきゅうりょうないいせきぐんはくつちょうさはうこくよん							
書名	天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅳ							
副書名	天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第5次）・清水谷遺跡（第3次）の調査							
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	201							
編著者名	木野本 和之 川崎 志乃							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川1503番地 電 0596-52-1732							
発行年月日	西暦 2000年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
三重県一志郡 三重県伊賀市 天王寺城跡	市町村 三重県伊賀市天王寺	24405	90° 94'	34° 37'	136° 27'	19980824	4,800	一般地方道天 花寺一志塙野 インター線地 方特定道路整 備工事
三重県伊賀市 小谷赤坂遺跡	市町村 三重県伊賀市小谷	391		48°	53°	~		
三重県伊賀市 清水谷遺跡	市町村 三重県伊賀市清水谷	280				19981222		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
天王寺城跡	城跡	15世紀~	土壘・堀		土師器 繩文土器			
小谷赤坂遺跡	散布地	繩文後期						
	集落跡	弥生後期	堅穴住居12棟 柱持柱建物1棟 土坑1基		弥生土器 石器			
	古墳	古墳時代	土壇墓1基		須恵器			
	集落跡	奈良時代	堅穴住居1棟		土師器			
	境内地	江戸時代	溝・土壙		陶磁器			
清水谷遺跡	集落跡	弥生後期	堅穴住居1棟 環濠2条		弥生土器 石器			
	集落跡	奈良時代	堅穴住居2棟 掘立柱建物2棟		土師器 須恵器			
	墓地	中世	焼土坑14基				焼土、人骨を含む	

平成 12(2000) 年 3 月に刊行されたものをもとに  
平成 19(2007) 年 10 月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 201

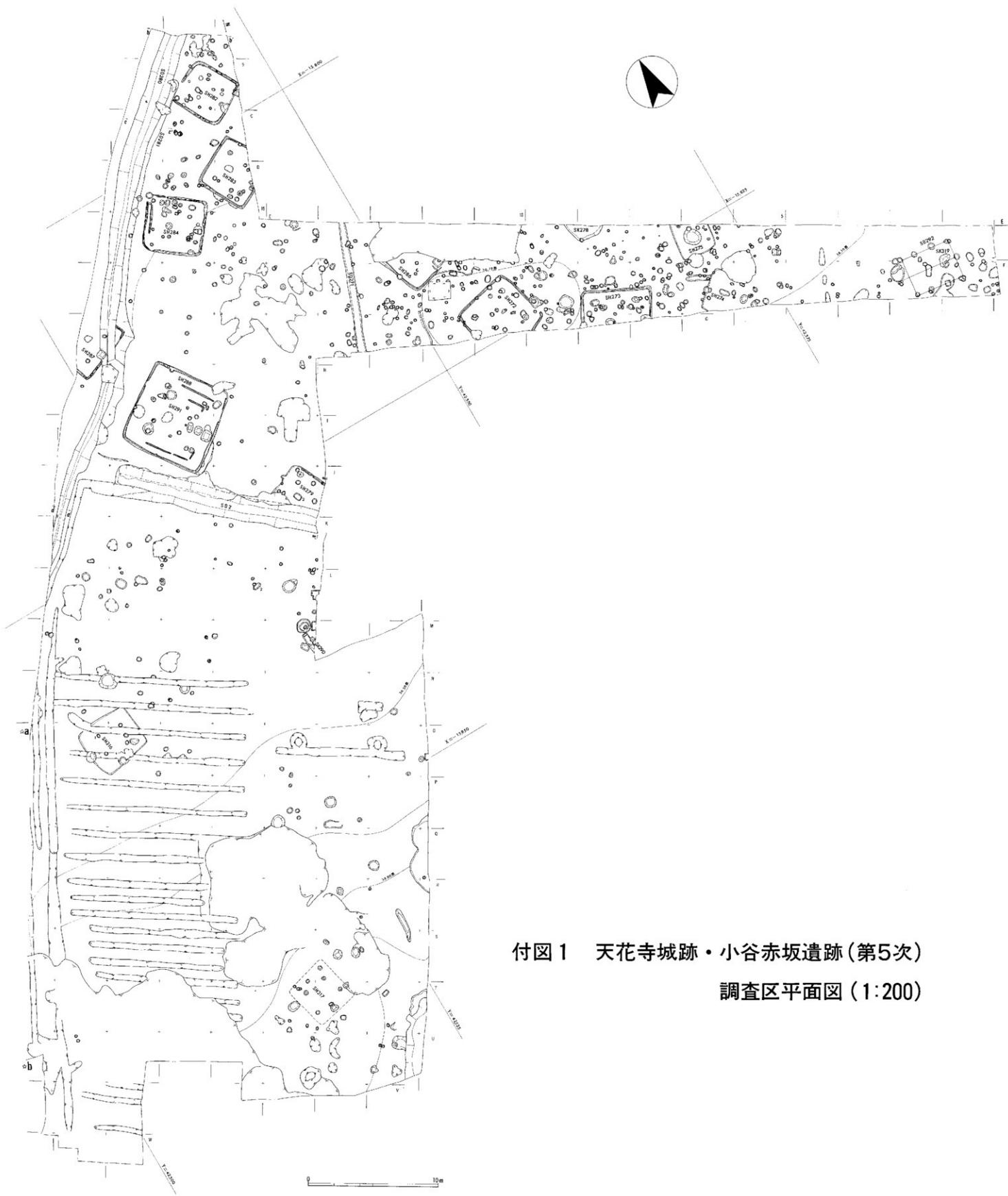
## 天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅳ

～天花寺城跡・小谷赤坂遺跡（第 5 次）・清水谷遺跡（第 3 次）の調査～

2000 年 3 月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印 刷 オリエンタル印刷株式会社



付図1 天花寺城跡・小谷赤坂遺跡(第5次)  
調査区平面図(1:200)

付図2 清水谷遺跡(第3次) 調査区平面図(S:1:200)

